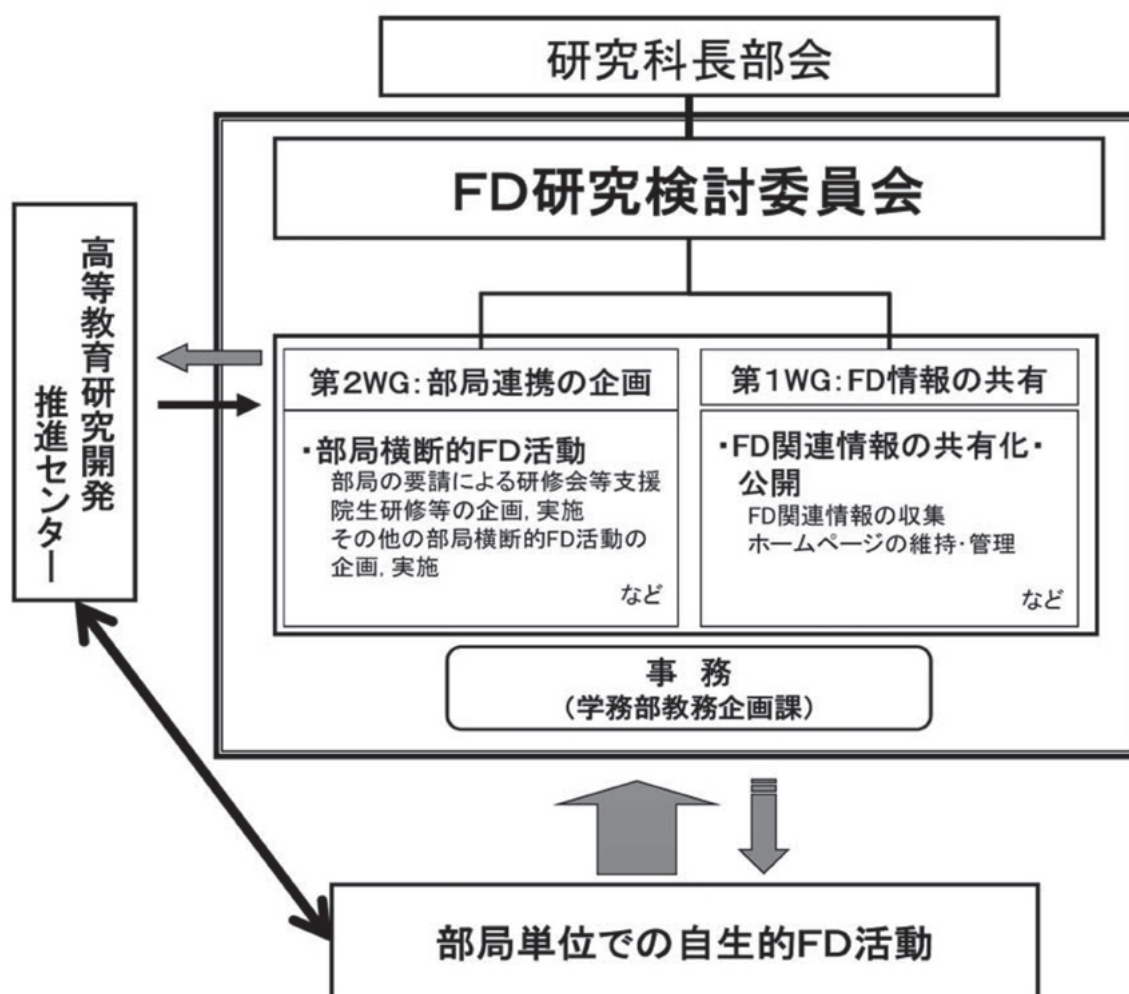


II. 学内拠点

II-1. FD 研究検討委員会

1. FD 研究検討委員会の概要

FD 研究検討委員会は、FD に関わる大学設置基準の改正（2008 年度）に先立ち、2006 年 12 月に発足した。本委員会の設置は、高等教育研究開発推進センターが 2006 年 7 月に、学部をもつ 10 の研究科を対象として、FD や教育改善に関わる活動状況やそれに対する支援の要望等についてヒアリング調査を実施したことにより、大きく促された。FD 研究検討委員会は、各研究科がそれぞれ実質的な教育改善活動に取り組んでおり、それらの取組に関する情報をお互いに共有することが有用であり、また、その場を通して、本学としてそれらの取組を組織化することが重要であるとの認識が共有され、本委員会の発足に結びついたと言える。従って、本委員会では、委員会からトップダウンで FD 活動を各研究科に対して強要するということは基本的にはせず、FD に関わる情報収集・共有の場として位置づけることから、「FD 研究検討」という委員会名にしている。また、そのことを通じて FD を実施する際に何らかの支援を必要とする場合、あるいは、研究科横断的な FD 活動などのニーズが生じた際などのサポート体制



として、高等教育研究開発推進センターが適宜支えるという体制をとっている。

委員会の当面の課題としては、当初、1) 各部局で実施されている FD 活動に関連する情報の集約、2) 他大学（外国の大学を含む）等で実施されている FD 活動等の情報提供、3) 公開研究会、勉強会等の開催、4) 各部局が企画する FD 活動への全学的支援体制の組織化、5) FD 関連情報のホームページ化、6) 「大学院生のための教育実践講座（プレ FD）」の開催、7) 本委員会の自己点検・評価の実施、以上 7 項目が取り上げられ、これらの課題を実行するため、ワーキンググループ（以下、WG）を発足させ各種課題に取り組んできた。WG は、FD 研究検討委員会と高等教育研究開発推進センターのスタッフで構成される少人数のグループから成り、情報の収集と提供、とりわけ、ホームページの維持管理をミッションとする第 1 WG、および、部局の FD 活動や部局横断型 FD 活動の支援をミッションとする第 2 WG の二つで構成された。なお、2012 年度より、委員長は農学研究科宮川恒教授が選任された。また、委員会の活動全般は、学務部教務企画課によって所掌されている。

2. FD 研究検討委員会の 2012 年度の活動概要

FD 研究検討委員会の活動は、二つの WG を中心とした活動の他、委員会としての活動の三つのレベルで活動が行われてきている。

第 1WG では、FD 研究検討委員会のホームページを開設（<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>）し、委員会の活動に関わる資料や記録、また、各部局の FD や教育改善関係の資料等を収集し、それらはホームページ上で参照・共有することができる。第 2WG では、高等教育研究開発推進センターとの共催、協力の形をとりながら、プレ FD、公開授業・検討会、部局 FD 活動支援、『京都大学の FD』の刊行などを行ってきている。

委員会全体では、2010 年度より開始された、新任教員教育セミナー、FD 研究検討委員自身を対象とする勉強会などが行われている。

2012 年度に関しては、以下のような活動が行われた。

① 第 1WG の活動

◇ホームページの充実

FD 研究検討委員会主催、あるいは、部局等との共催の FD 活動が、ホームページに公開され、情報共有が図られている。ホームページ（<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>）に掲げられている項目は、「委員会について（委員会概要、委員長挨拶、規程、活動日誌）」、「委員会の活動（主催、共催・協賛）」、「勉強会（勉強会、授業評価ワークショップ）」、「教育・学習実態調査（自学自習等実態調査）」、「リソース（委員会刊行物、部局の FD、教員の取り組み、全学の教育改善、部局の FD リソース）」となっている。

例えば、「委員会の活動」のサイトには、FD 研究検討委員会主催、あるいは、共催・協賛などの活動（プレ FD、新任教員教育セミナー、公開授業・検討会、勉強会など）の案内と実施記録が掲載されている。また、「自学自習等実態調査」のサイトには、2011 年度に実施された自学自習等実態調査の結果について、FD 研究検討委員会で報告された資料が http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/pdf/post05_01.pdf に掲載されている。「リソース」のサイトには、FD 研究検討委員会の勉強会などで持ち寄られた各部局で行われている授業評価アンケートが、<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post04.php> にアーカイブされている。

② 第2WGの活動

◇大学院生のための教育実践講座（第8回）

2012年8月7日（火）10:00～18:30に、京都大学百周年時計台記念館2階の国際交流ホール、および、会議室を利用して実施された。参加者数は、Basicコース32名、Advancedコース16名の計48名が参加し、総長の修了証が授与されている。詳しくは、Ⅱ-4.を参照されたい。

◇文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科では、オーバードクター（OD）の若手研究者の学部学生を対象としたリレー講義を、公開授業・検討会として2012年度も引き続き実施している。本年度も、昨年度に引き続き、哲学基礎文化学系ゼミナールⅠ（木曜日2限）、基礎現代文化学系ゼミナールⅠ（木曜日5限）、行動・環境文化学系ゼミナールⅠ（木曜日1限）で、前期、後期に行われている。リレー講義担当講師は相互に参観し、自分の授業実施も含めて、上記ゼミナールの公開授業および20分程度の授業検討会に8回以上参加すること、および、2013年2月14日（木）13:00～18:30に行われる事後研修会に参加することを前提として、総長の修了証が授与される。詳しくは、Ⅱ-3.を参照されたい。

◇公開授業・検討会

高等教育研究開発推進センターで始めたのが起源と言われる「公開授業・検討会」は、授業参観後、1時間程度の短い時間であるが、授業検討会を、担当講師と授業参観者で行うことが特徴の一つとなっている。2012年度は、FD研究検討委員会を通じて実施した公開授業・検討会は、後期11月29日（木）2時限（10:30～12:00）、吉田南総合館（北棟）共北25講義室で行われた、英語によるKUINEP授業『オープンエデュケーションの世界（担当：飯吉透高等教育研究開発推進センター教授）』であった。引き続き、吉田南1号館201室で、授業検討会が行われた。詳しくは、Ⅱ-2.を参照されたい。

◇工学部教育シンポジウム

工学部教育シンポジウムが2012年11月30日（金）16:30～19:45に、京都大学桂キャンパスの桂ホールにて行われた。高等教育研究開発推進センターより「主体的学びをいかに実現するか——中教審答申と自学自習実体調査に基づいて」、北野正雄研究科長より「新しい教養・基礎教育の実現をめざして——国際高等教育院構想」の話題提供のあと、地球工学科伊藤禎彦先生、物理工学科長谷川将克先生、電気電子工学科土居伸二先生から、「私の授業」と題して、それぞれご自身の授業の紹介があった。最後に、建築学科の加藤直樹教授より「成績データベースの概要」の報告、本シンポジウムの進行を担当された新工学教育プログラム実施専門委員会委員長の三ヶ田均先生の委員長総括の後、全体でのディスカッションが行われた。プログラム、及び、センターからの話題提供のスライドに関しては、Ⅱ-6.を参照されたい。

◇『京都大学のFD2012』の発刊

京都大学のFD活動のさらなる情報共有のため、また、アカウントビリティを示す資料の一つと位置づけられるニューズレター『京都大学のFD2012』を発刊する予定である。

③ 委員会全体の活動

◇新任教員教育セミナー

2010年度より開始された新任教員教育セミナーが、本年度も2012年9月7日（金）13:00～18:30、百周年時計台記念館2階で実施された。ミニ講義、「私の授業（鎌田浩毅人間・環境学研究科教授）」の紹介、グループ討論などが盛り込まれたプログラムに、新任教員88名の熱心な参加があった。詳しくは、Ⅱ-5.を参照されたい。

◇FD 研究検討委員会「勉強会」

FD 研究検討委員会では、高等教育の動向に関わる情報共有や京都大学内の各部局で組み込まれている FD 活動の情報交換を図るために、2010 年度より「勉強会」を行っている。

本年度第 1 回の勉強会（通算第 6 回）は、2012 年 10 月 10 日（水）13：30 より、百周年時計台記念館・国際交流ホールにて開催された高等教育研究開発推進センター主催の第 84 回公開研究会を、FD 研究検討委員会の勉強会として位置づけ実施された。本研究会では、ハーバード大学エリック・マズール教授の「ピア・インストラクションによるアクティブラーニングの深化」のテーマによるシンポジウムの形で開催された。本委員会からの参加は 6 名であった。

第 7 回「勉強会」は、2012 年 11 月 26 日（月）14：00～16:30、附属図書館・ライブラリーホールにて、学生が抱えるメンタル面での問題、障害に関わる問題についての講演によって実施された。FD 研究検討委員会宮川恒委員長の挨拶、学生担当理事補間藤徹教授の趣旨説明に引き続き、「学生が抱えるメンタルヘルス上の問題点と対応」と題して、カウンセリングセンター 青木健次教授より講演があり、続いて、「本学における障害のある学生への支援体制」と題して、障害学生支援室コーディネーター村田淳氏より講演があった。本委員会以外にも公開され、39 名の参加（内、FD 研究検討委員 15 名参加）があり、熱心な質疑応答が行われた。

さらに、2013 年 3 月 19 日（火）10:00～12:00 に、附属図書館ライブラリーホールにて、お茶の水女子大学教育開発センター半田智久教授を招聘して、FD 研究検討委員会委員、教育制度委員会委員、各研究科長及び教務事務担当者等を対象とした GPA 制度に関する勉強会を開催する予定である。

（大塚 雄作）

II-2. 公開授業・検討会

1. 公開授業・検討会とは

公開授業・検討会は、京都大学 FD 研究検討委員会の主催による全学的な FD 活動であり、本センターでは、「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成」プロジェクトにおける学内連携拠点の一環としてこれを支援している。公開授業・検討会は、例年は前期・後期に 1 回ずつ年に 2 回行われているが、平成 24 年度は下記の通り後期に 1 回のみの実施であった。

2. 全学共通教育科目 A 群『オープン・エデュケーションの世界』（講義） 飯吉 透 教授（高等教育研究開発推進センター）

日時：平成 24 年 11 月 29 日（木）2 時限

公開授業 10:30 ～ 12:00（吉田南総合館北棟 25 教室）

検討会 12:15 ～ 13:15（吉田南 1 号館 201 会議室）

世界中に広がるオープン・エデュケーションの機運は、高等教育の在り方そのものを大きく変えつつある。本授業の目的は、最新のオープン・エデュケーションのトレンドや事例を紹介し、その教育的・社会的可能性について、グループ・ディスカッションなどを通して探究と理解を深めることにある。また、この講義は、京都大学国際教育プログラム（KUINEP: Kyoto University International Education Program, クイネップ）としての開講科目でもあり、授業は英語で行われた。授業の様子およびディスカッションの詳細な内容は、「京都大学の FD 2012」に全文掲載される予定なので、そちらを参照されたい（京都大学 FD 研究検討委員会のサイト内からも全文ダウンロード可能となる）。



（高橋 雄介）

II-3. 文学研究科プレ FD プロジェクト

1. 文学研究科プレ FD プロジェクトの概要

1-1. プレ FD とは何か

プレ FD とは PFF (Preparing Future Faculty) プログラムとも呼ばれ、大学教員のキャリアに向けて大学院生（主に博士課程学生。ポスドクも含む）を準備させることである。日本国内でも、研究大学を中心として様々な取り組みが見られるようになった。大学教員の職務を教育、研究、社会貢献、管理・運営に分類した場合、プレ FD は本来、それぞれの役割に関する理解、知識や技術の獲得、あるいは意欲や信念の醸成などをめざすものであるが、とりわけ大学教育への準備を意図した取り組みが近年の課題となっている。本学での取り組みもその一つである（半澤・田川・田口・松下・田林・小城・溝上・杉山, 2011）。

1-2. 文学研究科プレ FD プロジェクト

文学研究科プレ FD プロジェクトは、文学研究科と FD 研究検討委員会が共同で主催する文学研究科のオーバードクター (OD) によるリレー講義形式のゼミナールであり、公開授業とその検討会、そして年度末の研修会によって構成されている。具体的には、全ての授業を公開とし、毎回の授業終了後 20 分程度の授業検討会を行う。一人の講師は 2 回から 3 回の授業を行い、自分の授業が無い時には他の講師の授業を参観、検討会への参加という形でゼミナールに参加する。すべての授業が全て終了した段階で研修会を行い、自分自身の教育活動を振り返る作業を行う。この一連の流れが文学研究科プレ FD プロジェクトである（図 1）（半澤ほか, 2011）。

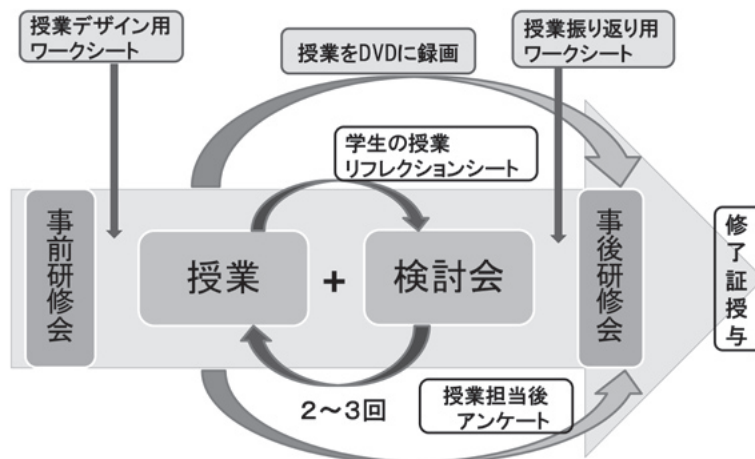


図 1. 文学研究科プレ FD プロジェクトの流れ (2012 年度)

1-3. 2012 年度文学研究科プレ FD プロジェクトスケジュール

1-3-1. 前期スケジュール

文学研究科プレ FD プロジェクト事前研修会（資料 1 参照）

2012 年 4 月 5 日 京都大学文学部新館

<プログラム>

第1部：プロジェクトの全体像をつかむ

- 挨拶（文学研究科准教授 伊勢田哲治）
- 文学研究科プレ FD プロジェクトの概要説明（文学研究科教授 福谷茂、高等教育研究開発推進センター准教授 田口真奈）
- 昨年度の授業の様子（高等教育研究開発推進センター特定助教 半澤礼之）
- プレ FD プロジェクトに参加した先輩の声（文学研究科教務補佐員 小城拓理・田林千尋・田中一孝）

第2部 授業設計について知る

- 「授業のデザインと振り返りーワークシートの活用ー」（高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代）

第3部 コースを考える

- グループミーティング

行動・環境文化学系ゼミナール

2012年4月26日、5月10日、毎週木曜日 1 時限 8:45～10:15

検討会 10:20～10:40

<授業テーマ>

山崎 瑤子 印欧語比較言語学とはーデータと方法論ー
金 京愛 言語比較による発見・日本語の発見

哲学基礎文化系ゼミナール

2012年4月12日～7月26日、毎週木曜日 2 時限 10:30～12:00

検討会 12:00～12:20

<授業テーマ>

濱崎 雅孝 哲学はキリスト教から何を学べるか？
千葉 清史 カントの超越論的観念論
中嶋 優太 「善の研究」の成立とその周辺
永守 伸年 倫理学と信頼の問題
田中 一孝 フィクションと感情ー古代ギリシアにおける「芸術」理論
前期の総括セッション

基礎現代文化学系ゼミナール

2012年4月12日～7月26日 毎週木曜日 5 時限 16:30～18:00

検討会 18:00～18:20

<授業テーマ>

小野 容照 「野球」を通して考える朝鮮半島の近代
佐藤 夏樹 ラティノー像の形成
稲葉 肇 原子の存在をめぐって
網谷 祐一 理性と進化
坂 堅太 戦後日本における文学と政治の関係について
吹戸 真実 冷戦期アメリカ合衆国の中台政策と東アジア

1-3-2. 後期スケジュール

行動・環境文化学系ゼミナール

2012 年 10 月 4 日～2013 年 1 月 10 日 毎週木曜日 1 時限 8:45～10:15

検討会 10:20～10:40

<授業テーマ>

石井 和也	都市と地域の社会学
富田 愛佳	ことばのフィールドワーク・タイ・ルー語の事例
川田 拓也	コーパスを用いた言語研究—フィラーの分析を中心に—
翁 和美	認知症の福祉の場の社会学

哲学基礎文化系ゼミナール

2012 年 10 月 4 日～2013 年 1 月 17 日 毎週木曜日 2 時限 10:30～12:00

検討会 12:00～12:20

<授業テーマ>

杉本 俊介	「倫理」とは何か：ピーター・シンガーが巻き起こす論争
古荘 匡義	宗教について考える
薄井 尚樹	「相手を理解すること」を考える—デイヴィッドソンを手がかりに—
矢頭 英理子	近代の女性像
田鍋 良臣	「神話の哲学」入門
	後期の総括セッション

基礎現代文化学系ゼミナール

2012 年 10 月 4 日～2013 年 1 月 24 日 毎週木曜日 5 時限 16:30～18:00

検討会 18:00～18:20

<授業テーマ>

中尾 央	進化発生生物学の哲学
川寄 陽	朝鮮における「皇民化」政策と朝鮮
富永 望	イギリスから見た戦後天皇制
大西 勇喜謙	科学的实在論論争入門
山本 昭宏	戦後日本の核エネルギー認識の構築とその変容

2. 文学研究科プレ FD プロジェクトを振り返って：文学研究科のコーディネーターから

本プロジェクトは、3つの系が開講するゼミナールをプレ FD の対象としており、それぞれの系を担当する文学研究科の教員が、コーディネーターとして各系の統括を行っている。ここでは、コーディネーターによる本プロジェクトの振り返りを示す。

行動文化学系の今年度後期の入門ゼミナールでは、3人の講師により合計9回のプレ FD 授業が行われました。どの講師の方も、毎回の授業の反省を次回の授業に活かして努力されている様子がうかがえました。回数を重ねるにつれ、受講生の反応や様子を見ることも少しずつできるようになっているように思いました。また、他の人の授業を、受講する立場ではなく、授業する側として見学することは大変貴重な経験であることも、改めて感じました。

自分が受けてきたたくさんの授業、また、自身の授業経験を通して痛切に感じているのは、学生たちに伝えること、学生をインスパイアすることの大切さと難しさです。今年度、プレFDを体験された講師の方々には、さらにFDを超越するような存在感のある教師を目指していただけだと願っております。

(文学研究科教授 田中 和子)

このような授業が行なわれていることはまだ教員の間にもよく知られてはいないのではないと思う。本年度コーディネータとしてかかわってみて感じたのは、さすがは京大だな、ということである。講師として登場するODたちのなかには、大学の教壇に立つのはこれがはじめてという人も結構いた。もちろんご本人は眠れぬ前夜を過ごしたかもしれない。しかし参観している側からすると、皆さん達者で堂々とした先生ぶりだったというほかなかった。受講者も先生方の高水準の授業を熱心に聴講していた。私自身もいい勉強をしたという思いがいつもこった。こうなると授業後の検討会は自分の感想や疑問をすぐに講師やほかの参観者にぶつけられるありがたい場にはやがわりである。高等教育研究開発推進センターの先生方からはいつも新鮮な観点をお聞きすることができた。とかく「外圧」のように感じられがちなFDであるが、少なくとも京大ではそういうものにならないようにとされている努力のひとつがこの「プレFD」だろうと思う。いちどぶらりと参観においでになっては、と先生方におすすめしたい。

(文学研究科教授 福谷 茂)

かつて学生のアルバイトの定番といえば、塾講師と家庭教師であった。もちろん、他の職種よりも時給がよかったからである。しかし、講師業も長引くデフレの例外たりえず、たまに時給のよい講師の口があっても勉学に差し障るほどの激務であることが多いと聞く。そのようなわけで学生たちは講師業から離れていったが、このことは学生たちが「教師」の経験を持つ機会を失うことをも意味していた。「研究者」として生きていくために必要とされる「教師」としての技量を学外の社会で磨く機会が失われた以上、大学がそのような機能の一端を担わねばならない。プレFDが必要とされるようになった背景のひとつであろう。プレFDの授業担当者たちには、口うるさい京大生を納得させるという課題が課されるが、そこで必要とされる技量は、集中力のない中・高生に英文法を理解させるための技量と、存外共通点が多い。教師でも学生でもない「コーディネーター」という立場から授業を眺めて、改めて感じたことである。

(文学研究科准教授 小野沢 透)

3. 『未来の大学教員を育てる—京大文学部・プレFDの挑戦』

今年度の本プロジェクトの成果として、プロジェクトに関する書籍の執筆が挙げられる。このプロジェクトに関わってきた文学研究科、センターのスタッフのほぼ全員が協力して執筆したことが特徴といえるだろう。以下がその目次であり、今年度中に勁草書房より刊行される予定である。

『未来の大学教員を育てる—京大文学部・プレFDの挑戦』

田口真奈・出口康夫・高等教育研究開発推進センター編著

目 次

刊行に寄せて

京都大学文学研究科長・文学部長 服部良久

本書の内容と構成

(田口真奈)

第Ⅰ部

ドキュメント・プレFD

(出口康夫)

第Ⅱ部

第1章 日本の大学教員養成システムとOD問題

(松下佳代)

第2章 プレFD とは何か

(田口真奈・松下佳代)

第3章 京都大学のプレFD 活動

—相互研修型FDをめぐる葛藤史に焦点つけて—

(田中毎実)

第4章 京都大学大学院文学研究科プレFDプロジェクト誕生の背景

(苅阪直行)

第5章 プレFDプロジェクトの概要と実施体制

(田口真奈・出口康夫)

第6章 教務補佐員の仕事

(田林千尋・赤嶺宏介)

第7章 事前・事後研修会の実施

(田口真奈)

第8章 プレFDプロジェクトを通じた参加者の変化

(溝上宏美・杉山卓史・三宅岳史)

第9章 学生の声を通して理解する文学研究科プレFDプロジェクト

(半澤礼之・小城拓理)

第10章 プレFD研修プログラム・コーディネーターの二年半(永井和)

おわりに

高等教育研究開発推進センター長 大塚雄作

資料

- 1 京都大学文学部・文学研究科学修の仕組み (坂本尚志)
- 2 京都大学文学部・大学院文学研究科の教育の流れ (坂本尚志)
- 3 過去の講義一覧と担当者一覧
- 4 プレ FD ポスター

用語説明

(坂本尚志・田川千尋)

4. おわりに

オーバードクターを対象とした FD (プレ FD) という本プロジェクトは、全国的に広がりを見せている活動ではあるものの、まだ試行段階にあるといえる。本プロジェクトに参加した OD からのコメントや文学研究科スタッフの声、そして講義を受講した学生の声といった、2012 年度の活動によって得られたさまざまな視点を生かして更に本プロジェクトを良いものにしていくことが、2013 年度の課題であるといえるだろう。

引用文献

- 半澤礼之・田川千尋・田口真奈・松下佳代・田林千尋・小城拓理・溝上宏美・杉山卓史(2011). 文学研究科プレ FD プロジェクト 京都大学高等教育叢書 29 相互研修型 FD 拠点活動報告 2010、37-56
- 半澤礼之・田口真奈・田川千尋・松下佳代(2011). 学習者の多様性に基づく授業のリフレクシヨンー京都大学文学研究科プレ FD プロジェクトからー 京都大学高等教育研究 17、123-133

(坂本 尚志、田川 千尋、田口 真奈、松下 佳代)

2012年度 文学研究科プレFD事前研修会プログラム

日時：平成24年4月5日（木）13時00分

場所：文学部新館2階第7講義室

開始時間

13:00

1部：プロジェクトの全体像をつかむ

・挨拶

文学研究科 准教授

伊勢田哲治

・プロジェクトの概要説明

文学研究科 教授

福谷 茂

高等教育研究開発推進センター 准教授

田口真奈

・昨年度の授業の様子

高等教育研究開発推進センター

特定助教

半澤礼之

・先輩の声

文学研究科 教務補佐員

小城拓理・田林千尋・田中一孝

13:30

2部：授業設計について知る

・授業のデザインと振り返りーワークシートの活用ー

高等教育研究開発推進センター

教授

松下佳代

13:50

3部：コースを考える

・グループミーティング

＝ 2012年度 文学研究科プレFD 事前研修会 ＝

2012.4.5



授業のデザインと振り返り ーワークシートの活用ー

松下 佳代

高等教育研究開発推進センター
Matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

1

1. 授業を創る

● 授業の階層性

- プログラム（4年間） ……教員集団
- └─ コース（半期）
- └─ 授業（1コマ） } 授業を創る ……教員個人

● 授業を創る

- (a) コースデザイン：1コース（半期）の授業
- (b) 授業デザイン：1時間の授業

2

2. 今回の授業

● コース（科目）の性格

- 学部共通科目
- 受講生：1～4年生（1～2年生中心の入門科目）
- 授業形態：指定なし → 自由度が高い
- 担当：リレー式 → 担当者によってバラバラになりがち



● コースについてのコンセンサスが必要 → 第3部

- 授業にもりこむべき内容
- 授業間の関連
- 評価基準 など

3

3. 授業デザイン

● 授業で何を伝えるか

- 「知のたのしみ 学のため」を伝えることが何より重要

「個々の教師にできることは、自らが面白いと感じたことを、生き生きとした自分の言葉で、率直に、目の前にいる学生に伝えることしかない。そのことで、学問の知的面白さに対する共感の輪を生み出す授業を、今後、OD たちが職を得ていこう各大学で展開していくこと。このような、学問の魅力の受け渡しの連鎖を、あちこちのクラスルームで実現させ、人文学という、ややもすれば吹き消されがちな灯火を、次の世代に引き継ぎ、広めていくこと。」（出口康夫先生）

（田口・出口・赤嶺・半澤・松下「未来のファカルティをどう育てるか—京都大学文学研究科プレFD プロジェクトの試みを通じて—」『京都大学高等教育研究』第16号、2010年）

4

● 授業をデザインするために

- learningが生起しなければteachingとはいえない
 - 何を・どう教えるか → 何を・どう学んだか
 - 知識中心 → 知識と能力
- <テレビ視聴的授業>ではなく、<学生がコミットし、学生に深い学習を引き起こすような授業>を
 - 講義形態は動機づけと能力が高い学生には有効だが…
 - 大学院に進学するのではない学生も視野に

● 「授業デザインワークシート」 → 別紙、事例

- 授業前に、授業をデザインするためのツール
- 自分の担当回の授業すべてについて作成

5

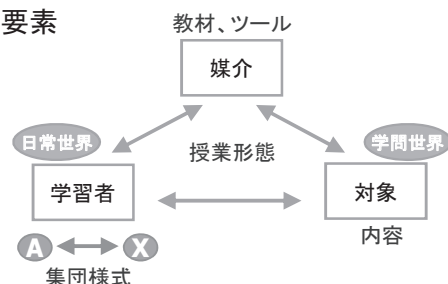
3.1 授業の構成要素

● 「授業デザイン用ワークシート」の各カテゴリー

(cf. Engeström, 1994)

● 授業の構成要素

- 時間
- 内容
- 教授機能
- 授業形態
- 集団様式
- 教材
- ツール
- (メモ)



6

3.2 授業のプロセス

●「授業デザイン用ワークシート」のタテの流れ

● 授業のプロセス

- 教授機能を実現していくプロセス
 - 日常世界と学問世界を橋渡しするイメージ
 - 日常世界の現象・問題 の認識
 - ↓
 - 学問世界の概念・原理 の理解
 - ↓
 - 日常世界の現象・問題 の解釈・解決
- 学問分野のスタイルにあった教授法
 - 学問の方法を部分的に体験させる
 - 自分の経験をまじえて物語的に説明する

7

4. 授業の振り返り

●「授業振り返り用ワークシート」→別紙、事例

- 授業後に、授業を振り返るためのツール
- 基本的には、「授業デザインワークシート」と同じ
 - 違いは、「メモ」と「気づいた点」のみ
- 自分の行った授業のうちの1回について、DVDを見ながら作成

●「担当授業後アンケート」

8

5. スケジュール

2012年度

4/5 事前研修会

研修会終了後 MLでワークシート①②③とアンケート⑦を配布

授業(2～3回)＋授業検討会(8回)

授業前 授業デザイン用ワークシート①作成(毎回分)
 毎回授業後 学生の授業リフレクションシート⑥、
 授業デザイン用ワークシート①を使って検討会
 担当回終了後 授業DVD(2～3回分)を配布
 授業振り返り用ワークシート②作成(1回分)
 授業担当後アンケート⑦記入

～1/31 ワークシート①②とアンケート⑦を回収

2/14 事後研修会

全員のワークシートとアンケートを使って研修

9

6. 最後に

● お願い

- ワークシートを作成することが目的ではありません。
- ワークシートは、あくまでも、授業のデザインと振り返りのためのツールです。
- できれば、デジタル形式でお願いします。

● 問い合わせ

- わかりにくい点があったら、各系の教務補佐員さんに尋ねるか、MLに流してください。

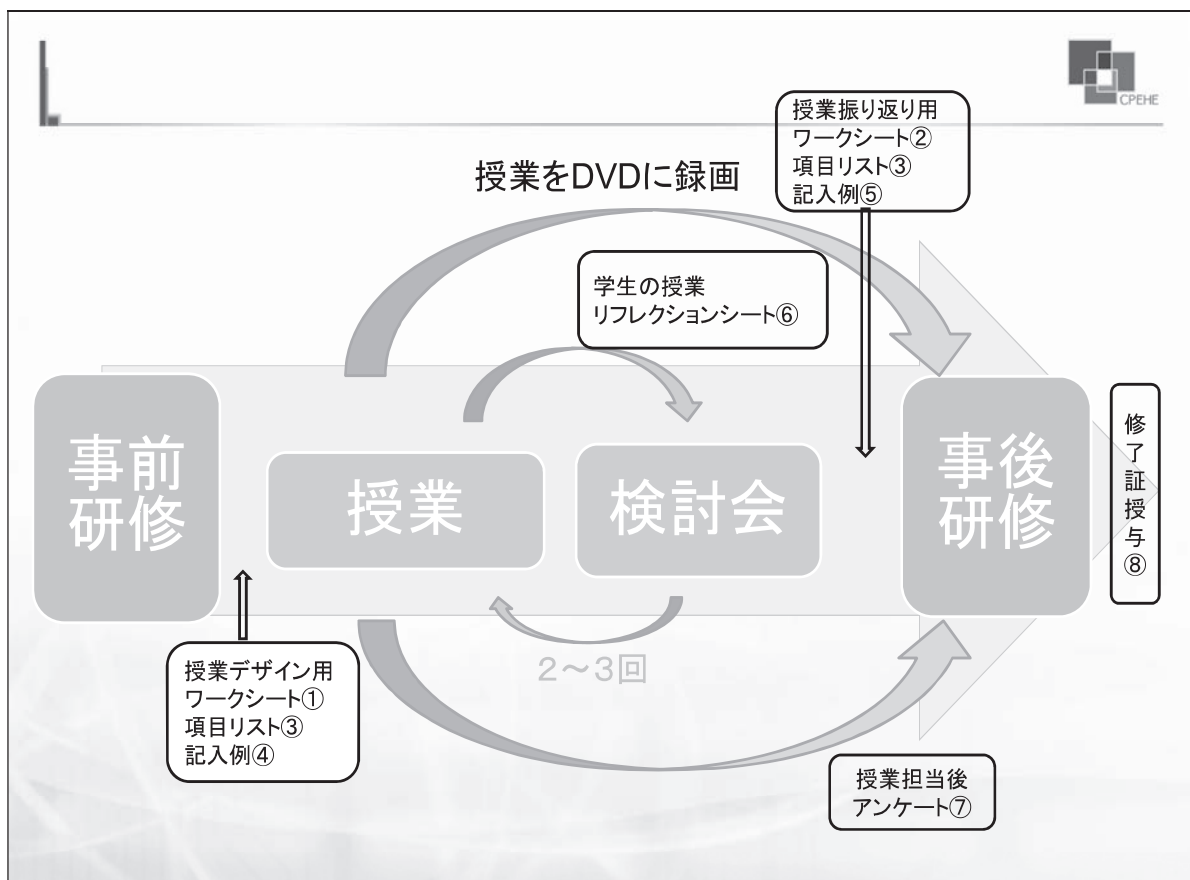
10

参考になる文献・Webサイト

- 文献
 - 池田輝政他 (2001).『成長するティップス先生』玉川大学出版部.
 - 夏目達也他 (2009).『大学教員準備講座』玉川大学出版部.
 - エントウィスル, N. (2010).『学生の理解を重視する大学授業』(山口栄一訳)玉川大学出版部.
 - 京都大学高等教育研究開発推進センター (2012).『生成する大学教育学』ナカニシヤ出版.
- オンラインツール&コンテンツ
 - 京都大学オープンコースウェア(京大の授業のみ)
 - <http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>
 - 教授・学習サポートツール(名古屋大学高等教育研究センター)
 - <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/>
 - 高等教育用語集(愛媛大学教育企画室)
 - <http://web.opar.ehime-u.ac.jp/vocabulary.htm>

11

プロジェクト概要



- ① 授業デザイン用ワークシート
- ② 授業振り返り用ワークシート
- ③ ワークシート作成用項目リスト
- ④ 授業デザイン用ワークシート記入例
- ⑤ 授業振り返り用ワークシート記入例
- ⑥ (学生の)授業リフレクションシート
- ⑦ 授業担当後アンケート
- ⑧ 文学研究科プレFDプロジェクト修了証発行要件

文学研究科プレFDプロジェクト 授業デザイン用ワークシートの作成方法(授業前に作成)

1. 自分が担当予定の授業について、意味のまとまりで分節化して「内容」の欄に書き入れ、「No」の欄に番号をふってください。また、それぞれの「内容」に対してどの程度時間をかける予定なのかについても、「時間」の欄におおよその時間を書き入れてください。「No」については、内容のまとまりごとに 3-1、3-2 のような章・節といった構造で番号をふることも可能です。1 コマの授業につき 1 つのワークシートを作成してください。ワークシートは全ての授業で作成してください。
2. 1. の「内容」について、どのような「授業形態」「集団様式」「教材」「ツール」を用いる予定なのかを、それぞれ「ワークシート作成用項目リスト」から選択して書き入れください。複数の項目が当てはまる場合には、1 つの内容に対して複数の項目を書き入れてもかまいません。該当する項目は「その他」を選択し、括弧の中に詳細を記入してください。
3. 2. の「授業形態」「集団様式」「教材」「ツール」を用いて、どのような「教授機能」を果たそうとしているのかを、「ワークシート作成用項目リスト」の「教授機能」から選択して書き入れてください。複数の項目が当てはまる場合には、1 つの内容に対して複数の項目を書き入れてもかまいません。該当する項目がない場合は「その他」を選択し、括弧の中に詳細を記入してください。

文学研究科プレFDプロジェクト 授業デザイン用ワークシートの作成例

No.	時間	内 容	教授機能	授業形態	集団様式	教材	ツール	メモ
1	10分	資料の配布と担当者の自己紹介	準備	説明	一斉	テキスト	PPT、概要レジュメ	
2	5分	今日の講義の流れの説明	目標・主題設定	説明	一斉	テキスト	PPT、概要レジュメ	
3	20分	現在の天皇家に関する事実関係の解説	動機づけ、知識伝達	映像視聴・説明	一斉	画像・動画・テキスト	DVD・ビデオ、OHC、PPT、概要レジュメ	

具体例

授業を意味のまとまりごとに分節化し、番号をふってください。章・節のような構造で番号をふることも可能です。

各分節の内容を、具体的に書いてください。

それぞれの内容について、どのような教授機能を持たせようとしているのかを、以下の項目から選択して書き入れてください。

それぞれの内容について、どのような授業形態で行う予定なのかを、以下の項目から選択して書き入れてください。

それぞれの内容について、どのような学習形態で行う予定なのかを、以下の項目から選択して書き入れてください。

それぞれの内容について、どのような教材を用いる予定なのかを、以下の項目から選択して書き入れてください。

どのようなツールを用いて教材を提示する予定なのかを、以下の項目から選択して書き入れてください。

気をつけることなど自由に書いてください。

【項目リスト】
準備、目標・主題設定、動機づけ、知識伝達、具体化、体系化、応用、まとめ、授業評価、その他

【項目リスト】
説明、実演、指示、発問、質疑応答、映像視聴、課題作業、ディスカッション、発表、その他

【項目リスト】
一斉、個人、ペア、グループ、全体、その他

【項目リスト】
テキスト、画像、音声、動画、実物、その他

【項目リスト】
概要レジュメ、内容レジュメ、PPT配布資料、印刷資料、PPT、DVD・ビデオ・CD、OHC、メモ板書、構造板書、その他

右の内容に対してどの程度時間をかける予定なのかについて、おおよその時間を書いてください。

*項目の詳細は、文学研究科プレFDプロジェクト ワークシート作成用項目リストを参照のこと
*教授機能、授業形態・教材・ツールについては、1つの内容に複数の項目を書き入れてもかまいません。

名前〔 〕 授業日〔 〕 授業テーマ〔 〕 (回目 / 回中)

No.	時間	内容	教授機能	授業形態	集団様式	教材	ツール	メモ

文学研究科プレFDプロジェクト 授業振り返り用ワークシートの作成方法(授業後に作成)

1. 自分が担当した授業のうち1つを選んで、そのビデオを見ながら授業を意味のまとまりで分節化して「**内容**」の欄に書き入れ、「**No**」の欄に番号をふってください。また、それぞれの「**内容**」に対してどの程度時間をかけたのかについても、「**時間**」の欄におおよその時間を書き入れてください。「**No**」については、「**内容**」のまとまりごとに 3-1、3-2 のような章・節といった構造で番号をふることも可能です。
2. 1. の「**内容**」について、どのような「**授業形態**」「**集団様式**」「**教材**」「**ツール**」を用いたのかを、それぞれ「ワークシート作成用項目リスト」から選択して書き入れてください。複数の項目が当てはまる場合には、1つの内容に対して複数の項目を書き入れてもかまいません。該当する項目がない場合は「その他」を選択し、括弧の中に自分の授業で行ったことを書き入れてください。
3. 2. の「**授業形態**」「**集団様式**」「**教材**」「**ツール**」を用いることによって、どのような「**教授機能**」が果たされていたと思いますか。「ワークシート作成用項目リスト」の「**教授機能**」から選択して書き入れてください。複数の項目が当てはまる場合には、1つの内容に対して複数の項目を書き入れてもかまいません。該当する項目がない場合は「その他」を選択し、括弧の中に自分の授業で行ったことを書き入れてください。
4. ビデオを観ながら、「**気づいた点**」を自由に書いてください。

文学研究科ブレFDプロジェクト 授業振り返り用ワークシートの作成例

No.	時間	内 容	教授機能	授業形態	集団様式	教材	ツール	気づいた点
1	10分	資料の配布と担当者の自己紹介	準備 目標・主題設定	説明	一斉	テキスト	PPT、概要レジュメ	
2	5分	今日の講義の流れの説明		説明	一斉	テキスト	PPT、概要レジュメ	
3-1	5分	現在の天皇家に関する重要な新聞記事とニュースの提示	動機づけ、知識伝達	映像視聴	一斉	画像・動画	DVD・ビデオ、OHC	
3-2	15分	新聞記事とニュースをふまえた上での、現在の天皇家に関する事実関係の解説	知識伝達	説明	一斉	テキスト・画像	PPT、概要レジュメ、メモ板書	
		各分節の内容を、具体的に書いてください。	それぞれの内容について、どのような教授機能が行われたかを、以下の項目から選択して書き入れてください。	それぞれの内容について、どのような学習形態で行われたかを、以下の項目から選択して書き入れてください。	それぞれの内容について、どのような教材が用いられたかを、以下の項目から選択して書き入れてください。	どのようなツールを用いて教材を提示したかを、以下の項目から選択して書き入れてください。	気がついたことを自由に書いてください。	
		授業を意味のまとまりで分節化し、番号をふつづくように構造化してください。番号をふつづくように構造化してください。	【項目リスト】 準備、目標・主題設定、動機づけ、知識伝達、具体化、体系化、練習、応用、まとめ、授業評価、その他	【項目リスト】 説明、実演、指示、発問、質疑応答、映像視聴、課題作業、ディスカッション、発表、その他	【項目リスト】 一斉、個人、ペア、グループ、全体、その他	【項目リスト】 テキスト、画像、音声、動画、実物、その他	【項目リスト】 概要レジュメ、内容レジュメ、PPT配布資料、印刷資料、PPT、DVD・ビデオ・CD、OHC、メモ板書、構造板書、その他	
		右の内容に対してどの程度時間をかけたのかについて、おおよその時間を書いてください。						

項目の詳細は、文学研究科PLEFDプロジェクト ワークシート作成用項目リストを参照のこと

授機能、授業形態・教材・ツールについては、1つの内容に複数の項目を書き入れてもかまいません。

具体例

*項目の詳細は、文学研究科ブレFDプロジェクト ワークシート作成用項目リストを参照のこと
*教授機能、授業形態・集団様式・教材・ツールについては、1つの内容に複数の項目を書き入れてもかまいません。

Ⅱ－3. 資料 1

文学研究科ブレFDプロジェクト ワークシート作成用項目リスト

	キーワード	説明
教授機能	準備	授業内容に入る前の準備 教員の自己紹介、出席確認、これまでの進捗の確認、資料配布など。
	目標・主題設定	授業の目標や主題の明確な提示 授業の到達目標(例えば「××について理解を深める・批判的に検討する」「論理的な思考能力を身につける」など)を、学期の冒頭や個別の授業の冒頭で説明するなど。
	動機づけ	学生の興味の喚起 問題提起や実践的な課題(例えば「みなさんは××についてどのように考えますか」「現在、××の領域ではこれらのことが問題になっており、関心をよんでいます」など)の提示など。
	知識伝達	学生がまだ知らないと考えられるような基本的知識・技術の解説 口頭のみ、もしくは資料や教材・機材を用いて、学生に対して授業の主題に関する基本的な事柄を解説するなど。
	具体化	授業内容の具体例の提示 授業内容について、理論や知識だけではなく具体的な事柄を例示して解説するなど。
	体系化	授業内容の整理 授業の内容全体をまとめた解説や資料の提示、授業内容のまとめを学生に発表させたりレポートとして提出させたりするなど。
	練習	授業内容を実際に用いるための練習 例えばコミュニケーションに関する理論を学んだあとに、実際にグループでその理論を使用しながらコミュニケーション実習を行うなど。
	応用	授業内容の現実的な事柄への適用 授業内容が、現実の場面においていかに活用可能であるのかについて解説したり、応用を促したりするなど。
	まとめ	授業の目標や主題の振り返り、到達点の提示 授業の最後にその日の内容を振り返る、次の授業への接続を行うなど。
	授業評価	授業内容や授業者、学習者である自分自身についての学生の評価 リフレクションシートや授業内容の検討を目的としたレポート課題を課すなど。
	その他()	上記の項目に該当しないもの
授業形態	説明	教員から学生への言葉による説明 例えばレジュメによる講義、パワーポイント・キーノートによる講義など、形式は問わない。
	実演	教員が学生の前で行う演示 例えば化学実験や心理学におけるカウンセリングのロールプレイなどを学生の前で行うことなど。
	指示	学生に対する指示 例えば「この資料を読んでください」など、指示によって学生の行動を促すことなど。
	発問	教員から学生への質問 答えが限定されるような質問(例えば「あなたは現在の日本の大学教育についてまとめられた論文を読んだことがありますか」など)と答えが限定されない、考えを広く問うような質問(例えば「あなたは日本の大学教育についてどのように考えますか」など)の両方が含まれる。
	質疑応答	学生から教員への質問とそれに対する返答 授業中に学生からの質問を受け付けること。また、それに対して教員が返答し、やり取りを行うことなど。
	映像視聴	映像教材の視聴 DVDやビデオなどを教材として学生に見せることなど。
	課題作業	課題の実施(個人・グループは問わない) 例えば「この資料を各自で読んでこの場でまとめてみましょう」「この問題を解いてみましょう」など、学生に課題をあたえ、個人・グループで作業させることなど。
	ディスカッション	学生同士のディスカッション(グループの人数は問わない) 例えば「この点について隣の席に座っている人と一緒に考えてみましょう」「この点について、グループでまとめて考えてみましょう」など、あるテーマを与えて(もしくはテーマ自体を)議論させることなど。
	発表	学生に授業に関わることについて報告・発表させること 例えば「この点について考えたことを述べてください」「この点について調べてきたこと・考えたことについてパワーポイントなどを用いてプレゼンしてください」など、学生にテーマを与えて(もしくはテーマを考えさせて)、それについて報告・発表させることなど。形式は問わない。
	その他()	上記の項目に該当しないもの。
集団様式	一斉	教室内で行われる教員・学生間の教授的やりとり(一方向的な伝達も、途中で質問を受けたりそれに応答する場合も含まれる) 例えばレジュメを配布して講義を進めながら、途中で質問を受けてそれに対して応答するなど。
	個別	学生に個人で作業をさせること 例えば授業内で課題を出して考えさせたり、資料を読んだりさせるなど。
	ペア	学生にペアで作業をさせること 例えば学生に、2人で議論をしたり何かをまとめたりといった作業をさせるなど。
	グループ	学生にグループで作業をさせること 例えば学生に、グループで議論をしたり何かをまとめたりといった作業をさせるなど。
	クラス全体	教室にいる学生全体に作業をさせること 例えば教室全体で議論をするなど。
	その他()	上記の項目に該当しないもの。
教材	テキスト	文字を用いた教材 例えばレジュメや教科書、パワーポイントなどによる文字情報。
	画像	画像を用いた教材 例えばレジュメや配布資料、パワーポイントなどによる写真、イラスト、グラフ、図、漫画など。
	音声	音声を用いた教材 例えばCDやテープによる歌、インタビューの録音などの音声情報。
	動画	動画を用いた教材 例えばDVDやビデオ、PGIによる動画情報。
	実物	教材として実物を用いたもの 例えば保管されている昔の重要な資料(実物)や、ゲストティーチャーのような人物など。
	その他()	上記の項目に該当しないもの。
ツール	概要レジュメ	授業の流れや要点をまとめたレジュメ 授業の構成(目次)、キーワード、キーワードの簡単な解説など。
	内容レジュメ	内容を詳細にまとめたレジュメ 授業の流れや要点だけではなく、テキストとして用いることができるような詳細な解説を加えたもの。
	PPT配布資料	授業中に提示したPPTの印刷版 教員が授業中に利用したパワーポイントやキーノートのファイルをプリントアウトしたもの。
	印刷資料	授業に関連する内容が含まれる様々な資料 参考文献一覧、発展的学習のためのプリント、新聞や雑誌の切り抜きのコピーなど。
	PPT	パワーポイント・キーノートといったプレゼンテーションソフトの使用 例えば授業全体をプレゼンテーションソフトによって進めたり、視覚的な情報や強調点を提示したい場合のみに使用するなど。
	DVD・ビデオ・CD	DVD・ビデオ・CDの使用 ニュースや映画、ドキュメンタリー、自作教材など。
	OHC	資料をオーバーヘッドカメラなどを用いて学生に提示すること 新聞や雑誌記事、学生が記入したプリントの拡大提示など。
	メモ板書	単語レベルでの板書 キーワードを板書したり、図示したい場合に板書するなどメモのような板書。
	構造板書	キーワードとその解説というような、文章レベルでの板書 単語の羅列だけではなく、その説明が簡単に書かれるなど、授業の文脈がわかるように構造化された板書。
	その他()	上記の項目に該当しないもの

文学研究科ブレFDプロジェクト

授業デザイン用ワークシート

名前[■■■■■] 授業日[2011/12/15] 授業テーマ[独仏現象学運動の展開と宗教哲学 (2回目/ 3回目)]

No.	時間	内容	意図	授業形態	集団様式	教材	ツール	メモ
0	7	前回担当者による前回授業の補足	補足説明					
1-1	3	自己紹介と講義の狙いの説明	準備・動機づけ	説明	一斉	テキスト	ppt、ppt配付資料	
1-2	2	レポート課題の提示	目標設定	説明	一斉	テキスト	ppt、ppt配付資料	
1-3	10	イントロダクション(哲学者の写真を見せて、誰か答えさせる。誰かわかった人に、その哲学者がどのようなことを言っていたか知っているかと聞く。現象学とは何かについての各哲学者の解答	動機づけ・発問・主題設定	発問、説明	一斉・個別	テキスト、画像	ppt、ppt配付資料	
2-1	8	フッサールの着想	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt、ppt配付資料	
2-2	7	意識	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt、ppt配付資料	
2-3	2	フッサールの現象学(まとめ)	まとめ	説明	一斉		ppt、ppt配付資料	
3-1	5	ハイデガーの着想	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt、ppt配付資料	
3-2	7	可能存在、「可能性を可能性として存在するとはどういうことか？」	知識伝達	発問、説明	一斉・個別	テキスト、画像	ppt、ppt配付資料	
3-3	5	死	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt、ppt配付資料	
3-4	2	ハイデガーまでのまとめ	まとめ	説明	一斉	テキスト、画像	ppt、ppt配付資料	
4-1	4	レヴィナスのハイデガー批判	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt、ppt配付資料	
4-2	5	絶対的に他なるものから語る哲学	知識伝達・動機づけ	説明	一斉	テキスト	ppt、ppt配付資料	
5-1	8	メルロ＝ポンティの着想	知識伝達	説明	一斉	テキスト	ppt、ppt配付資料	
5-2	7	身体というあり方	知識伝達	説明	一斉	テキスト	ppt、ppt配付資料	
6	3	まとめ、次回の予告	まとめ	説明	一斉	テキスト	ppt、ppt配付資料	
7	5	リフレクションシート記入	授業評価	課題作業	個別	なし	なし	
	90							

No.	時間	内 容	教授機能	授業形態	集団様式	教材	ツール	気づいた点
0	4	■■■氏による前回授業の補足 1.「現象そのもの」へのという現象学の立場は相対主義ではない 2. なぜ死の確実性は意識の確実性より確実だと言えるのか	まとめ(前回の)	説明 説明 説明	一斉 一斉 一斉	テキスト テキスト テキスト	ppt, ppt ppt, ppt ppt, ppt	予想外の出来事にかなりとまどっている(前日に機械をチェックした時には問題なかったのに) レジュメを見ている時間が長く、ちらちらと前を見るのが見苦しい。
1-0	1	機械・トラブルへの対応(プロジェクト)の授業の流れの説明	準備・動機づけ 準備・動機づけ 目標設定	説明 説明 説明	一斉 一斉 一斉	テキスト テキスト テキスト	ppt, ppt ppt, ppt ppt, ppt	哲学者の名前が分かった学生に対し、さらに質問していく予定だったが、すっかり忘れていた。
1-1	2	今後2回(2回目、3回目)の授業の流れの説明	動機づけ・発問・主題 設定	発問、説明	一斉・個別	テキスト、画像	ppt, ppt	途中でパワーポイントがついた。パワーポイントの文字が小さい。照明の関係で画面が見にくい。
1-2	3	レポート課題の提示	知識伝達、目標・主題 設定	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	プロジェクトで投射したパワーポイントを見ている時間が長い。無駄な動きが多い。画面を見たり前を向いたりしているため、身体が正面を向いている時間が少ない。
1-3	9	現象学とは何かについての各哲学者の回答 フッサール、ハイデガー、サルトル(ボーヴォワールの『女ざかり』の紹介)、メルロ＝ポンティ(『知覚の現象学』の回覧) →現象を見出す方法、「現象学的方法」に着目する	知識伝達(具体化)	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	予定外の例を挙げて話してしまったため、時間が予定よりかなり超過した。
1-4	5	フッサールの着想: 直観主義、意識の直接体験、自然的態度、現象学的還元	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	以下(具体化)とは、理解しやすい例を挙げて説明すること。意識の部分の説明に手間取った。手間取ったことをあまり意識にコメントするのはよくない。
2-1	9	フッサールの着想: 直観主義、意識の直接体験、自然的態度、現象学的還元	知識伝達(具体化)	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	フッサールの説明に手間取ったせいで、まとめがかなり簡略に
2-2	6	意識	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	ようやくスクリーンの横から前に出てきて、前を向くようになってき
2-3	2	フッサールの現象学(まとめ)	まとめ	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	時間がおしていると感じていたせいか、話すべきことを話せていない。ハイデガー批判だけではなく、もう少しレヴィナス自身の哲学的
3-1	3	ハイデガーの着想: 被投性	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	スライドの方はかなり見ている。自信なさそう。
3-2	4	可能性とはなにか	知識伝達(具体化)	発問、説明	一斉・個別	テキスト、画像	ppt, ppt	1つのスライドでべらべらとしゃべっている。で、単調。もう少し、ス
3-3	3	全体存在可能性を考えると、「不可能性の可能性」としての死の問題が出てくる	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	ライトを細切れにする、問いと答えのような校正でスライドを構成するなどして、動きがあった方が、学生の問いを促すことができ
3-4	2	ハイデガーまでのまとめ	まとめ	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	た。
4-1	3	レヴィナスのハイデガー批判: 可能性の不可能性	知識伝達	説明	一斉	テキスト、画像	ppt, ppt	言いよどみや躊躇、留保をする発言などが多く、学生を迷わせていたかもしれない。自信のなさを目障り。
4-2	5	レヴィナスの哲学は、絶対的に他なるものから語る哲学ではないか。それは言語化できるのか、現象の学によって捉えられるのか。	知識伝達	説明	一斉	テキスト	ppt, ppt	時間が余ったため、時間が余ってきたこと
5-1	6	メルロ＝ポンティの着想 完全な還元は不可能、フッサールとハイデガーの折衷	知識伝達	説明	一斉	テキスト	ppt, ppt	時間がないと思って早く説明をしすぎたため、時間が余ってきたこと
5-2	3	身体というあり方	知識伝達	説明	一斉	テキスト	ppt, ppt	時間がないと思つた。そこで、「上と下」の例を持ち出した。一応時間が余った時のために考えていた話ではあったが、とっさにうまく話
5-3	3	身体論の例: 上と下、奥行	具体化	説明	一斉	(回覧した本:『知覚の現象学』)	なし	パットを振つたり、という例を出したら、関係ないときにもパットを振っているのが目障り。
5-4	4	身体論の例: 幻影肢 身体図式と習慣	知識伝達、具体化	説明	一斉	テキスト	ppt, ppt	
6	4	まとめ、次の予告	まとめ	説明	一斉	テキスト	ppt, ppt	
7	6	リフレクションシート記入	授業評価	説明 課題作業	一斉 個別	なし	なし	

◎ 今日の授業を終えてのあなたの考えをお聞かせください。

(このシートは成績評価には一切関係しません)

授業リフレクションシート

2011 年 12 月 1 日		授業題目		行動・環境文化学 (木 1)		
学部	文	学年	2	男・女	氏名	

①今日の授業で、重要だと思った点、印象に残った点、疑問に思った点、さらに考えたり調べたりしたいと思った点など、内容面について感じたことを以下に記入して下さい。

一般的に言われる「家庭的な女」への価値観は、(私は否定的です)
近代以降に形成された価値観の名残なのかもしれない
と思いました。私の母親は典型的な良妻賢母の主婦です。
家事をやっていたら丸1日やると思いこんでいたので、「家事水準の
向上」を聞いてなんだか安心しました。必ずしも完璧にやる必要はないと思います。
育児日誌を男性が書いていたなんてびっくりです。歴史って大切だと思いました。
現代になるほど男も女も白くはなるんだろうね。男女観見直します。

②今日の授業の構成や方法など、何か気づいたり、感じたりしたこと、あるいは、今日の授業に限らずこの授業への要望などを、以下に記入して下さい。

メモを取る時間が中途半端だったので、
混乱するときがありました。
長めにとってもらえると落ち着いて書けます。
まとめのところが異常に書くことが多くて、整理しにくかったのと、あうのびめ
スペースを区切って書いてもらえたら良かったです。
授業がとてとても良かったのに、プリントが汚いのはもったいないです。

文学部プレFD 2012 年度 授業担当後アンケート

このアンケートは、研修会の企画・実施に役立てるために行うものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

京都大学 FD 研究検討委員会

お名前：（ ）

ご所属（専修）：（ ）

■ 大学・短期大学・高等専門学校での教育経験はありますか？ ある方は年数もお答え下さい。（当てはまるものを残して他の選択肢を消してください。②・③の場合は年数を（ ）内にご記入下さい。）

- ① なし
- ② TA（約 年）
- ③ 非常勤講師（約 年）

■ いずれかの教員免許をお持ちですか？

（当てはまるものを残して他の選択肢を消してください。④の場合は、詳細を（ ）内にご記入下さい。）

- ① 小学校
- ② 中学校
- ③ 高等学校
- ④ その他（ ）
- ⑤ なし

■ 以下での指導経験はありますか？

（当てはまるものを残して他の選択肢を消してください。）

- ① 小学校
- ② 中学校
- ③ 高等学校
- ④ 塾
- ⑤ 家庭教師
- ⑥ なし

問1 学生の反応（リフレクションシート）をみて、思ったことをお書きください。

問2 事前の授業デザインと実際に実施した授業との比較や、検討会での議論などを通じて、担当授業について考えたことをお書きください。

問3 もし次に授業をしたら、どのような点を修正したいですか。思いつくことをお書きください。

ご協力ありがとうございました。

文学研究科プレFDプロジェクト修了証発行要件

FD研究検討委員会委員長・文学研究科長 申合せ

1. 2回以上の授業を担当すること。
2. 自分の授業の検討会を含め、合計8回以上の検討会に参加すること。
3. 総括の研修会に参加すること。

原則、上記3要件全て満たした場合に修了証を発行する。

これによらない場合は、FD研究検討委員会委員長と文学研究科長の別途協議によるものとする。

II-4. 大学院生のための教育実践講座 —大学でどう教えるか—

1. はじめに

「大学院生のための教育実践講座」は、大学教員を目指す京都大学の学内者を対象にした講座である。「大学院生のための」と銘打たれてはいるが、大学院生の他、ポスドク、研究員、オーバードクターなどの参加も多数ある。大学院生は、将来、研究者としてだけではなく、授業を担当することも求められており、まずは教員として授業を担当するための自覚を促し、現在の大学教育における課題を共有することがこの講座の1つの大きな目的である。

平成17年度に第1回が実施されて以来、毎年、年に1度の頻度で開催され、今年度で8度目の実施となる。平成18年度までは、高等教育研究開発推進センターが企画、運営していたが、平成19年度よりFD研究検討委員会の主催となり、今年度も本センターは企画、運営の補助を行った。

平成20年度にファカルティ・ディベロップメント（FD）の義務化が実施されて以降、各大学において大学教員の教育改善の取り組みがこれまで以上に盛んに行われるようになってきた。本学においても、文学部のオーバードクター（OD）によるリレー講義をはじめとして、大学院生やODを対象とした予備的なFD、いわゆる「プレFDプログラム」（Preparing Future Faculty Program: PFFP）と呼ばれる取り組みが年々充実してきている。しかし、全国的に見れば、プレFDプログラムの取り組みは、いまだ多いとは言い難い状況にある。そのような中で、本講座は大学教員を目指す大学院生が多い本学の特性を活かしたプレFDの取り組みとして、学内外から注目されるものになってきている。

2. 企画の目的と実施の背景

本講座では過去の受講生の要望を受け、平成20年度より「Basic」と「Advanced」の2つのコースを開講している。今年度も、基本的なコースの枠組みは昨年度のプログラムを踏襲し、そのうえで昨年度の反省を踏まえながら、参加者の要望を汲み取りつつディスカッションを中心とした内容をより充実させることを意識した。

Basicコースは、将来、大学で教職につくことを希望する大学院生を対象とし、Advancedコースは、昨年度までに本講座を受講した経験のある大学院生、あるいは非常勤講師などで大学において授業担当経験のある者を対象としている。

Basicコースでは、担当教員によるミニ講義で現在の大学教育がおかれた状況や課題を学び、グループ・ディスカッションなどを通して、自分自身がこれまでに大学の授業を受けてきた経験を振り返りつつ、「大学で教えるということ」がどのような課題を抱えているのかを考える機会を設けた。

Advancedコースでは、具体的に大学の授業を構成する際に生じる課題を共有するために、2名の参加者による模擬公開授業を実施し、それについてディスカッションをする場を設けた。数年前より、Advancedコースではミニ講義をなくして、ディスカッションをメインに据え、参加者相互のインタラクションによって理解を深める時間を多く確保しており、今年度もそのプログラムを踏襲した。また、ディスカッションをより充実させるために、参加者への事前アンケートにおいて関心のあるテーマや自分の取り組みについてまとめておくことを依頼し、議論をスムーズに

導入することに活用した。上述の通り、参加者からの要望を受けて、平成 20 年度より設置された Advanced コースの内容は、参加者と本センターのスタッフが継続的にコミュニケーションをとることによって年を追うごとに改善を見ている。

3. 実施概要

3-1. 実施概要

本講座は、2012 年 8 月 7 日（火）10 時から 18 時 30 分まで、京都大学百周年時計台記念館 2 階において開催された。Basic コースと Advanced コースは平行して行われ、ミニ講義や模擬公開授業、グループ・ディスカッションなどのために、国際交流ホール II・III および小・中会議室を使用した。本講座は事前申込者のみを受け付けており、参加者は、当日に、受付で 2 千円（ランチ、情報交換会代を含む）を参加費として納めた。当日のプログラムに関連する資料として、本稿末にプログラム内容（資料 1）、事前アンケート（資料 2）、ミニ講義（資料 3）、事後アンケート（資料 4）を掲載している。

3-2. 参加者数とグループ構成

今回実施された本講座への参加者数は、Basic コース 32 名（事前申込者数は 34 名だったが当日欠席 2 名）、Advanced コース 16 名（事前申込者数は 17 名だったが当日欠席 1 名）の計 48 名であった。参加者の所属研究科および階層（修士課程・博士課程・OD や PD を含む研究員など）ごとに、その内訳の詳細を表 1 に示す。

昨年度まで、教育学研究科が関わるグローバル COE プログラム（「心が活きる教育のための国際的拠点」）の一環として、「EX ラボ」という企画が行われ、本講座もその企画の一つとして位置づけられていた。EX ラボとは、大学院生が自分の専門分野以外の専門分野について学び、また異なる専門分野の院生同士の交流を促すことを目的として設けられた企画である。グローバル COE プログラムは昨年度をもって終了したが、EX ラボは、今年度も「心の先端研究ユニット」が引き継ぐ形で開講され、本講座の企画および運営をサポートする高等教育研究開発推進センターの教員が、心の先端研究ユニットにも所属している関係上、本講座は引き続き EX ラボの一つとして提供されることになった。今回、EX ラボ経由での参加人数は 2 名であった（教育学研究科と人間・環境学研究科からそれぞれ 1 名ずつの参加があった）。

一昨年度までは、教育学研究科からの参加人数が多かったが、昨年度から研究科を横断するように参加研究科は広がりを見せている。しかしながら、昨年度まで参加人数の多かった経済学研究科と文学研究科からの参加者は減少した。また、今年度の参加者の特徴として、修士課程の大学院生が非常に少ないことが挙げられる。参考までに、昨年度は修士課程の大学院生の参加者は全体の 4 分の 1 程度であったが、今年度は約 6%である。本講座の趣旨として、将来的に大学において教職を得ることを目標にしている大学院生をターゲットとしている都合上、博士課程以上の大学院生の参加が多くなることは必然ではあるが、しかしながら、修士課程在籍時から自らのキャリア・パスのひとつとして早期に準備を行ったり情報収集・情報交換を行ったりすることは有益なはずであるので、今後は修士課程在籍の大学院生にも積極的に参加を呼び掛けたい。

本講座では、上記の通り、大学院生同士のディスカッションの場を設けている。理系と文系を意図的に混合することで、分野をこえて討議・交流をできるようなグループ構成を行った。さらに、修士課程と博士課程など、参加者の学年もバランスがとれるように配慮し、Basic コースでは 3 つのグループを編成した。Advanced コースについては、事前にグループ編成を行わず、当日、

テーマに沿って希望者を集めるかたちでグループをつくり、ディスカッションを行った。ディスカッションの際には、各グループにセンターの教員が1名ずつファシリテーターとして入り、議論の進行に関するコーディネートを行った。

表 1. 各コースの参加者の内訳

研究科・部局	Basic				Advanced			
	人数	内訳			人数	内訳		
		修士課程	博士課程	OD・PD・研究員・研究生・その他		修士課程	博士課程	OD・PD・研究員・研究生・その他
経済学研究科					3		1	2
文学研究科	4	1	2	1	4		2	2
教育学研究科	2		2					
人間・環境学研究科	5	2	3					
工学研究科	2		2		2		1	1
医学研究科	2		2		2		2	
農学研究科	5		4	1				
理学研究科	3		3		1		1	
情報学研究科	2		1	1	1			1
生命科学研究科	1		1					
アジア・アフリカ地域研究研究科	3		3		2		1	1
地球環境学舎	3		3		1		1	
合計	32	3	26	3	16	0	9	7

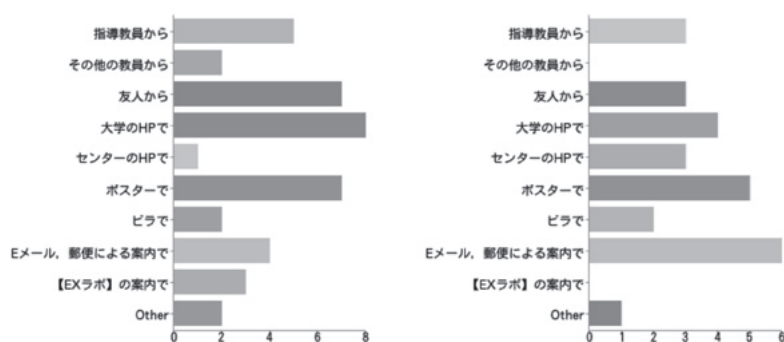
4. 事前アンケートの結果

本講座を実施するにあたり、あらかじめ参加希望者に事前アンケートを電子メールで送付し、回答を依頼した（資料2）。これは、参加を希望する学生がどのような経緯で本講座を知り、どのような動機や期待を抱いているのかといった点を把握すること、およびグループに分かれてディスカッションを行う際のグループ分けの判断材料とすることを目的として行った。質問事項は、基本的に過去の回と共通する内容とした。

4-1. 本講座を知ったきっかけ

まず、どのようにして本講座を知ったのかを調べるために、「この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるものの番号をすべて○で囲んで下さい）」という質問を行い、表3にある10項目を選択肢として設けた。表2に示した通り、Basicコースにおいてはポスター掲示とEメール・郵便による案内が、Advancedコースにおいては、大学のHP・ポスター掲示・友人から誘いが多かった。

表 2. 講座を知ったきっかけ（複数回答可）[左: Basic コース、右: Advanced コース]



4-2. 大学での教育経験と教員への志望の度合い

次に、大学での教育経験と教員への志望の度合いを調べるため、問2で「大学での教育経験があるか?」、問3で「大学教員にどの程度なりたいか?」という質問を行った。

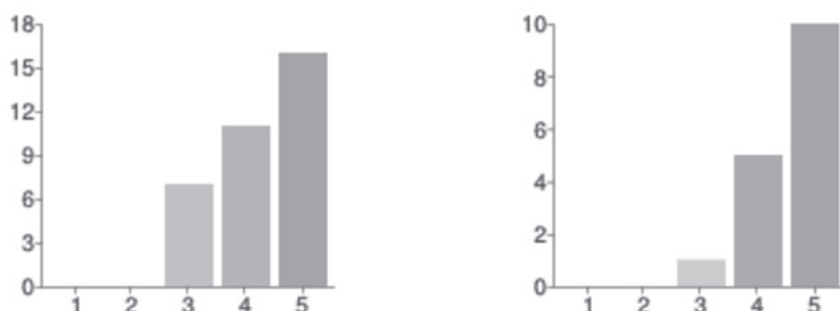
問2の「大学での教育経験があるか?」については、Basicコースでは、「なし」が10名、「TA」が21名、「非常勤講師」が5名であった。Advancedコースでは、「なし」が3名、「TA」が11名、「非常勤講師」が4名であった(表3)。以上のように、Basicコース参加者は、教育経験がない者は3割弱、また教育経験のある者のほとんどがTAであった。Advancedコース参加者は、ほとんどの参加者が教育経験をもっていた。

問3の「大学教員にどの程度なりたいか?」(5件法、「1:まったく希望していない」から「5:非常に希望している」)については(表4)、Basicコースでは、「非常に希望している」「やや希望している」と回答した者が約8割、「全く希望していない」と回答した者はいなかった。Advancedコースでは、ほぼ全員が「非常に希望している」「やや希望している」と回答した。Basicコース、Advancedコースともに大学教員になりたいと考える参加者が多いことが分かる。

表3. 大学での教育経験(複数回答可) [左: Basicコース、 右: Advancedコース]



表4. 大学教員になることを希望するか [左: Basicコース、 右: Advancedコース]



4-3. 本講座の受講動機

問4では、本講座の受講動機を8つの質問によって尋ねた。以前は自由記述によって受講動機を尋ねていたが、2年前からは、それまでの自由記述を元にした質問項目によって尋ねることとした。全ての質問は「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に当てはまる」の5件法で尋ねられた。表5に質問項目と、各コースの質問に対する平均値を示す。

表 5. 各コースの受講動機の平均値

質問項目	Basic コース 平均値	Advanced コース 平均値
大学での教育活動に関心があるから	4.68	4.81
大学で教えるための知識・技術を身につけたいから	4.44	4.50
大学教育について考える機会が欲しかったから	4.24	4.63
実際に教育に関わる中で悩んだり困ったりしたことがあるから	3.12	3.13
他の大学院生が大学教育についてどのような考えをもっているか知りたいから	3.50	4.13
他の大学院生と、大学教育について意見交換したかったから	3.18	3.94
他の大学院生と人間関係をつくりたかったから	3.12	3.38
今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから	3.41	2.94

両コースともに、「大学での教育活動に関心があるから」「大学で教えるための知識・技術を身につけたいから」「大学教育について考える機会が欲しかったから」の3項目の得点が比較的高い結果となった。一方、「今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから」という項目に対する評価は比較的低く、参加者は個人の関心に基づいた参加ではあるものの、それが自分のキャリアと直接結びつくとは考えていないという傾向があることがうかがえる。今後は、本講座の受講者が就職を決めたり授業において役に立つポイントを得たという情報や、本講座の発行する修了証の効果について、さらに認知度を高めていく必要があるものと考えられる。

4-4. Advanced コース準備のための質問

問5以降は、Advanced コースでのみ尋ねた。問5は、模擬公開授業・検討会で授業者となり、模擬授業を行うことは可能であるかを尋ねた。「行うことは可能」は2名、「条件によっては可能」は5名、「行うことは不可能」は9名であった。「行うことは可能」もしくは「条件によっては可能」という回答が得られた受講生から、アジア・アフリカ地域研究研究科より1名、文学研究科より1名を選出し、模擬授業を担当してもらった。

4-4. 大学以外での教育経験、大学教育への問題意識

問6では、教員免許取得の有無を尋ねた（複数回答可）。「小学校」0名、「中学校」3名、「高等学校」7名、「その他」2名、「なし」9名と、教員免許を持つ者が半数程度であった。

問7では、初等・中等教育での指導経験の有無を尋ねた（複数回答可）。「小学校であり」2名、「中学校であり」1名、「高等学校であり」2名、「なし」13名と、経験を持たない人が多かった。

問8では、塾・家庭教師などでの指導経験の有無を尋ねた。「あり」が12名、「なし」が4名と、経験者が相対的に多かった。

問9では、学部生時代に受けた授業への満足度を尋ねた。「1. まったく満足していない」から「5. 非常に満足している」までの5段階で評価を行った。その結果、「5. 非常に満足している」が1名、「4. まあまあ満足している」が6名、「3. どちらともいえない」が3名、「2. あまり満足していない」が4名、「1. まったく満足していない」が2名という結果で、満足度の平均は3.00であった。

問10では、「あなたが考える大学教育における問題点」について、自由記述による回答を求めた。その結果を表6に示す。授業の形式や内容、学生側の意識の問題、大学のあり方そのものなどさまざまな問題点が挙げられた。

表 6. 大学教育における問題点

記述内容
講義者の関心に特化したものが多く、高校と大学をつなぐ基礎的な能力を身につけられるものが少ない
大学教員については高校までの教員と違っていわゆる教員免許を必要とせず、研究者としての能力に大きな比重を置いて選ばれている印象を持っている。一方、今後ますますの科学の発展にともなって、最先端の研究を行うために必要な知識の高度化が進んでいくのは疑いない。そこで、大学教育において、高度な内容を効率的に伝える教育力の重要性が増してくるにもかかわらず、ほとんどの教員が教育に関する訓練を受けないまま大学の教壇に立つことになるのはある種問題だと思っている。もちろん、人によってはしっかり工夫をして素晴らしい授業をする方もいるのだが、良い授業をすることに対するインセンティブが個人の意識に委ねられすぎている印象を受けている。
私は京都大学に入学する前にX大学に1年間通っていました。X大学では授業のレベルが高校までの勉強から少しステップアップしたところから始まり、とても理解しやすい授業でした。しかし、京大に入った途端、一年生の頃から高校までの内容との関連性が分からないほど授業内容が高度かつ抽象的で、私にはすぐには理解できませんでした。それはもちろん大学に入ってくる学生のレベルに合わせているということなのかもしれませんが、京都大学は生徒のほとんどが授業について来られることなど考えておらず、トップ層だけについてくればそれで良いということなのかもしれません。入試の時の保護者説明会でもそのようなことを誰か先生がおっしゃっていたらいいので、それが京大の教育方針なのだと思います。しかし、それではスタートダッシュでついて行けなかった生徒はズルズルと最後までよく分からないまま卒業し、新しいことを知ることに面白さを感じなくなってしまうのではないかとというのが私の学部生の頃の感想でした。京大に入学したばかりの頃は、やっと念願の京大に入れて勉学へのやる気がみなぎっていたのですが、いざ授業を受けてみるとあまりにチンプンカンプンで一年生前期の間にやる気はかなり薄れてしまいました。京大のほとんどの先生に言わせると、そんな頭の悪い学生は入ってくるなと言いたいところなのかもしれませんが、大学院で研究活動を始め、4年間研究してきた中で、乗り越えやすい低い壁から乗り越えて行けば、短期間で高い壁を乗り越える力を身に付けられるということを実感しました。そこで、1年前期の間は高校から大学への橋渡しになるような数学や物理、コンピュータの授業があっても良いのではないかと思います。テストを簡単にして全員単位が取れるというようなゆとり教育は必要ないと思いますし、全学生が漏れ無くついて来られる授業をする必要もないと思いますが、少しでも多くの学生が勉学に対する興味を失わないまま大学での内容を吸収できる授業環境を作って行けたら良いのではないかと思います。そのレベル設定とそれに割く時間が無いというところが難しいところなのだと思います。
研究大学では、教員によって教育に対する動機付けが大きく異なる場合がある。ヒトによっては雑用の一部にすぎなかったり、別のヒトでは後進の育成（研究者の育成）だと思って熱心であったりする。特に、学部学生への講義・実習で、その傾向が顕著であるように思う。それは、教員、学生、またそれ以外（例えば、カリキュラム）に問題がある場合など、要因はいくつか挙げられると思う。
大学で自律的に学習できるようになるために、何より必要なのは学生自身の意欲だと思いますが、その意欲を目覚めさせる、あるいは強める授業が少ないように思います。
学部生時代は、大学教員の多くが「教える」という理論を習ったり、訓練を行うことなく、自分の専門領域について語るという印象があり、学生の集中力を維持できていないと感じた。また、教員のなかに授業を「聞かせてやっている」という意識を持っている人々が多く、聞いてもらっている、学生がいるからこそ、食べていけているという意識が希薄だと感じるがあった。
・大学教員が教育学を知らずに学生に教育をしていること ・大学生は自分で学ばなければならないと言って、授業をいい加減に行う教員がいること。 ・大学教員はその性質上、研究を行うことが求められるが、研究と教育とのバランスが難しそうである。
学生に出席の義務を課すべきか否か、詳細な配布資料を用意してくるべきか、等。
京大でも「複合領域型（安全安心）『グローバル生存学大学院連携プログラム』』というものが始まっていますが非常にいい取組と感じています。コロンビア大学ではジェフリー・サックス教授がこのような文理融合の大学院を設置し、その大学院の在学が、昨年に地球温暖化(気候変化)が途上国の食糧の不作を招き、その結果そうした国での内戦の勃発をもたらしているという因果関係を学術的に確立した論文がScience誌に掲載されたということがありました。こうした文理融合的なテーマを広く研究できる環境を学部から提供することは非常に重要なことと感じています。
1. 学生の持っている基礎知識がどのレベルまであるのかについて、教える側が十分に把握していないこと。 2. 科目間の連携が希薄なこと。
大学教育のあるべき姿がイメージできません。
定員が埋まらない大学では、不採算部門が縮小される傾向にある。また、教員募集も減るなどし、研究以外の教員の負担は増える一方だと聞く。研究の意味と価値を再構築する必要があるのではないかと。
講義を受けることが主になってしまっていて、学生自身が研究作業に取り組む意識と機会が乏しいこと。
学生のニーズに合った授業、興味ややる気を引き出す授業が、大学として提供できているのか。国際競争の中にある大学教育が目指す将来像があいまいで、学生への教育サービスの質が問われている。
学生に心底からの知的好奇心をかきたてる技量をもつ教員が少ないこと（僕は学部時代に解剖学の先生の授業に感銘を受け、医学生物学の研究者になりたいと思うきっかけになりました）。大学で単位を取って良い企業に就職することだけをひたすら目指す近視眼的、即物的な学生が近年多いこと（不況、就職難とうそぶく時代の流れと言ってしまえばそれまでですが）。
学生が就職活動などに忙殺され、大学での学習活動に十分に専念できないこと。成績評価が厳しい、あるいは学習への要求が厳しい講義・教員が敬遠されがちで、単位を取ることを第一目的とする学生が多いように見受けられること。

問 11 では、「研修会当日に議論したいテーマ」について自由記述で回答を求めた。その結果を表 7 に示す。講義を行う技術上の問題から、大学教育や大学教員そのもののあり方を考えるようなテーマまで、幅広い記述が得られた。

表 7. 研修会当日に議論したいテーマ

記述内容
大学でいかに教えるか（教授法、テーマの設定方法、学生のレベル）
上記に記した問題点について、もちろん研究者としての側面が重要なのは間違いないので、教育の訓練を積むにしても、限られた時間の中でどのような訓練を積むのが良いのか、具体的にどうすれば改善できるのか議論してみたい。また、すべての教員に訓練をさせるのが非現実的であるのならば、諸外国のような教育用の教員と研究用の教員を別ポストとして分けて採用枠を組む等、組織の組み方によって対策をできる可能性もあると思っているので、広い視野で多くの方の意見を聞いてみたい。さらに、外国の大学の教育事情について日本の教育状況を比較、検討の議論もしてみたい。
京大の難しすぎる授業の中に高校から大学への橋渡しになる授業を設けるべきではないか？ということについて議論してみたいです。
講義や実習の方法について技術的な事だけでなく、大学教育全体において、単位として認める講義や実習のあり方なども議論したい。
学生が楽しく自立的に学び、研究するためにはどうすればよいか？ について。
学生の集中力を切らさないための工夫やテクニック。
教育学を学んでいない者が大学教員になる場合、どのような教育学をどの程度学んでおかねばならないのか？（自分ではなかなか見当がつかない）
少人数教育と大規模教育における講義の相違、注意点など、私としてはお伺いできればと考えています。また、研究と教育の間のバランスについて、ぜひいろんな方々の御意見お聞きできればと希望しています。
（特に理数系科目においての）高校と大学初年度教育の連携について
理想論と、現実論を、両方きっちり話したいです。
やる気のない学生に勉強させるためにはどうしたらよいか。そういった生徒にどういった評価を行うべきか。
シラバスの作成や講義を行う際の知識や技術。
10年後、20年後の日本の大学教育は、どうあるべきだと思いますか。
大学で教員は何を教えるか、何を教えることができないか。また学生は何を学び、何を学べないのか。大学教育の効用と限界について議論したい。
大学の講義において、講義の内容だけでなく、障害やメンタル面での問題などを抱える学生への対応を求められた場合、どのように対処すれば良いか。

5. 事後アンケートの結果

本講座の当日、すべてのプログラムが終了した時点で、事後アンケートを実施した（資料 4）。参加満足度や各プログラムに対する有意義度および改善すべき点について、評定と自由記述をもとに構成した。質問事項は、基本的に昨年度とほぼ同様にものとした。当日参加者のうち全員から回答が得られた（Basic コース 32 名、Advanced コース 16 名）。

5-1. 本講座の全体的な満足度

本講座の全体的な満足度について、「本講座の参加満足度は全般的にどのようなものですか」という質問に対し、「1. まったく満足していない」から「5. 非常に満足している」までの 5 段階で

評定を行った。Basic コースは平均 4.38 点（グループ討論: 4.59、ミニ講義: 4.41、ボディ・ワーク: 3.78、リアルタイム・ドキュメンテーション: 3.39）、Advanced コースも平均 4.38 点（模擬授業・検討会: 4.47、グループ討論: 4.60、リアルタイム・ドキュメンテーション: 3.33）となり、全体的には、本講座に対する高い満足度がうかがえる。本年度試行的に行ったリアルタイム・ドキュメンテーションについては、評定値が低かったことから、来年度は実施しない予定である。また、ボディ・ワークについても何らかの改善が必要である。

5-2. 本講座の満足度の理由（自由記述）

本講座に対する満足度の理由に関する自由記述を以下に資料として挙げる（表 8、表 9）。

表 8. 満足度の評定とその理由（Basic コース）

評定値	記述内容
5	大学教員になるための意識が少し分かった気がするから。
5	色々な教育実践のお話を聞くことができる点（日本の大学だけではなく、アメリカの大学の教育状況も教えて頂いてとても良かったです。）他分野の若手研究者・院生と知り合えてコミュニケーションを進める点。Lunch time もとても楽しかったです。
5	大学教育に関して有益な議論ができた。実際に講義をしている現場の声が聞けたこと、世界的な潮流などが概観できたのが良かった。
5	一日に凝縮されたのが良かったです。ボディーワークは新鮮で楽しかったです。先生方（非常勤）の体験談は現実がよく分かり勉強になりました。
5	今まで自分の中で考えなり、疑問を共有出来たこと。同時に、同じような考えを持った学生や、教員の方と意見交換ができたこと。スタッフの方々がスムーズに全体進行されていて非常に良かったと思う。ありがとうございました。
5	他分野の方々との交流がはかれた。他学部の方も同じような問題を抱え、同じように悩み、同じような熱意で教育について考えていることを実感することができたのが、最も大きな収穫でした。
5	問題意識の萌芽
5	自分以外の大学院生、特に他の研究科の大学院生の教育に関する問題意識に触れることができ、新しい視点の形成に役だった。大学授業に関する課題として、具体的にどのようなものがあるのか、抽象的にどのようなものがありうるのかを認識することができた。
5	これまで知らなかった、世界での大学教育に対する取り組みを飯吉先生の講義で知ることが出来まし、グループ討論では大学の授業や教員の資質についての考え方を共有することができ、自ら考えるきっかけになりました。
5	大変よい勉強になりました。これまで、自分の中で問題だったものを、皆様とシェアでき、一緒に解決法を考えることができました。
5	専門の違う院生と大学教育についてディスカッションする機会が日頃ないので、考え方の異同に目を開かされた。これだけ大学教育について熱を持って考えている人がいるということに刺激を受けることができた。
5	周りの方々がほとんど博士課程以降だったため物怖じしていましたが、その分質の高い議論が展開されて、有意義でした。もう少し議論の時間があれば、教員単位でなく、大学社会単位のような、よりメタ的な仕組みの改善の議論もできたのかなと思いました。次回があればその辺りの話も深めてみたいです。
5	様々なバックグラウンドを持つ方の意見を聞くことができて大変勉強になりました。ミニ講義も興味深く面白いお話で楽しく聞かせて頂きました。
4	短時間でぎっしり詰まった内容だったので、落ち着きはないけれども、有意義でした。できれば、ディスカッションの時間がもう少し取れれば良かったかと思います。
4	議論が楽しく教育に関する他者の意見を聞くことができたから。
4	分野を超えていろいろな意見を聞いた事が非常に良かったと思います。またボディーワークやミニ講義も非常に参考になりました。特にグループ討論でのグループ内での活発なやり取りやグループ間での意見の違いが非常に興味深いものでした。ただ、個人的な感想としては、結論が教育学的というか理想論的（あまり現実には則していないという意味で）な方向に導かれがちなのが少し気になりました。また、文系と理系でも在り方が大きく異なる点も印象的でした。
4	グループワークのディスカッションで様々な意見を交わすことができ、自分の考えを見直すことができた。ミニ講義も教育改善に関する情報を得ることができ、刺激かつ参考になった。大学教育のあり方については継続して考えていきたい。
4	当初の目的（他大学院生との議論を通した自己の教育実践のイメージをより明確化すること）がある程度満たされたため、どちらかと言えば満足している。またボディー・ワーク教育において言語では表現しきれないエッセンスを学ぶことができて興味深かった。ただ、次ページの改善点にも記したが、他研究科の院生とディスカッションする時間

	が、短かったように思う。もっと色々な立場からの多様な考えを聞き、議論したかった。全体として議論が深まったと言う印象よりも、一般的に考えている、あるいは話されている内容をなぞったというような印象を持った。
4	色々な人の意見を聞くことができたから。
4	議論の時間が充分にあったけれど、話が広がりすぎてまとまりきらなかった感があったので。
4	非常勤講師の経験のある方など、他の人の体験談・考えを聞くことができ、視野を広げるきっかけになったと思う。
4	普段考えることのなかった題目について考えるきっかけができたこと、またその内容について共有する場・繋がりができたので満足しています。有り難うございました。
4	他の分野の研究者と情報交換できる場でもあったので、ミニ講義やディスカッション以外でも勉強になったから。しかし、分野があまりにも多様で、教育の理念自体は語れても個別の分野についてはあまり深く語れなかったように思う。
4	それぞれの学生がどのような意識をもって研究職をめざしているのかがわかり、勉強になった。又、実際非常勤の方の話が聴けて良かった。実際どのように授業を行っていくかは advance で学びたい。ミニ講座は内容が多様で面白かった。
4	教育に関して考え、他の人と意見交換する機会となった。
4	非常勤講師を数年経験し、今まで自分がしてきたことを改めて振り返るよい機会になりました。ただ、実際に非常勤を経験されていない方向けのコースだったのか、現在自分が直面している課題の解決につながるもう少し踏み込んだ話が聴けたらよかったと思います。具体的な解決策があまり聴けなかったように思います。
4	講義やディスカッションで様々な意見を聴き、今までの自分の考えを深めることができたが、大学という枠内では解決に結びつかない問題も大きいことを考えるとジレンマを感じた。
4	大学教育に関する考えを共有することができ、深めることができた。ただ具体的にどのようにしていくのかをもっと実践的に考えたかった。
4	ディスカッションでいろんな専門・立場の方と話をすることで自分が考えていなかったことを気付かされたり、新たな発見があった。また、大学で教育を行う場合に自分がどういうことを目標としてやっていきたいのかを考える良い機会になったと思う。ただ、ディスカッションの時間がもう少し欲しかった。
4	今まで大学教育そのものをディスカッションする場がなかったが、今回産科してその場が得られたから。大学教育についての色々な考えが聞け、最後の統合討論は大変面白かった。
4	様々な分野の方とお話することができ、「大学での教育」を共通の話題として、がっつり考えることができたから。刺激的な内容だった。
3	ディスカッションなど参加者の意見を出し合う場が多く、「実践講座」としての具体的教育技術、方法論などについて得るところがもう少し欲しかった。

表 9. 満足度の評定とその理由（Advanced コース）

評定値	記述内容
5	自分には非常勤講師としての経験がないため、もし講義を急に任されるようなことがあったときに、何も手がかりが無いように思っていた。しかし、今日の討論などを通じて、実際に経験のある方がどのような事に悩みどのような失敗をされ、どのような工夫をされているのかを垣間見ることができ、経験不足を多少なりとも補うことが出来た気がする。
5	まったく分野の異なる院生や研究員、講師の方たちと大学教育の在り方について討論する機会はめったになく、有意義に感じている。
5	ディスカッションでの意見交換が非常によかったと思いました。
5	教員を目指している他の学生の意見を聞いた。既に授業を担当している経験を持つ方の体験談を聞いた。
5	普段お話しする機会のない様々な専攻の方の忌憚のないご意見を伺うことができ、有意義でした。討論のときにあまり発言できなかったことを反省しております。
5	大学教育が抱える問題点とその解決案について、具体的に考え、知る機会が得られた。
5	異なる背景をお持ちの方と様々な経験からの意見交流が勉強になりました。
4	活発に意見交換できました。既に非常勤講師の経験のある方々のお話が聞けた。
4	参加されている皆さんが、活発に議論されていて、参考になったものの、その分なかなか討論に自分が参加することができなかった。
4	普段余り接することがない方と議論ができて、シンプルに楽しむことができました。しかし、正直なところ、もっと具体的な Tip を教えてもらったり、ディスカッションを行う際のファシリテーターの心得などを、実体験を通じて教えて欲しかったです。また advanced コースの割には教えている経験のある人が少なく、もっと現場での苦労話や悩みをシェアしたかったです。と書いたものの、基本的には満足しています。
4	教え方を具体的に教わることを期待していたが、教え方を自分で考えることを促されたように思います。そのことは、むしろ重要なことなのかもしれないと考えています。

4	議論したいことは山ほどあるが、時間が足りない。
4	様々なバックグラウンドを持つ人達と議論でき、視野が広がった。
4	模擬授業後の討論会や全体ディスカッション等、非常に有意義で学ぶところが多かった。しかし全体的に時間に余裕がなく、折角の機会なのでもっと時間にゆとりがある構成であればより有意義であったと思う。
4	様々な人の考えを聞き、考えることができたから。
3	運営では、様々な工夫がされていると思いますが、参加者の意欲にはばらつきがあり、あまり議論が深まったとは思えなかった。

5-3. 今後の改善に向けて

来年度の改善を検討するために、「今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい」という質問のもと、自由記述による回答を求めた。その結果を表 10、表 11 に示した。

Basic コースでは、グループ討論の時間やプログラムの構成や時間配分、リアルタイム・ドキュメンテーションに関する記述が多くみられた。特に、グループ討論については時間を長くしてほしいという声が多く、参加者が議論をより深めたいと考えていることがうかがえた。

Advanced コースでは、模擬授業・公開検討会に関わることやプログラム構成、議論の進め方など様々な回答が得られた。また、「授業経験者のみが参加できるようなコース」「教育歴である程度分ける」といった教育段階別の研修に関わる要望も出ていた点が、今年度の特徴として挙げられる。

表 10. Basic コースの今後の改善点に関する自由記述

記述内容
ディスカッションの時間が短いのであと 10 分長くしてほしい。
特に気付いた点はありません。リアルタイム・ドキュメンテーションはとても素晴らしかったが、本講座とのつながりが分からなかった。
荷物を持った教室移動の回数を減らす。グループディスカッションのディスカッション時間を増やす。(語り足りない。or 議論を深めきれない場面があり、結果としてグループ間の意見や結論の差異が生まれにくかった印象を受けた。) 最後のメッセージちょっと笑えました。意図分かりました。
映像の音声のボリュームを調整すると良いと思います。音量↓の方が良いと思います。
ちょっと全体として拘束時間が長く、参加する負担が大きい。予定に組みこみにくい。リアルタイム・ドキュメンテーションがちょっと長い。短くするとよりまとまりなく、だれないよいものになると思う。
できれば、休息を午前中に 5 分でもいいので入れて頂けると良いと思います。
休憩時間の充実 (縛り過ぎる教育は柔軟性と才能をつぶす余計なお世話になりがち) 個人情報、プライバシーへの配慮
グループディスカッションで専門分野の近い人が重なってしまったので、もう少しばらけても良かったかなと思いました。
教育実践講座ということで大学での授業に焦点が当たっていましたが、研究室での学生の教育 (指導) という点でも討論がしてみたいです。また、博士課程の学生の参加が多いようなので、教員になるための訓練というようなテーマでの討論もやってみてみたいです。
ポディー・ワークのマイクの調子が悪く、声が聞き取りにくかったので、改善するべきだと思いました。
リアルタイム・ドキュメンテーションの意図がよく分かりませんでした。
討論の時間がもう少し長いとよいかと思いました。
「高等教育の現状」講座なのか「教育実践」講座なのかより明確に分けて講座を行って欲しいと思いました。
ポディーワークを実際にどう活かせばよいのか具体的に例示して頂けると嬉しいです。リアルタイム・ドキュメンテーションは良かったのですが、狙いが少し分かりにくいです。
時間的制約があるとは思いますが、グループ討論の時間をより充実させても良いかと思います。
講座の開講前に、予め参加者が指定された資料や文献などを読んで考えてから参加するという方式をとれば共通の知識に基づいてより深いディスカッションが行えると思う。
セッション間に休みを取ってほしい。
時間をもう少しゆるやかな設定にした方がより良くなるんじゃないかと思う。
トイレ休憩をもう少し入れて頂ければありがたいです。

グループ討論で発言者にかたよりが出ていたように思います。多様な意見を聴きたかったので、司会者（ファシリテーター）がサポートして発言を促すことも必要かと思いました。
今回はかなり大きなテーマが設定されていたように思う。今後経験者をゲストに招いてテーマを絞り込むなどの試みがあってよいと思った。
飯吉教授の講義内容はもっと考察があった方がよいと思いました。最後のビデオは不要だと思いました。
もう少しグループ討論の時間を長く取ってもらえると良いなと思った。
ボディー・ワークのねらいなどがうまく参加者に伝わっていなかったように感じた。もう少し目標設定を明確にした方がよいように思う。
合宿形式などにしてみても面白いかもしれません。
グループ討論がまとめ易くなるようにアウトラインを示しておいた方がよいかもしれません。
グループディスカッションの時間が短かったのでもう少し時間をとるかテーマを絞ってディスカッションするともっと深い討論ができたのではと思います。でもそうすると、狭い範囲の議論しかできず、広く見られない気がします。
セッションとグループ討論の数を減らして、1つ1つのセッション、グループ討論を長くして欲しい。ボディー・ワークは、若干干だれた印象を受けた。修了証は、まとめて一人で良いと思う。

表 11. Advanced コースの今後の改善点に関する自由記述

記述内容
模擬公開授業のセッションにおいて、その授業がどのような前提をもって構成されたのか分かりにくかった。また、聴講するに際して、どのような前提をもって聴けば良いのが分からなかった。（講義の後で「エチオピアのことは既にだいたい知っている学生をイメージしてなどはありましたが）以上のことから、どのようなディスカッションになるのかイメージできず、聴き手に回ってしまった。（それでも勉強にはなりました。）
一日でつめこみになってしまうため、もう少し時間的に余裕があると良い。
午前中セッションでの部屋の机配置をもっと密にした方がよいと思う。なるべく早い段階でアイスブレイクをした方がよい。（ランチの時にはまだ十分アイスブレイクできていなかった）理系内容の模擬授業も行った方がよいかと思った。リアルタイム・ドキュメンテーションは不必要かつ時間をとるだけ（作成する意義が不明だった）
大学教育を考える際にどのような大学、どのような形態の授業で教えるのかを絞った上でディスカッション等をやるのか決めておいた方がよいかもしれない。
参加者が参加後も連絡が取れて、議論ができるような場、あるいはネット上での議論の場を作れたらよいのではと思いました。
Advanced コースの上に授業経験者のみが参加できるようなコースがあってもいいかと思いました。リアルタイム・ドキュメンテーションは、一体何のためにどういう意図があってやられているのかよく分からない。思い出作りの域を出ていなくて、Discussion などの内容が Feedback されるのかと思いました。そういう内容ではなかったので、ちょっと残念です。まあ、この Speed で Documentary を作ってしまうのは凄いいと思いましたけど・・・
模擬公開授業は、講師と受講者の認識に違いがあって難しいものがあるように思いました。
（京大のFDの取り組みをほとんど知らずにコメントしますが）複数回にわたる継続的なカリキュラムも必要と思いました。Adv コースは、議論主体で問題の共有まではできたように思うが、問題解決に繋がるような議論や具体的な議論には至らなかったと感じた。また、講義は運動の様に分かっているけどできないという技術的な事もある。その点では議論だけでなく、具体的なトレーニングも必要に思う。（模擬授業はそれにあたるとは思いますが）
教授の先生方もこのような授業に対して考えてみる機会を持たれば良いのではないかなと思います。教員を目指している若い層はみんなそれなりに教えることについて考えているとは思いますが、中高年の先生で教える気がない先生（身近にいるのです）のやる気を出させてほしいと思います。
模擬公開授業で、普段の授業ではパワーポイントを使わないのに今回だけパワーポイントを使ったという話を聞いてそれならば普段通りのスタイルでやっていただいた方が有意義だったのではないかなと思う。あと、朝の自己紹介が午後のグループ討論にそこまで生きていなかった印象を持った。しかし全員が色々それぞれ討論したい点を抱えてきているため、その全部を網羅することは難しいと思うが、改善できればより有意義になってくると思う。
昨年度 Basic に参加した際にも感じたことですが、こうした機会が年一回、一日だけというのは少々惜しい気がします。講義で検討した問題等を継続して議論できる機会・場があれば、より有意義な活動になるのではないかなと思う。
教育歴である程度分けていただけても良かったかと思えます。
B コース、A コース合同のプログラムが一部にあっても面白いのではないかなと思いました。
これまでのように学部教育について考える、議論する試みも継続してほしいが、それと平行して「大学院教育について」の話題も考える機会を作って頂きたい。その際はなるべく全ての研究科をカバーするようなスタッフ体制を敷いてもらえればと思います。「大学院教育＝従弟制度なので議論は難しい」で片付けるのではなく、「修士・博士の学位とは何か」という本質に迫っている会があれば、今回と同様のニーズがあると思う。
教育の現場における事例をあまり知らず、話題に困る場面が多少あった。どうしても発言者が偏りがちだった。個性でもあるのだろうが、一人一人が輝ける場面があれば良いなと思う。最後の振り返りの時間がとても良かったです。

5-4. 来年度の本講座やオンライン/対面コミュニティへの参加希望

Basic コースの受講生に対して、「来年度、Advanced コースが開講されるならば、参加したいと思いますか」という質問のもとに、「1.まったくそう思わない」から「5.強くそう思う」までの5段階で評定してもらった。その結果、「5.強くそう思う」が2名(6.2%)、「4.そう思う」が27名(84.4%)、「3.どちらとも言えない」が3名(9.4%)、「2.あまりそう思わない」と「1.まったくそう思わない」は0名で、平均は3.97であった。多くの参加者がAdvanced コースに参加したいと考えていることが示された。

また、来年度の参加案内の送付希望を「希望する」「希望しない」の2択で尋ねたところ、Basic コースは27名(84.4%)、Advanced コースでは8名(50%)が「希望する」と回答した。Basic コースの継続的参加への意欲は例年通りであるが、Advanced コースについては、例年よりも低いという結果であった。Advanced コースの参加者については、来年度の参加案内の送付に関連して、事後アンケートの余白に、「アドバンスト修了者は参加できるのでしょうか」「参加できるコースがありません」という記載が見られたことから、「Advanced コースは繰り返し受講することができる」ことを今後周知していく必要があるだろう。

最後に、「今後も継続して大学の授業改善について考える次のようなコミュニティがあれば、参加したいと思いますか」という質問に「はい」「いいえ」の2択で回答を求めたところ、「(1) SNS などを利用し、オンライン上で情報・意見交換をするコミュニティ」についてはBasic コースで24名(75.0%)、Advanced コースでは11名(68.8%)が「はい」と回答していた。「(2) 実際に集まり、対面で情報・意見交換をするコミュニティ」についてはBasic コースで27名(84.4%)、Advanced コースでは14名(87.5%)が「はい」と回答していた。これまでの本講座の傾向と同様に、対面コミュニティを望む声が多いといえる。Advanced コースの自由記述にもオンラインもしくは対面コミュニティを望む声があがっており、本講座の参加者の多くは、一日の研修に留まらない継続的な交流を望んでいることがこの結果から推察される。

6. おわりに

本講座は、将来、大学教育に携わることを希望している京都大学の大学院生、ポストドクター(PD)、研修員のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するものである。8回目の今年度の受講生からの評価もおおむね例年通り高いものであったと言える。しかしながら一方で、現職の大学教員による講義を生で聴きたいという意見も少なからず残っていることには考慮の余地がある。

冒頭でも述べた通り、本講座は「大学院生のための」と銘打ってはいるが、Advanced コースが創設されて以来、大学院生以外からの参加者も非常に多く、その多様化が著しい。Advanced コースは、大学院生の参加者とそれ以外の参加者(OD・PD・研究員・非常勤講師など)がおおよそ半々である。今後は、そういった参加者層も含めながら、交流・ネットワークの形成を行い、運営側の適切な道筋づくりが重要になると言える。

(高橋 雄介、松下 佳代)

(補). Advanced コース参加者の感想

私がはじめて「大学院生のための教育実践講座」（以下「実践講座」）に参加したのは2007年のことだった。あの時はまだ Advanced コースがなかったためか、大学教育の経験がない参加者が多かったように思う。それでも大学で講義を受けてきた経験に基づいて、活発な意見交換が繰り広げられた。

私が思うに「実践講座」の魅力のひとつは、初対面の異分野の研究者達と、熱気を帯びたディスカッションができ、最終的に協同作業が成立するところにある。参加者は皆、優秀である。そういう人達と出会い、その肉声を聴けることは、それだけでも刺激的だ。さらに、セッションを重ねるに従って、参加者間の距離が縮まり、闊達で真摯なディスカッションが実現すると、参加者の間に少し昂揚した気分が広がって行く。少し大袈裟だが、「実践講座」には祝祭的時空が立ち現れる瞬間があり、それが大きな魅力になっているように思う。

さて、そんな経験をした後、飲み会に繰り出した2007年度の参加者達の中から、その後も連絡を取り合うメンバーが現れ、翌年度以降の「実践講座」参加者にも声をかけて時々集まり、Young-RICE という名で活動していたことは、すでに本叢書28巻から30巻で報告したとおりである。そういう活動が取り持つ縁で私は2011年度から、高等教育研究開発推進センターの研究員として採用して頂いた。出会いから6年がたった現在、Young-RICEのメンバーはほぼ全員、博士後期課程を修了し、大学生を教える立場になった。しかし、京都を離れたメンバーも多く、実質的な活動は休止状態である。

だが、振り返ると「実践講座」で得たものの大きさに、改めて気づく。

私自身は2009年度から某大学の非常勤講師として教壇に立つようになり、今年度で4年目になる。最初の2年は要領がつかめず、教壇に立つことを苦行のように感じていた。その状態から脱出するのに役立ってくれたのが、Young-RICE でしていた模擬授業検討会だった。

模擬授業の聴講生は、Young-RICE を立ち上げた、大学教育初心者の異分野の研究者達。彼らのコメントには、「初学者に教える」ためのヒントがあった。模擬授業を聴いて自分が感じたことは、「我がふり」を見直す良い材料になった。私は模擬授業検討会を通して、自分の講義に何が足りないのか、どのような配慮が必要なのかを学んでいった。

さらに、昨年度の「実践講座」の Advanced コースで知り合った参加者の助言で、私は学生達との接し方を変えることができた。（詳細は本叢書30号で報告したのでここでは省く。）3年目にして、私はやっと肩に入りすぎていた力を抜くコツを知ったのである。

さて、4年目の今年、私は「先生という職業も悪くないな」と思えるようになった。学生達との対話が楽しいのである。ただ、先日、非常に困惑したことがあった。毎回出席票にコメントや感想を書かせて提出させるのだが、1度だけ大半の学生が私の話を全く聴いていなかったとしか思えない回があったのである。原因は、講義中の tweet だった。

自分が学生だった頃には考えられなかった事態に、最初は困惑した。しかし、ふと、何年前かの「実践講座」の記憶がよみがえった。そう言えば、twitter を利用した講義を披露された先生がいらした。最先端のツールを取り入れて講義をするという方法もあることに気づいた。自分が受けてきた講義スタイルに固執する必要はない。そう思った時、今年度の「実践講座」で、アメリカの大学の講義スタイルに関する話を聴いたことを思い出した。

私自身が、即、その情報を活用できるかどうかは置いておいて、新しい情報というものは、思考停止状態に風穴を開けてくれる。なんとなく余裕ができた私は、落ち着いて twitter 対策を講じることができ、事態は収拾したのである。

(井藤 美由紀)

実施プログラム = Basic =

9時45分～	受 付
10時00分～	開会式 挨拶 京都大学理事 淡路 敏之 趣旨とプログラムの説明 高等教育研究開発推進センター 特定准教授 酒井 博之
10時20分～	セッション1 グループ討論1：（自己紹介）「大学の授業をどう思うか」
11時20分～	セッション2 ミニ講義1：「大学授業の現在と未来」 高等教育研究開発推進センター 教授 飯吉 透
11時45分～	セッション3 ランチと自由討論
13時00分～	セッション4 グループ討論2：「大学の授業で教師に求められるもの」
14時00分～	セッション5 ボディワーク：「他者とのつながり・自分とのつながり」 京都文教大学 教授 濱野 清志
15時40分～	休 憩
15時50分～	セッション6 ミニ講義2：「大学授業の現場から」 高等教育研究開発推進センター 特定助教 半澤 礼之
16時15分～	グループ討論整理
16時30分～	セッション7 全体討論：「大学で教えるために」
17時30分～	セッション8 ミニ講義3：「大学で教えるということ」 高等教育研究開発推進センター 教授 大塚 雄作
17時55分～	閉会式 挨拶・修了証授与 京都大学理事 淡路 敏之
閉会式終了後	情報交換会（18時30分まで）

実施プログラム = Advanced =

9時45分～	受 付
10時00分～	開会式 挨 拶 京都大学理事 淡路 敏之 趣旨とプログラムの説明 高等教育研究開発推進センター 特定准教授 酒井 博之
10時20分～	セッション1 全体討論1：（自己紹介）「教える側からみた大学授業」
11時45分～	セッション2 ランチと自由討論
13時00分～	セッション3 模擬公開授業・検討会
	休 憩 （10分）
15時20分～	セッション4 グループ・全体討論
17時55分～	閉会式 挨 拶・修了証授与 京都大学理事 淡路 敏之
閉会式終了後	情報交換会（18時30分まで）

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

事前アンケート

京都大学 FD 研究検討委員会

このアンケートは、本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前：_____

ご所属：_____

*京大以外の方は、大学名もお書き下さい

あてはまる番号1つを〔 〕内にご記入下さい。

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士 []

学年 ① 1 年 ② 2 年 ③ 3 年 ④ 4 年以上 []

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他 () []

参加コース： ① Basic ② Advanced []

問1 この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまる番号すべてを〔 〕内にご回答の上、⑥・⑨の場合は詳細を（ ）内にご記入下さい）
〔 〕

- ① 指導教員から ② その他の教員から ③ 友人から ④ 大学の HP で
⑤ センターの HP で ⑥ ポスターで（掲示場所： ）
⑦ ビラで ⑧ E メール, 郵便による案内で ⑨ その他（ ）

問2 大学での教育経験はありますか？ある方は行っている年数もお答え下さい。（あてはまる番号すべてを〔 〕内にご回答の上、②・③の場合は年数を（ ）内にご記入下さい）
〔 〕

- ① なし ② TA（約 年） ③ 非常勤講師（約 年）

問3 大学教員になることをどの程度希望していますか。(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい) 〔 〕

- ① 全く希望していない ② あまり希望していない ③ どちらともいえない
④ やや希望している ⑤ 非常に希望している

問4 どうして、この講座を受講しようと思いましたか？(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい)

問4－1.大学での教育活動に関心があるから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4－2.大学で教えるための知識・技術を身につけたいから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4－3.大学教育について考える機会が欲しかったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4－4.実際に教育に関わる中で悩んだり困ったりしたことがあるから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4－5.他の大学院生が大学教育についてどのような考えをもっているか知りたいから〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4－6.他の大学院生と、大学教育について意見交換したかったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4－7.他の大学院生と人間関係をつくりたかったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4－8.今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問 4－9.その他の受講動機がある方は、欄内に自由にご記述ください。

【これ以降は、Advanced コースの参加者のみお答え下さい】

問 5 「模擬公開授業・検討会」では、参加者のうちどなたかに実際に模擬授業を行っていただく予定です(1 授業につき概要説明 10 分＋実演 20 分程度)。あなたがその授業者となり、模擬授業を行っていただくことは可能ですか？(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい。②の場合は、懸案事項を()内にご記入下さい) 〔 〕

- ① 行うことは可能
- ② 条件によっては可能(懸案事項：)
- ③ 行うことは不可能

問 6 いずれかの教員免許をお持ちですか？(あてはまる番号すべてを〔 〕内にご記入下さい。④の場合は、詳細を()内にご記入下さい)
〔 〕

- ①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④その他() ⑤なし

問 7 小・中・高等学校での指導経験はありますか？(あてはまる番号すべてを〔 〕内にご記入下さい)
〔 〕

- ①小学校であり ②中学校であり ③高等学校であり ④なし

問 8 塾・家庭教師などでの指導経験はありますか？(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい) 〔 〕

- ①あり ②なし

問 9 学部生時代に受けた授業はどの程度満足なものでしたか？(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい) 〔 〕

- ①まったく満足していない ②あまり満足していない ③どちらともいえない
- ④まあまあ満足している ⑤非常に満足している

問１０ あなたが考える大学教育における問題点について、欄内に自由にご記述下さい。

問１１ 研修会当日に議論したいテーマについて、欄内に自由にご記述ください

【参加にあたってのお願い】

- 研修会当日までに、自分が大学で授業を行う上で抱えている問題点(授業経験のない方は、問題になると考えられる点)と、それに対する対応策について整理しておいてください。
- また、自分が授業を行う上で参考にしている文献などがありましたら、当日ご持参頂ければと思います。

ご協力ありがとうございました。

大学授業の現在と未来

飯 吉 透

京都大学 高等教育研究開発推進センター

大学院生のための教育実践講座 2012年8月7日

一人の教育者の情熱と狂気

サーカスのように夢中になれる大講義「基礎物理学」



情熱増幅装置としてのオープンエデュケーション



6



8



5



7

ノーベル物理学賞の賞金で作られた 物理学習用オープン教材

From This Week's Chronicle

A NEW FORMULA FOR TEACHING
A Nobel Prize winner in physics states that the best way to teach science is through the use of interactive materials. Carl E. Wieman (Nobel Prize winner in physics) says that he misses his research, but that the Nobel Prize brings a new perspective on teaching science. (Photograph by Lisa Ruffolo)

Carl Wieman教授とコロラド大学ボルダー校の仲間によるプロジェクト

9

MIT OpenCourseWare: 2000以上の講義教材・ビデオを公開

MIT OpenCourseWare
MIT OpenCourseWare is a free, open, and open educational resource project. It provides access to MIT OpenCourseWare materials, including lecture notes, assignments, and exams. The project is supported by the MIT Office of Open Learning.

OpenCourseWare
OpenCourseWare is a free, open, and open educational resource project. It provides access to MIT OpenCourseWare materials, including lecture notes, assignments, and exams. The project is supported by the MIT Office of Open Learning.

11

拡がり続けるオープンコンテンツの世界 既に何万ものオープンな教材が利用可能

**オープン
コンテンツ**

and more...

NSDL
THE NATIONAL SCIENCE DIGITAL LIBRARY

universia

OOPS
Opendata Open Publishing System

CON
Creative Commons

JOCW
JOURNAL OF OPEN CONTENT WORKS

CLOE
COOPERATIVE LEARNING OPEN EDUCATION

ARIADNE
European Digital Library

openlearninginitiative

MITOPENCOURSEWARE
MIT OpenCourseWare

TMERLOT
The Merlot Project

edna.edu.au

World Lecture Hall

SCOUT
Software Center for Open University Teaching

LORNET

connexions
Sharing knowledge and building communities

LOLA EXCHANGE
Learning Open Learning Applications

A Digital Library for Engineering Education

10

OpenCourseWare Consortium

OPEN COURSEWARE
JOURNAL OF OPEN CONTENT WORKS

USE
Find Course Materials

SHARE
Share Your University's Courses

SUPPORT
Support The OCW Movement

JOIN NOW

世界各国の100以上の大学・機関が参加し、既に数千もの講義教材が公開されている。

12

Open Learning Initiative (Carnegie Mellon University)

The Open Learning Initiative offers online courses to anyone who wants to learn or teach. Our aim is to combine open, high-quality courses, continuous feedback, and adaptive learning and random higher education. Learn more.

Sign up to get updates

Learn with OLI **Teach with OLI** **Get to know OLI**

The Science of Learning
Psychology
Statistics
Anatomy & Physiology

HEWLETT FOUNDATION
The Hewlett Foundation is a private foundation that has been supporting the advancement of science and technology education since 1963. We are currently supporting a number of projects in the field of science and technology education.

より深く、より効率的に、より確実に学ばせる工夫

14

AI(人工知能)技術を応用した自学サポートツール(Cognitive Tutor)をコース教材と共に提供

Calculate the sum of three concurrent forces.

Force F_1 has a magnitude of 5N, its line of action is parallel to the line through points A (1, 1) and B (4, 3).

Force F_2 has a magnitude of 4N, its line of action is parallel to a 3-4-5 triangle.

Force F_3 has a magnitude of 7N, its line of action is at 60 degrees to the horizontal.

What is the magnitude of the sum?
R = N

What is the direction of the sum?
θ = degrees

Hint

openlearninginitiative

(Candace Thille, 2007)

16

ウェブ上でオープン化されている講義教材や授業ビデオは、より良く教えるための宝庫！

WELCOME TO KYOTO-UI OCM.

Message from President

The three principles of Kyoto University are: "to advance the frontiers of knowledge, to contribute to the world, and to nurture the next generation." We are committed to these principles and are dedicated to providing the best education possible.

Departments

- Faculty of Integrated Science
- Faculty of Science
- Faculty of Letters
- Faculty of Law
- Faculty of Economics
- Faculty of Education
- Faculty of Engineering
- Faculty of Medicine
- Faculty of Pharmaceutical Sciences
- Faculty of Agriculture
- Faculty of Veterinary Medicine
- Graduate School of Education
- Graduate School of Science
- Graduate School of Letters
- Graduate School of Law
- Graduate School of Economics
- Graduate School of Engineering
- Graduate School of Medicine
- Graduate School of Pharmaceutical Sciences
- Graduate School of Agriculture
- Graduate School of Veterinary Medicine
- Graduate School of International Studies
- Graduate School of Global Studies
- Graduate School of Information Science

13

インタラクティブなシミュレーションをコース教材に内包

Week 1: Electrolysis

Add Dissociation and Equilibrium

In this, and following, sections, we will begin to develop a quantitative relationship between the strength of an acid and how the equilibrium constant will depend on the pH of the solution. We'll start with water, acids, and dissociation into the hydrogen ion, hydronium, and a proton.

$$CH_3COOH + H_2O \rightleftharpoons CH_3COO^- + H^+$$

The extent to which the acid will dissociate is given by the equilibrium constant for dissociation of acids.

$$K_a = \frac{[CH_3COO^-][H^+]}{[CH_3COOH]}$$

$$K_a$$
 is the ratio of the mathematical product of the concentrations of each product of the reaction to the reactant product in the reaction. In this case, the ratio of the concentration of the products to the concentration of the reactants. The equilibrium constant is a measure of the extent to which a reaction proceeds. The larger the value of K_a , the more the reaction proceeds. The equilibrium constant is a measure of the extent to which a reaction proceeds. The larger the value of K_a , the more the reaction proceeds.

15

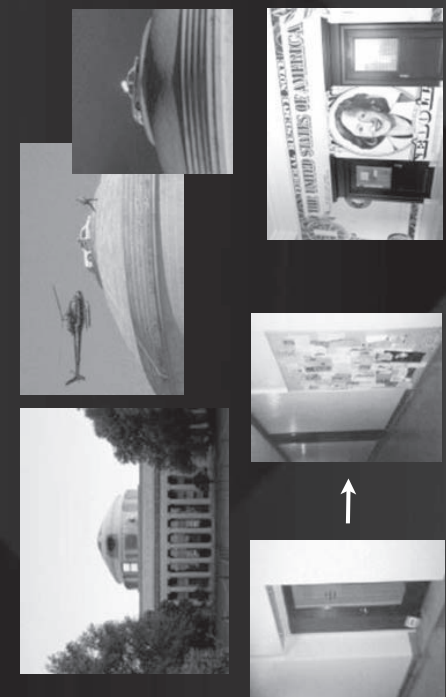
自習過程の学習診断結果を教員や学生自身に伝え、理解にくいしにくい概念や学習項目を明らかにする。



(Candace Thille, 2007)

17

何故MITは、イノベティブなのか？
 創意工夫・奇想天外・エンターテインメントの文化



MIT

19

大学教育におけるFlipped Classroomも可能
 Open Learning Initiative (Carnegie Mellon University)



- 学習科学や認知科学に基づいたコース設計
- 効率的・効果的な学習・教授の追求
- 理解度・学習進捗の可視化
- 教授法・学習法・教材の改善のための教員と学生のコミュニケーション作りを支援

18

京大もイノベティブ：折田先生像！



20

Hands-On ENGINEERING class for Freshmen!

Prereq:
8.01, 18.01
Units: 3-3-3
Earn CI Credit
Can substitute as
pre-req for 2.0071

2.00a/16.00a Spring 2009

Exploring Sea, Space & Earth: FUNDAMENTALS of Engineering Design

<http://web.mit.edu/2.00a/www>

Introduces core engineering themes, principles, and modes of thinking. Gain experience with fabrication and design for space/earth/ocean exploration-based projects. Learn more about the various engineering disciplines, including aeroastro, mechanical and ocean engineering.

...ENGINEER...DESIGN...
...CREATE...
...DREAM...PLAY...

Professors Alexandra Techet & Dava Newman



21

Learning Objectives



1. **Engage in Engineering inquiry and discussion and demonstrate curiosity.** Students accept responsibility for their own learning and are independent learners.
2. **Use and calculate engineering FUNDAMENTALS** (i.e., equations of motion, energy, constitutive equations, momentum, energy, free body diagrams, life, drag, and propulsion) to **evaluate** designs and robotic vehicle performance (homework, reading assessments, laboratory recitations, design reviews).
3. **Approximate/estimate** performance of vehicles, and possess a breadth of **integrated fundamental knowledge** in the sciences and engineering, humanities and arts (e.g. design notebooks, technical reports, web portfolio, laboratory recitations, poster session).
4. **Effectively communicate their design ideas and process** through written report, oral presentation and final poster presentation.
5. **Team design** of robotic exploration vehicle (notebooks, prototypes, drawings (hard copy and electronic), computer models, operational subsystems, operational vehicle, peer instruction).
6. **Contribute** effectively to team design (peer evaluations, self evaluations, TA and instructor evaluation).



22

Exploring Sea, Space AND Earth:

What do these three things have in common?



Space Shuttle

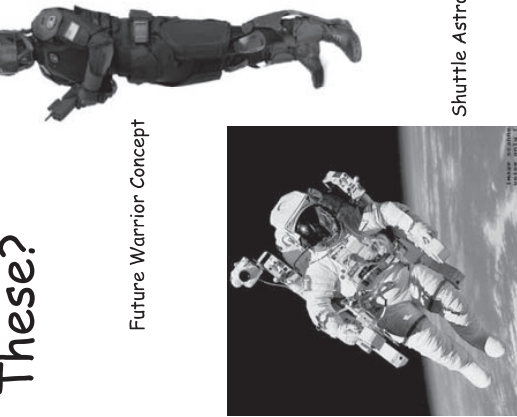
8th Largest Super-yacht

Paul Allen's 413' "Octopus"

Maserati Race Car

23

These?



Future Warrior Concept

Sylvia Earle in the Jim Suit

Shuttle Astronaut

24

2.00A/16.00A The Projects

Remotely Operated Underwater Vehicles (ROVs)
2006, 2007 & 2009

Land Sea Rovers
2008

Projects expose students to fundamental electronics (soldering, circuits, fuses, LEDs, switches, etc) & instrumentation (pressure, temp, salinity, etc) as well as fabrication skills, trouble shooting and team work.

TEAL (Technology Enable Active Learning)

The Gallery of Teaching and Learning - KEEP Case Studies: Transferring Knowledge and Experience

John Belcher教授と仲間たちによる授業改革プロジェクト

複数の学科・学部が協力して教育イノベーションを推進

Mathlets Mathlets Snapshot

数学科で開発されたMathletsが、物理学科のTEALでも利用されている。

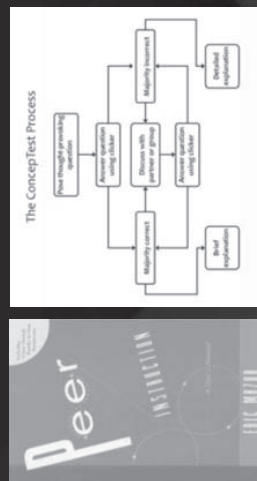
教育イノベーションは、一日にして成らず！

At MIT, Large Lectures Are Going the Way of the Blackboard - NYTimes.com

MIT TechTV - Perspectives of TEAL

Peer Instruction

基本的な概念や手法に対して学生の注意を集中させながら、講義中の学生同士のインタラクションを通じ深い理解を促す教授・学習方法



29

学部・学科レベルでの教員同士の教育知とノウハウの共有

31

学習情報分析を利用しアクティブな協調学習を最適化

Prof. Eric Mazur's Group
@Harvard University

30

「互いに学び教え合うこと」、「学ぶために教え、教えるために学ぶこと」の大切さ。

「学びたい」「学んでもらいたい」と切望し、希求しているか？ そのような人たちとは、どこで出会えるのか？

32

OpenStudy : 世界中の学生が学び合い教え合う



34

UK Open University



36

Tutoring Redefined

Get free help instantly from over 100,000 students just like you.

Get Started

Simple. Fast. and Free.

Get live help

Round help Ask a question, and get an answer from a student just like you.

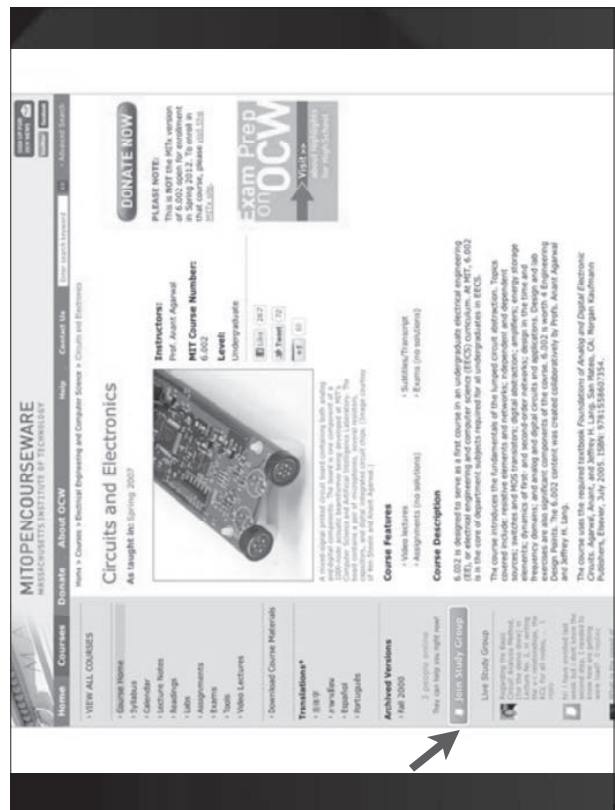
Meet students

Find out what you can learn from other students studying the same thing's you are.

Become a hero

Help students when they need it most and achieve legendary status among business worldwide.

33



35

UK Open University

OpenLearn プロジェクト



- Open Universityの教材の一部を公開
- 学習コミュニティ作りを支援
- LMSは、Moodleを利用

37

Massive Open Online Course: MITx



39

Massive Open Online Course



38

MOOC Wars? Coursera vs. edX



40

Western Governors University

Western Governors University website showing various degree programs and online learning options. The page includes a navigation bar with links like 'ABOUT WGU', 'ADMISSIONS', 'SUPPORT', and 'CONTACT US'. The main content area features a large banner with the text 'Learn more. Become more. Online.' and a grid of degree programs including Business, Education, Health Sciences, and Information Technology. A sidebar on the right lists 'DEGREE PROGRAMS' and 'SUPPORT SERVICES'.

41

Peer-To-Peer U & U of The People

世界中の有志によってボランティア的に運営され、学生は、無料で講義やグループ学習に参加したり、試験やレポートなどによる学習評価を受けることができる。

Peer-To-Peer U & U of The People website showing course listings and community features. The page includes a navigation bar with links like 'ABOUT', 'COURSES', 'SUPPORT', and 'CONTACT US'. The main content area features a large banner with the text 'TAKE IT >' and a grid of course listings. A sidebar on the right lists 'COURSE CATEGORIES' and 'SUPPORT SERVICES'.

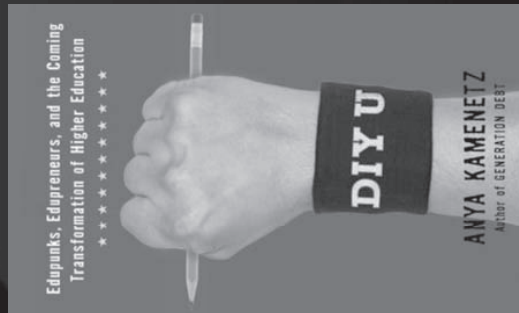
これらの新たな高等教育機関を通して受けられる教育によって、単位や学位を取得できるようになれば、高等教育の在り方は大きく変わる。

43

Western Governors University

- アメリカの19州の協力によって創設されたオンライン公立大学
- 通常の大学のように自前の履修課程に合わせた講義を提供していない
- 学生が十分な知識や技能を持ち合わせていることが試験やレポートで確認されれば、「学生が、どのような教材を使って、どのように学んだか」に関係なく、評価基準に従って単位を認定し、必要な単位数が揃えば学位を授与する」という制度を採用（学生は、オープンエデュケーションをフル活用できる）
- 学位取得にかかるコストは、普通の私立大学の六分の一程度
- 学士課程を最短二年間で修了可能なので、学生（特に社会人学生）が経済的・時間的に得られるメリットも大きい
- 学生のための24/7オンライン学習支援（教員やチューターによるカウンセリングなど）やオンライン図書館などの学習リソースなどの提供

42



44



「日本では生徒の側の問題として、強固な意志を持って本来に学習しようとしているものが少なく、教師の側の問題として、自分たちの地位に満足してそれ以上学ぼうとはせず、質も劣っている。(中略) 多くの日本人がこのような(オープンエデュケーションの)システムを知らないであらうことが残念でならないし、ある種日本にとって損失ではないかとの印象を受けた。」(法学部1年 古本達君)

「オープン化すると競争が促進されるため、オープンエデュケーションが日本の教育改善の鍵になりうる。しかし逆に、質の悪いものを進んでさげ出そうとはしないから、質の悪さがオープン化の妨げになる。ここに日本におけるオープンエデュケーションの問題がある。現在日本でオープンエデュケーションが普及してないのは、明確な目的がないからだと思う。」(経済学部1年 徳井わか菜さん)

をデキストにした初年次ゼミを通じ、京大の1年生たちは、何を感じ考えたか？

「東大・京大をはじめとする日本のトップ大学が、蓄積した教育的ナレッジを発信できないのは、残念で聊すかしいことだと感じる。」(理学部1年 上杉高生君)

「今この教育界の激動の時代に、大学の教育も変革を余儀なくされると思います。その重っ只中にある中で、私たち学生の身分ではその変革を見ているしかありませんが、ただそれに振り回されるのではなく、主体的に考え、取舍選択することが大切であろうと思います。変革の背景をきちんと理解していると、教育の目指す方向性がよりはっきりと分かり、より効率的に学ぶことができると思います。」(工学部1年 中村拓哉君)

「(オープンエデュケーションを)積極的に利用したいと思った。具体的には、大学の講義の補助教材として使ってみたいと思う。(中略) 京大OCWなどを利用して、講義の内容を完全に理解し、その理解をさらに深めたいと思う。」(文学部1年 足利聡太君)

「ある事柄について本来に学びたい者同士がオンライン上でコミュニティを作り、議論などを交わしながら積極的に学ぶというのは、これまでには存在しなかった学習形態である。Open Studyを通じてこのような学習形態を構築すれば、従来の何倍も効率よく、そして楽しく学習できることは間違いないと感じた。また、これは何も学ぶ側に關してのみ言えることではなく、教える側に関しても言えることである。」(経済学部1年 宮垣徹哉君)

*“If we learn today as we learned yesterday,
we rob ourselves of tomorrow.”*

*“If we teach today as we taught yesterday,
we rob our children of tomorrow.”*

- John Dewey (1916)

大学授業の現場から

高等教育研究開発推進センター
半澤 礼之

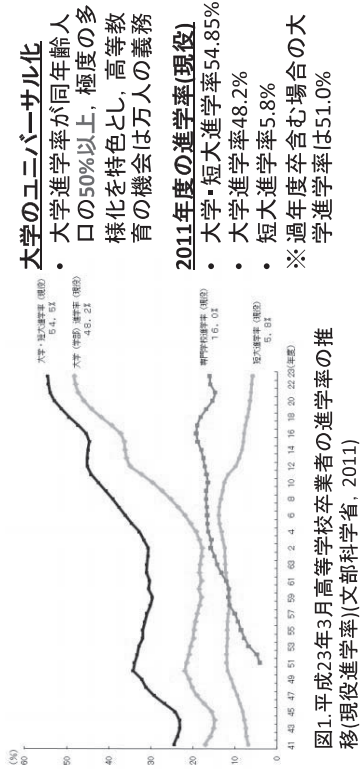
目次

- 1. 大学生とは誰か
- 2. 事例から見ると大学授業
- 3. 大学教員としての自己形成



1.大学生とは誰か

大学のユニバーサル化(トロウ,1976,2000)



1.大学生とは誰か

日本の大学数と学生数

- 大学数

Table1. 大学の設置者別大学数(文部科学省,2011)

区分	計	国立	公立	私立	私立の割合 %
平成13	校 669	校 99	校 74	校 496	74.1
18	校 744	校 87	校 89	校 568	76.3
19	校 756	校 87	校 89	校 580	76.7
20	校 765	校 86	校 90	校 589	77.0
21	校 773	校 86	校 92	校 595	77.0
22	校 778	校 86	校 95	校 597	76.7
23	校 780	校 86	校 95	校 599	76.8

- 学生数
- 2,893,434名(男子1,69,3276人, 女子1,200,158人)

大学の機能別分化に関する議論

1. 世界的研究・教育拠点
2. 高度専門職業人養成
3. 幅広い職業人養成
4. 総合的教養教育
5. 特定の専門分野(芸術・体育など)の教育・研究
6. 地域の生涯学習機会の拠点
7. 社会貢献機能(地域貢献・産学官連携・国際交流等)
(文部科学省,2005)

→ 各大学はこれらの機能のすべてではなく、一部を保有するのが通例

5

2.事例から考える大学授業

事例1:

- 1コマ60分授業

事例2:

- 1年生の8割が受講する「数学」の授業

事例3:

- 教えてもらえないので、勉強できません

2

現代の大学生と彼らに対する教育

- 量的な拡大に伴う、質の多様化
- 「教えられたように教える」ことが困難な場面に直面する可能性

→ 汎用性の高いティーチング・ティップスの活用

その活用で十分か？



- 佐藤 浩章 編 (2010). 大学教員のための授業方法とデザイン 玉川大学出版
- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹 (2001). 成長するティップス先生 玉川大学出版

3.大学教員としての自己形成

ティーチングティップスの活用で十分か？

- 困難な場面に対応するための一つの手段として有効
- 対応するのは誰か＝教員である私たち

ティップスを活用する、
私たち大学教員の成長が重要となる

2

大学教員の成長とは？

- 大学教員の役割：
 - 研究、**教育**、管理運営、社会貢献
 - 大学院生のための教育実践講座
- 「大学教員を目指す京都大学の大学院生に、教員への**自覚的自己形成**のきっかけを与えること」

自覚的自己形成とは？

- 大学教員としての土台作り
- 「大学観」「教育観」「研究観」

多様化する学生への対応

- 作られた土台の上に技術(ティップス)を積み上げていく
- 積み上げた技術を、自分の土台をもとに編み直す

2012年8月7日
大学院生のための教育実践講座2012
～大学でどう教えるか～

セッション8 三二講義3

京都大学 高等教育研究開発推進センター
大塚雄作

■ いい大学授業とは何だろうか？

- 授業の明解性・体系性 ← 内容分析
■ 授業の伝達性・活動性・応答性 ← 方法工夫
■ 視聴覚メディア活用・学生参画型授業・
学習評価の工夫
■ 学生の学習意欲・主体的学び ← 学生の多様性



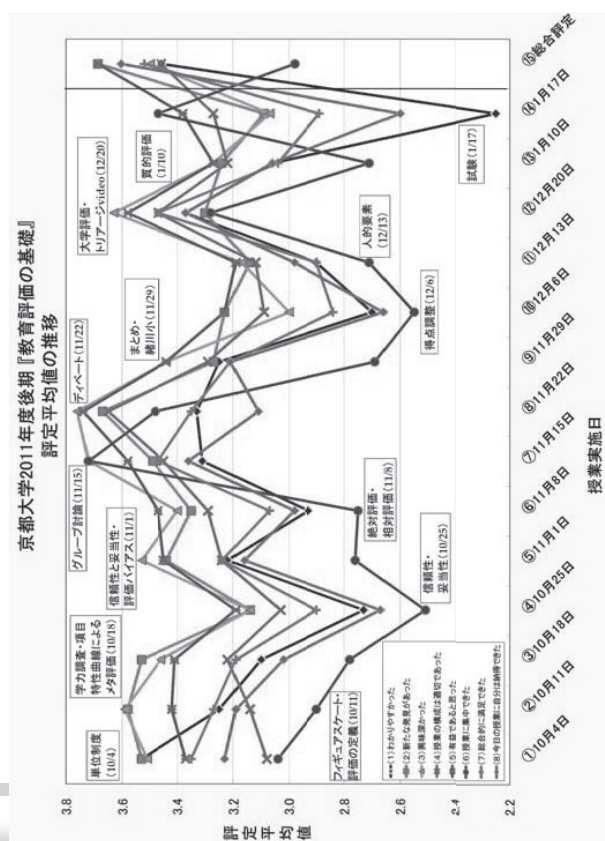
5

教育評価の基礎 (I) *Portfolio 2006-6* (5月23日)

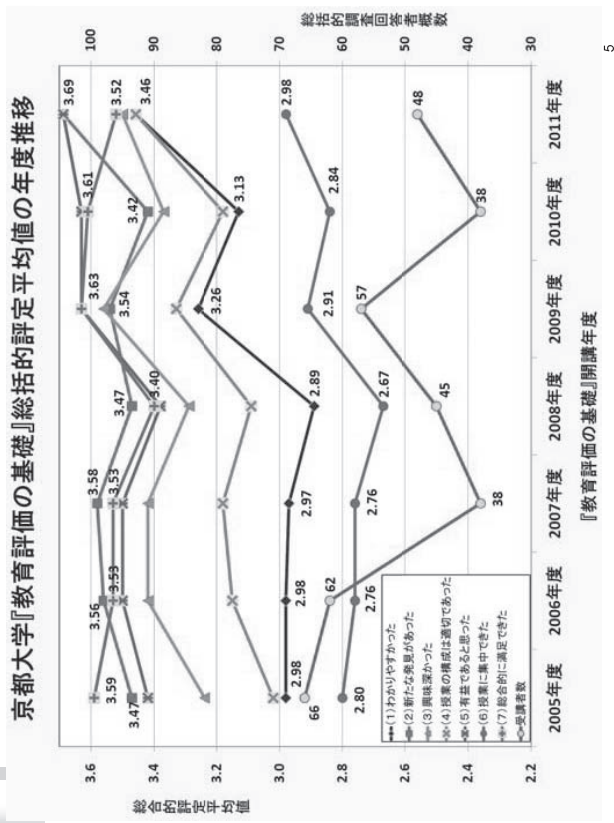
氏名	学生番号
(1) わかりやすかった	あしはほろち あまりあし あまらばし あや あしほろち あしほろち
(2) 新たな発見があった	あしほろち あまりあし あまらばし あや あしほろち あしほろち
(3) 興味深かった	あしほろち あまりあし あまらばし あや あしほろち あしほろち
(4) 授業の構成は適切であった	あしほろち あまりあし あまらばし あや あしほろち あしほろち
(5) 有益であると思った	あしほろち あまりあし あまらばし あや あしほろち あしほろち
(6) 授業に集中できた	あしほろち あまりあし あまらばし あや あしほろち あしほろち
(7) 総合的に満足できた	あしほろち あまりあし あまらばし あや あしほろち あしほろち

■今日の授業で、個人的に、ポイントと感じた点、疑問点、印象に残った点、授業で改善すべき点など、以下に自由に記載して下さい。(なお、必ず何か記入して下さい)

◆毎回授業アンケートの挑戦



2



5

■ 授業をひらく

- 「わかりやすさ」が低い
→ やさしくすればよいのか？
むしろ、演習・実習などの併用は？
- 「授業への集中度」が低い
→ 集中度を高める工夫をすればよいのか？
むしろ、事前の準備、今後の展開明示か？
- ★カリキュラムの視点からの改善の試みが肝要
＝ 授業は一人だけで改善できるものでない



7

■ 何が授業「改善」？

——これでもいいと思った瞬間が最も危ない！？

- 一つの側面を改善 → 他方が阻害されることがある

Cf. 角を矯めて牛を殺す

- 一人ひとりの学生の求めているものは異なる

→ 学生の求めとどう呼応するか
その定石はない？

Cf. 啐啄同機 (そったくどうき)

4

■ 学生との距離感

- 受講生はどんな学生だろう
- 学生はついてきてくれるだろうか

出身大学での授業のやりやすさ
若い時期の授業の学生との近い感覚
ポディワークの意味



6

■ 授業をどう創るか？

- 授業で教員は「講義」しなければならないのか？
「指導」しなければならないのか？

では、「講義」では 学生は「参加」しないのか？

- 授業は サービス産業？

顧客満足度を
満たせばよいか？

- 「学習共同体」という発想

= 共同体への参画過程・
そこでの創発的産出を学びと捉える



8

■ 大学教員の役割は？

- 授業の状況に応じた意志決定者
= デイレンマ・コーディネーター？
- 学習共同体の形成を促進するモデレーター？
- 学習共同体を「ひらき」、
学習共同体間を「つなぐ」
FD共同体への参加者？



『大学授業の課題』は山積している……

9

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

事後アンケート（Basic コース）

京都大学 FD 研究検討委員会

このアンケートは、来年度の本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前：_____

ご所属：_____ 研究科

あてはまるもの 1 つに○をつけて下さい

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士

学年 ① 1 年 ② 2 年 ③ 3 年 ④ 4 年以上

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他（_____）

以下の設問に対して、もっともあてはまる番号に1 つだけ○をつけ、空欄内は自由に記述してください。

問 1 本講座への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

5. 非常に満足している 4. まあまあ満足している 3. どちらとも言えない

2. あまり満足していない 1. まったく満足していない

その理由をお書き下さい。

裏面もご回答ください

問2 下記の（１）～（３）についてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

5. 非常に有意義だった	4. まあまあ有意義だった	3. どちらとも言えない
2. あまり有意義ではなかった	1. まったく有意義ではなかった	

(1) グループ討論・・・・・・・・・・・・・・・・	5	4	3	2	1
(2) ミニ講義・・・・・・・・・・・・・・・・	5	4	3	2	1
(3) ボディー・ワーク・・・・・・・・・・・・・・・・	5	4	3	2	1
(4) リアルタイム・ドキュメンテーション・・・・・・・・	5	4	3	2	1

問3 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

問4 本講座では、Basic コース経験者や大学授業経験者を対象とした Advanced コースを設けています。来年度、Advanced コースが開講されるならば、参加したいと思いますか。

5. 強くそう思う	4. そう思う	3. どちらとも言えない
2. あまりそう思わない	1. まったくそう思わない	

問5 来年度も本講座の参加案内の送付を希望されますか。

1. はい 0. いいえ

問6 今後も継続して大学の授業改善について考える次のようなコミュニティがあれば、参加したいと思いますか。

(1) SNS などを利用し、オンライン上で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

(2) 実際に集まり、対面で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

ご協力ありがとうございました

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

事後アンケート（Advanced コース）

京都大学 FD 研究検討委員会

このアンケートは、来年度の本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前：_____

ご所属：_____ 研究科

あてはまるもの 1 つに○をつけて下さい

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士

学年 ① 1 年 ② 2 年 ③ 3 年 ④ 4 年以上

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他（_____）

以下の設問に対して、もっともあてはまる番号に1 つだけ○をつけ、空欄内は自由に記述してください。

問 1 本講座への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

5. 非常に満足している 4. まあまあ満足している 3. どちらとも言えない
2. あまり満足していない 1. まったく満足していない

その理由をお書き下さい。

裏面もご回答ください

問2 下記の（１）～（２）についてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

5. 非常に有意義だった 4. まあまあ有意義だった 3. どちらとも言えない
2. あまり有意義ではなかった 1. まったく有意義ではなかった

（１）模擬公開授業・検討会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5 4 3 2 1

（２）グループ討論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5 4 3 2 1

（３）リアルタイム・ドキュメンテーション・・・・・・・・・・ 5 4 3 2 1

問3 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

問4 来年度も本講座の参加案内の送付を希望されますか。

1. はい 0. いいえ

問5 今後も継続して大学の授業改善について考える次のようなコミュニティがあれば、参加したいと思いますか。

（１）SNS などを利用し、オンライン上で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

（２）実際に集まり、対面で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

ご協力ありがとうございました

II-5. 新任教員教育セミナー2012

1. プログラムの目的と経緯

1-1. 全学的な取組として

京都大学では、全学的な FD 活動として、毎年 9 月に、高等教育研究開発推進機構主催の「全学教育シンポジウム」が開催されている。このシンポジウムには、総長・理事をはじめ 200 名あまりの教職員が参加し、教育に関するテーマについて情報提供や意見交換が行われている。だが、教育経験別教育研修としては、大学院生対象の「大学院生のための教育実践講座」（II-4 参照）が実施されているのみで、全学的な教員向けの研修は平成 21 年度まで行われていなかった。

一方、京都大学の第 2 期中期目標・中期計画では、学内の取組事項として下記の項目があげられている。

- ・ FD 研究検討委員会において FD の現状分析を行い、情報の共有化を促進する。
- ・ 在学生、卒業生による授業評価の実施について検討する。
- ・ 部局 FD への支援を行う。
- ・ 院生・OD 等を対象としたプレ FD の普及を行う。
- ・ 初任者研修を実施する。
- ・ ワークショップ等による情報の共有化を図る。

工程では「初任者研修」は平成 23 年度から実施することとなっていたが、平成 22 年度より試行的に実施することになり、センターが学務部教務企画課の支援を受けながら企画・運営にあたることになった。本年度はその 3 回目である。

1-2. 目的と名称

「初任者」とは、ふつう「採用の日から 1 年間」以内の教員を指し、初等・中等教育では、初任者研修が法律で義務づけられている（教育公務員特例法第 23 条）。大学では初任者研修は義務づけられてはいないものの、近年、初任者研修を実施する大学が増えている（関西地区 FD 連絡協議会の「FD 共同実施ワーキンググループ」は初任者研修の共同実施を行っている。III-3 参照）。

しかし、初等・中等教育の「初任者」が教育実習以外にはほとんど教壇に立った経験がない教員であるのに対して、大学教員の場合は、その大学で採用されて 1 年間以内であっても、他の大学での教育経験をもっている場合が少なくない。したがって、初等・中等教育の教員と大学教員とでは、自ずと初任者研修の目的も異なってくる。とりわけ、本学の場合は、新規採用教員の中に、一定の教育経験を有する教員がかなりいることが予想された。そこで、私たちは、「初任者」に代えて「新任教員」という呼称を用いることにし、その研修の目的を、＜京都大学らしい教育とはどのような教育か＞を考え、＜そうした教育を行うためにどのような教育サポート・リソースがあるのか＞、＜大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか＞を知ること、とした。これは、「本学の理念や目的に呼応したファカルティ・

ディベロップメント (FD)」という中期目標の内容にも合致している。

本年度のプログラムは、昨年度と同じく、全学のポリシーの説明（セッション 1）、京大生の特徴の紹介（セッション 2）、京大の教育的取組の紹介（セッション 3）、京大の授業実践の紹介（セッション 4）、各教員の試みの紹介とグループ討論（セッション 5）、グループ討論の全体での共有（セッション 6）、という 6 つのセッションで構成した（2-1 参照）。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図したものである。前期終了後の 9 月に実施することで、前期の教育経験をふまえてそのふり返りの機会となることもめざした。

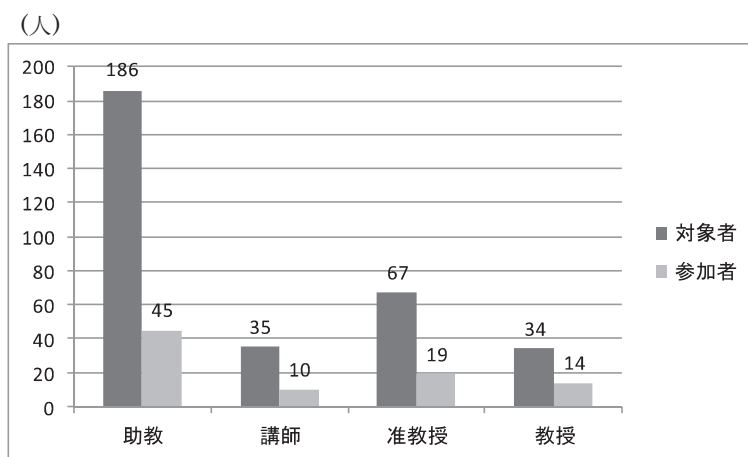
昨年度との違いは、①セッション 2 で、昨年度 FD 研究検討委員会によって実施された自学自習等実態調査の報告を行ったこと、②セッション 3 で、理学部の少人数担任制度を紹介したこと、③セッション 5 のグループ討論のテーマに「学習評価・教育評価の現在」を加えたこと、である。なお、今年度のセッション 4「私の授業」は人間・環境学研究科教授の鎌田浩毅氏にお願いした。

1-3. 対象者と参加者

新任教員といっても、職階、雇用形態などきわめて多様である。また、この研修は教育目的に限定されているので、研究を目的に雇用された教員については除外する必要がある。そこで、本研修の対象となる新任教員を、「平成 23 年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、学務部教務企画課経由で、各部局に対して該当者のリストをあげてもらったよう依頼した。

その結果得られた対象者（計 322 名）の分布を、当日の参加者（計 88 名）の分布と並べて、（1）職階別、（2）新採・昇進別、に表すと以下ようになる。職階別では助教の人数が最も多い。また、新卒・昇進別では新卒の方が多かった。昇進については、それまでの職階では教育活動に従事していなかったが、昇進によって従事するようになった者が含まれていると考えられるだろう。

（1）職階別



■内訳

□対象者（計 322 名）

助教：186 名（助教 23 名、特定助教 102 名、大学院担当助教 61 名）

講師：35 名（講師 8 名、特定講師 9 名、大学院担当講師 18 名）

准教授：67 名（准教授 7 名、特定准教授 30 名、大学院担当准教授 30 名）

教授：34 名（教授 5 名、特定教授 7 名、大学院担当教授 22 名）

□参加者（計 88 名）

助教：45 名（助教 13 名、特定助教 16 名、大学院担当助教 16 名）

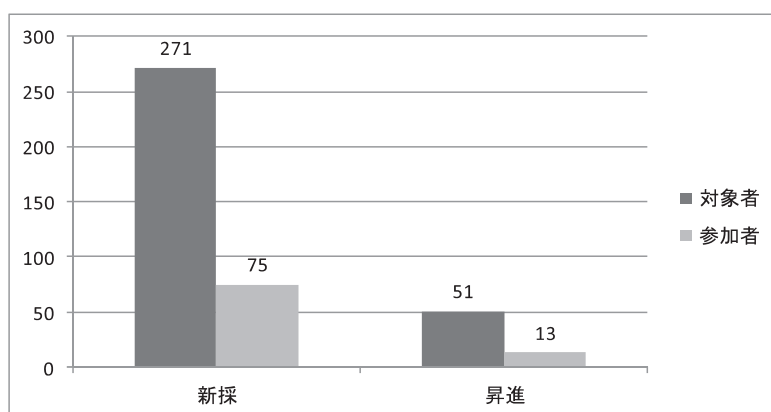
講師：10 名（講師 2 名、特定講師 2 名、大学院担当講師 6 名）

准教授：19 名（准教授 2 名、特定准教授 11 名、大学院担当准教授 6 名）

教授：14 名（教授 5 名、特定教授 3 名、大学院担当教授 6 名）

(2) 新採・昇進別

(人)



■内訳

□対象者（計 322 名）

新採：271 名、昇進：51 名

□参加者（計 88 名）

新採：75 名、昇進：13 名

2. プログラムの実際

2-1. 開催日時とタイムテーブル

開催日時：2012 年 9 月 7 日（金） 13:00～18:00

開催場所：京都大学時計台百周年記念館 国際交流ホール

参加人数：88 名

タイムテーブル

13:00	開会式 （司会・進行：高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈） 開会挨拶：教育担当理事 淡路 敏之 趣旨説明：高等教育研究開発推進センター長 大塚 雄作
13:10	セッション1：ミニ講義1「現在の大学教育の動向と京都大学のポリシー」 教育担当理事 淡路 敏之
13:30	セッション2：ミニ講義2「京大生の学習の実態」 高等教育研究開発推進センター准教授 溝上 慎一
13:50	セッション3：ミニ講義3「京大の教育的取組」 「全学共通教育（ポケゼミ）」少人数教育部会部会長 吉田 純 「京都大学の国際教育」国際交流推進機構助教 渡部 由紀 「理学部の少人数担任制度」理学部少人数担任委員会委員長 福田 洋一 「京都大学の教育サポートリソース」高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代
14:45	セッション4：ミニ講義4「私の授業」 人間・環境学研究科教授 鎌田 浩毅 
15:15	休憩
15:30	セッション5：グループ討論 「京大でどう教え、指導するか」 
17:00	休憩
17:15	セッション6：ラップアップ
17:50	閉会式 閉会挨拶：高等教育研究開発推進センター長 大塚 雄作

2-2. セッション5 グループ討論のテーマ

セッション5では、新任教員が本学の授業や指導で直面しやすい問題として、以下の7つのテーマを掲げた。参加者は、事前にこの中から自分の希望するものを選択し、テーマごとに分かれてグループ討論を行った。各グループとも、そのテーマについて経験を有する学内の教員

から事例紹介・情報提供が行われ、ファシリテータの司会進行によって自由に議論が展開された。

テーマ1. アクティブ・ラーニング型の授業をつくる

- ・ 事例紹介・情報提供：学術情報メディアセンター教授 喜多 一
- ・ テーマの説明：グループワークや発表など、学生の授業参加を促しながら、授業内容のレベルも維持するにはどうすればよいのか。

テーマ2. 学力の低下、学生の多様化にどう対応するか？

- ・ 事例紹介・情報提供：工学研究科准教授 須田 淳
- ・ テーマの説明：京大生の中にも、受験産業にどっぷりつかったために本当の勉強のしかたが分からない学生や、自分の選んだ専門分野に対する興味の希薄な学生もいる。どんな学生に照準を合わせ、そこからどう引き上げていくか。

テーマ3. 英語による授業をどう行うか？

- ・ 事例紹介・情報提供：農学研究科教授 天野 洋
- ・ テーマの説明：留学生を含む英語による授業では、日本人学生に対する日本語による授業とは異なる工夫が必要になる。それはどんな工夫か。

テーマ4. ソーシャル・メディアを使った双方向型授業

- ・ 事例紹介・情報提供：経営管理研究部教授 若林靖永
- ・ テーマの説明：双方向型の授業をどうデザインし実施するか。その際に、Twitter や Facebook などの新しいソーシャル・メディアがどう活用できるか。

テーマ5. 困難を抱えた学生に向き合うには

- ・ 事例紹介・情報提供：健康科学センター助教 上床輝久
- ・ テーマの説明：修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのか。また、対応が必要なのはどのような場合なのか。

テーマ6. 博士課程院生のキャリア形成支援

- ・ 事例紹介・情報提供：キャリアサポートセンター教授 梅田幹雄
- ・ テーマの説明：欧米と同様、わが国でも文系・理系を問わず、博士課程修了者が社会で広く活躍することが求められつつある。博士課程院生に対して、アカデミック・ポスト以外のキャリアも含む多様なキャリア形成を支援していくにはどうすればよいだろうか。

テーマ7. 学習評価・教育評価の現在

- ・ 事例紹介・情報提供：高等教育研究開発推進センター教授 大塚雄作
- ・ テーマの説明：「成績評価の厳格化」が政策的に求められるなかで、学生の学びを促すような学習評価、それにもとづく教育評価のあり方とはどのようなものか。

2-3. セッション6 ラップアップ（各グループではどのような議論が行われたのか）

セッション5のグループ討論の内容は、セッション6で報告され、全体で共有された。以下

は、その記録を元に報告者によって作成された概要である。

グループ1「アクティブ・ラーニング型の授業をつくる」

事例紹介・情報提供：学術情報メディアセンター教授 喜多 一

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター准教授 田口真奈

「アクティブ・ラーニング型の授業をつくる」がテーマの第1班。ちょうど1つ前のセッションで、鎌田教授より実践されておられるアクティブ・ラーニング型授業の紹介があり、具体的なイメージを持ってセッションに参加することができた。従来型授業による学生への知識提供に加え、学生自らが体と頭を活発に活動させることでより一層の知識定着を図るには、教員はいかに授業を設計するかを題材として、セッションでは実際にグループによる討論型授業を経験した。

グループ討論を終え、①教員としていかなる準備・心がけが必要か②実際にグループ討論を経験したことで得られた今後の指導方法のありかたは何か、が各グループにより報告され、それを題材として第1班全体でのグループ討論を行った。その成果として、前者に関しては「教員側が学生の心をつかんで、学生側のモチベーションをあげることで、コミュニケーションがより進化する」、後者に関してはアクティブ・ラーニングを実践するには教員側に「粘る、裏で動く、そして教員も楽しむ」の3点が必要であるとの共通認識を持つに至った。

今回のセッションでは個人的に多くの成果が得られたが、一番の成果は大人数講義においてもアクティブ・ラーニング型授業が実践できることを認識できたことだ。実際に100人規模でされておられる先生の体験談を聞き、学生の受講姿勢の確立（予習の習慣づけと参加への慣れ）と有効な教材作成（明確なテーマを持つ教材とそれに基づく授業展開のシミュレーション）を行うことの重要性を再確認できた。後期の授業での実践とそれに基づく学生側からの意見を心待ちにしたい。

（報告者：農学研究科助教 川崎訓昭）

グループ2「学力の低下・学生の多様化にどう対応するか？」

事例紹介・情報提供：工学研究科准教授 須田 淳

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代

グループ2の参加者は15名でした。全員、理系で、所属は理学研究科、医学研究科、工学研究科、数理解析研究所などです。最初に参加者から、このテーマに関してどういう問題を感じているかを出しあいました。多くの人に共通していたのが、「まじめに出席していても単位が取れない学生がいる」「学力もさることながら学習意欲が低く、専攻の内容に関心をもっていない学生が少なくない」ということでした。

このような問題に対して、須田先生から、工学部電気電子工学科での取組や先生ご自身の授業での工夫を報告していただきました。先生ご自身の授業の工夫は資料集の中に詳しく書いてくださっているのですが、例えば、学生が板書を書き写すことのみで必死であることがわかったので、過去問やレポートとあわせて板書もWeb上に公開しておられるのだそうです。また、授業についての学生の率直な意見を聞くために「正直アンケート」というアンケートを毎回取っておられるということでした。参加者からは、研究や他の仕事も忙しい中でこのような教育への情熱はどこからわいてくるのか、という質問がありました。それに対しては、「いい授業を

すれば、優秀な学生が興味を持って自分の研究室に来てくれるので、長い目で見れば、研究室にとってもメリットがあるし、また、専門への興味をわかせることで1割くらいの学生の人生を変えられたかなという思いもある」ということでした。

工学部の取組で私が興味をもったのは、サマーキャンプです。これは、希望者を集めて、1回生、2回生、3回生それぞれのテーマを与えて、電気電子工学に関わることで何か物を作ったりする実習を、夏休みに3日間かけてやるという取組です。例えば、1回生の場合ならLEGOを使ったロボット製作をやらせているそうです。希望者だけを集めてやるので、参加者はやる気満々の優秀な学生が多く、彼らがさらに輝くということでしたが、一方で、成績の分布でいうと真ん中の6割くらいの学生でも、たまたま応募したり、少しやる気があって応募したりすることがあって、そういう学生もものすごく変わっていくという経験をされています。

そういうお話を伺って、やはり問題点の共通している部分はモチベーションの低さということにあるのかなと感じました。真ん中の6割くらいの学生のモチベーションを一人でも二人でもいいから上げられるような取組を、授業外の活動も視野に入れてやっていかなければいけないなということを実感しました。

私は医学研究科でそういう物を作ったりというような実習は難しいのですが、やりようによってはモチベーションを高められる取組は可能かもしれません。そのようにして、学生のモチベーションを一人でもいいから高められたらと思います。

(報告者：医学研究科特定准教授 田中智洋)

グループ3「英語による授業をどう行うか？」

事例紹介・情報提供：農学研究科教授 天野 洋

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター特定助教 田川千尋

「英語による授業をどう行うか？」をテーマに農学研究科の天野洋教授を中心にディスカッションを進めました。まず、問題点としては、「教官側」と「学生側」、の各々に異なった問題点が存在するという前提でディスカッションをスタート致しました。「教官側」としては、英語で講義を行うこと自体に慣れていないことが、問題点としてまず挙げられました。解決方法として英語でのプレゼンテーションを高めることも必要であるが、基本的には授業のコンテンツ自体をしっかりとしたものにすることが重要であるとの意見に集約されました。また、日本語で行う場合に比べて、講義時間中の無駄な会話が減る傾向になるメリットもあり、英語での授業自体にそれほど大きなデメリットはないのではないかという結論に至りました。

次に学生側の問題点ですが、「英語による授業」に限らず、学部生と大学院生で授業に臨むモチベーションの違い、また、個々の英語力の違いが大きいため、両者について異なった体制作りが必要であるとの意見の集約は得られましたが、残念ながら時間切れとなりました。議論した中では、「教官側」の問題よりも解決に時間がかかるであろうとの心証を得た参加者が多かったかと思えます。

他の議題としましては、私が提案させていただいたのですが、京都大学がグローバル30(2008年7月29日に策定された文部科学省事業。2020年を目処に30万人の留学生の受入れを目指す「留学生30万人計画」)に参加していること自体を、私自身も全く知りませんでした。全教員、全学生に周知、徹底する必要性を強く感じます。

留学生の受け入れに際しましては必然的に英語での授業が必要となるのですが、現行のシステムでは、対象科目において留学生(母国語が日本語でない学生)が選ぶと授業言語が英語と

なり、日本人学生の場合のみは授業言語が日本語になると伺いました。留学生、日本人学生の双方にとって、履修科目の選択にあたって分かりにくいシステムであり改善の余地があるとの意見も出ました。

最後に私個人の感想を申し上げますと、約5年間米国で研究を致しておりましたが、京都大学自体が世界で注目されているということは全くありませんし、現行の授業体制を続けておりますとグローバル社会から取り残されていくというのは明白かと思います。実際、同じ現状認識をお持ちの方が多く本テーマが取り上げられたものと思いますが、教官および学生が危機感を共有して、グローバル化していく学問の世界の中で成果を出して行くことを、ともに真剣に考える時期が来ているのではないかと強く感じました。どうもありがとうございました。

(報告者：医学研究科特定准教授 中村英二郎)

グループ4「ソーシャル・メディアを使った双方向型授業」

事例紹介・情報提供：経営管理研究部教授 若林靖永

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター特定准教授 酒井博之

このグループは、「ソーシャル・メディアを使った双方向型授業」というテーマで、若林先生に講師をご担当いただきました。私たちのグループは参加者が4名でしたので、全体の議論の総括というよりは私個人の感想のニュアンスが強い報告だということを最初にお断りしておきます。

このテーマは「ソーシャル・メディアを使った双方向型授業」なのですが、かなり前半の部分で若林先生がいきなり、「ソーシャル・メディアと題が付いているけれども、ソーシャル・メディアが大切なのではなくて、きちんとした授業をすることが大切です」とはっきり言われたことがすごく印象的でした。ですけれども、Twitter や Facebook などのソーシャル・メディアや、LMS という Learning Management System を使うということは、それだけ講義にける時間を教員が割いているということであり、授業のことを考えて日ごろから活動しているという、その表れとして Twitter や Facebook、LMS の使用が自然に出てきているのだということを私は感じました。

また、若林先生にお伺いしたところ、Twitter を使っているのは150人の授業で15人ほどの学生さんということでした。希望者のみなので授業に害があるということではなく、Twitter を使いたい人が気軽に使えるという状況ですので少しライブ感が出るということでした。画面上に「おなかがすきました」というコメントが10人ぐらい出たので、そこで「みんなおなかがすいたから授業をやめようね」ということがあった、というエピソードも伺い、非常に面白いなと感銘を受けました。

Twitter や Facebook にとらわれず、とにかく授業をきちんと行うことが大切だということを言われ、学生さんに Twitter などを使ってライブ感を感じていただくには、教員自身が気持ちを高めて、授業の前にほっぺたをたたいて「これから授業だ」という気持ちをすごく高めて、授業中は自ら教員としての役割を演じるということ、熱い気持ちを持って講義をすることが非常に大切なのだということを感じました。

また、講義を考える上で、例えばピーター・F・ドラッカーが非営利組織の評価の仕組みで用いている四つの項目について考えてみたらどうかということをお伺いしました。まず一つ目は「使命」です。例えば授業ですと、「その授業の使命は何ですか」ということを自ら問いなさいということをお伺いしました。二つ目は「顧客は誰か」ということです。自分が1回生対象の授業をす

るのか、3 回生なのか、はたまた大学院生なのかということをしっかり意識しながら授業をつくったり、実際に授業を行いなさいということを伺いました。三つ目は「顧客は何を価値あるものと認めているのかということに気になさい」ということでした。教員自身が「これは価値あるものだから」と思うことではなくて、しっかり学生さんの気持ちをくみながら、学生さんが何に価値を置いているかを考えながら授業をしたらよいということを学びました。実際には、Twitter や小さな紙で学生さんの感想を取られたりしているということでした。最後は「自分の授業の成果は何か」ということを常に問いなさいということです。その授業を受けてどういうことを学んだかという成果をしっかりと考えて授業を行いなさいということを伺いました。

また、このような授業を個々人が孤軍奮闘していても、局所最適化ということにしかならず、もし学部全体のカリキュラムを考える場になったら、その学部で最終的なゴール、何を学んで卒業するべきかということをしっかり考えた上で、トップダウンでいろいろな講義などを考えていく必要があるのではないかと学びました。

こういうお話をする中で、参加者の中からは、ぜひ来年ポケットゼミをやってみたいという声も上がるなど、とても有意義な時間を過ごすことができました。

(報告者：理学研究科講師 常見俊直)

グループ 5「困難を抱えた学生に向き合うには」

事例紹介・情報提供：健康科学センター助教 上床輝久

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター特定助教 半澤礼之

グループ 5 の議論の内容について簡単にご報告したいと思います。専門の先生方がおられましたので、最初に簡単に一般的なこと、学生が罹りやすいと思われる症例についてお話をいただきました。その中で重要なポイントとの一つとしてあげられたのは、学内にはカウンセラーや精神科医の先生方が待機されているので、教員は問題を抱えているであろう学生に対しては最小限の取り組みを行うことで十分であって、そのあとは専門家に任せたいほうが良いということです。教員が無理をして色々やりすぎず、それぞれの専門性にあわせて役割分担を行うことが大事だということです。

その後、各先生方の経験を踏まえて質疑応答や議論がありました。幾つかご紹介させていただきます。例えば教員が学生のためにと考えて厳しく指導することがあった時に、指導された学生がそれを嫌がって、パワハラだと感じてしまうということもあり得ると思われます。そのような事態を防ぐためにも、何人かの先生方と協力してチームで学生指導にあたったり、日常生活の中で信頼関係を築いておいたりといった対応が必要になるかもしれません。学生指導に関しては、教員の人格が問われることが多いと思われます。従って、それも仕事の中の重要な点であると考えて、日ごろから努力することが大事ではないかと個人的に思います。報告は以上で終わります。

(報告者：理学研究科特定助教 長谷部高広)

グループ 6「博士課程院生のキャリア形成支援」

事例紹介・情報提供：キャリアサポートセンター教授 梅田幹雄

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター特定助教 坂本尚志

グループ 6 では、「博士課程院生のためのキャリア形成支援」というテーマで議論をしました。

セッション全体の進め方を紹介しますと、まず簡単に自己紹介をしてから、2～3人の小グループでこのテーマについて議論しました。2～3人で論点を整理するために簡単に雑談をして、その後それぞれの小グループでどのようなトピックが出たかということ話をしました。やはりテーマの性格上、自身の身の上話であったり、暗い話がトピックとして結構挙がりました。その後でこのテーマのコーディネーターの梅田先生より、国際情勢や欧米諸国の情勢や、日本の大学改革の歴史、さらには梅田先生ご自身の経歴や経験談を交えた上で、事例紹介がありました。その後全員で議論をしました。

セッション総括として、梅田先生の事例紹介とその後の議論で出た話題の中で、私が興味深かった話題を二つ紹介したいと思います。まず一つ目が、梅田先生のスライドにもあった話ですが、自身の教え子の90%は産業界に出るという前提で教育すべきということです。そこに私は引かれました。教え子全員が自身の後継者になるという意識ではなくて、90%は産業界に出して、産業界のために役立つ人材として教育するという考えが必要であるということを感じました。

もう一つ、議論でも盛り上がった話題としては、自身の研究分野だけではなくて、他分野と交流することが必要であるという話がありました。自身の研究分野は、その研究分野だけに役立つものではなくて、ほかの研究分野でも役立つことはあるだろうということを意識として持つことが重要であるということと、自身の研究分野を進める上で、他の研究分野の要素も採り入れることを考える必要があると感じました。

キャリア形成支援の方法としては、そのような異分野交流ができることを学生に対しても支援するということや、自身の教え子がマスターからドクターに上がるときに、「君の研究分野はこの研究分野でも役立つから、そちらの研究室に行ってみたらどうだ」とか、逆にほかの研究室の学生さんに対して、「君の考えていることはうちのところでも役立つからどうだ」というような声かけを勧め、どんどん人材を交流していく、交流を促進していくということが必要であると感じました。このことは学生のみならず教員も、他の研究分野に対してどんどん飛び込んで吸収していくということも必要であるだろうと感じました。

(報告者：情報学研究科助教 高瀬英希)

グループ7「学習評価・教育評価の現在」

事例紹介・情報提供：高等教育研究開発推進センター教授 大塚雄作

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター特定助教 高橋雄介

「京大でどう教え、指導するか」という基調テーマに沿って、京大での学習評価の経験から課題点を出し合った。有効な評価を行うためには、「誰のために、何のために」行うのかを明確にすることが欠かせない。

「学生の（成長や自習自学の促進の）ために」を見失った評価に意味はない。ここで学生の人格評価を行うつもりで気負うと正確な評価が難しくなるだけでなく、レポートの結果を返さない、などの弊害が出ることもあるし、教員が自信を持って付けていない成績は、学生にも信頼されず、相互の信頼を損なうことにもなりかねない。

該当講義における学生の「理解度・達成度」の評価を行うと考えれば肩の荷が下りるのではないか。必修/選択、学部/院、講義/実習により、「何のために」は異なる。評価手法として多く用いられるレポートや講義は、厳格な、あるいは妥当性の高い評価を行う上でそれぞれに注意点がある。

特にレポートについては、将来の論文指導につながる面があるため、客観的な評価を、提出から時間をおかずにコメント付で返してあげることが強い教育的価値を持つ。学生の理解を期待する内容を複数の観点（rubric）として整理し、多面的に重複的に評価を行うようにすれば、評価者内・間のばらつきも軽減できるのではないかと考えられている。そのうえで、学生同士の評価や TA の活用は、複数の目による評価がさらに妥当性を高めることになるし、何よりも教員の負担を下げるので、進んで検討したい。

加えて、FD での数々の議論を実践に結びつけるためには、FD の開催を続けるだけではむしろ、学則の変更や授業時間など、システムレベルでの議論も欠かせない。

（報告者：医学研究科特定講師 猪飼宏）

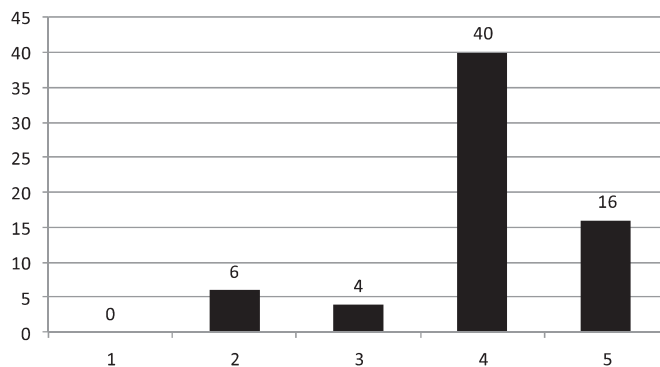
2-4. 参加者からの意見・感想—事後アンケート結果より—

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行った。その結果、72 名から回答が得られた。回答者の内訳は教授 7 名、准教授 6 名、講師 7 名、助教 30 名、不明 22 名であった。各質問に対する回答を以下に示す（質問によっては欠損値がある）。

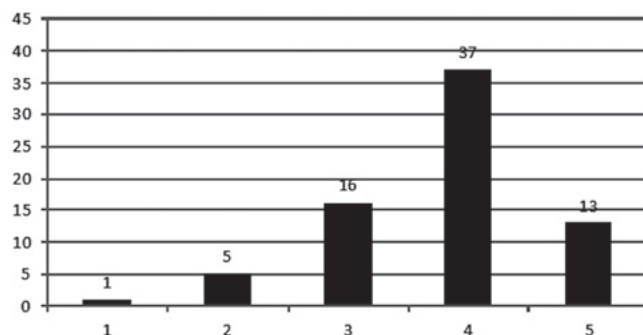
(1) 各セッションの有意義度

各セッションの有意義度を「1.まったく有意義ではなかった」～「5.非常に有意義だった」の 5 件法で尋ねた。平均で 3.65～4.50 となり、全体として高い評価を得ることができた。特にセッション 4「私の授業」が 4.50、セッション 5「グループ討論：京大でどう教え、指導するか」が 4.38 と高い値を示した。

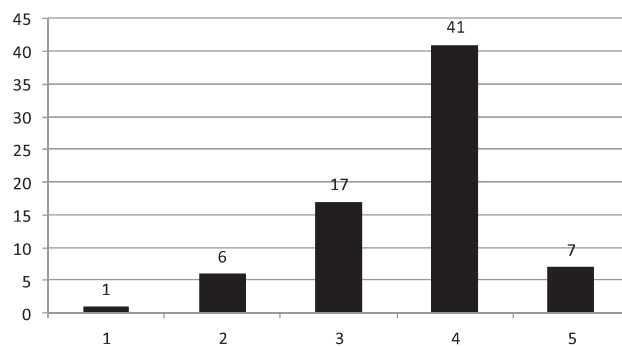
①全体の総合評価 平均値：4.00



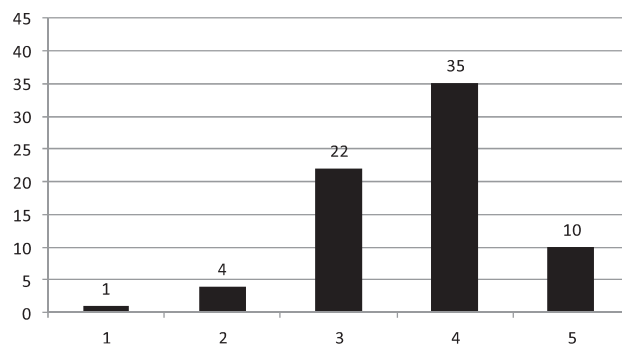
②セッション 1「現在の大学教育の動向と京都大学のポリシー」 平均値：3.78



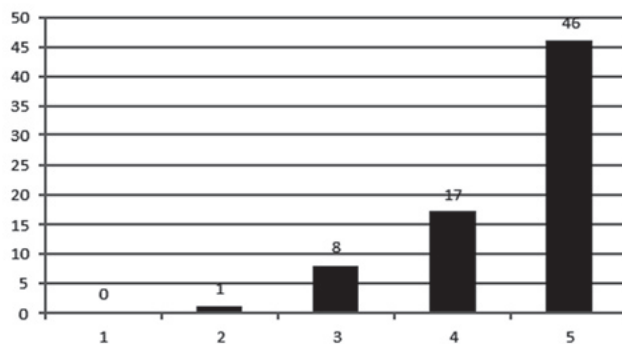
③セッション2「京大生の学習の実態」 平均値：3.65



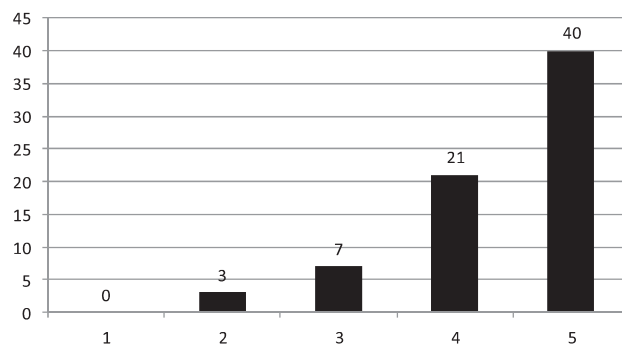
④セッション3「京大の教育的取組」 平均値：3.68



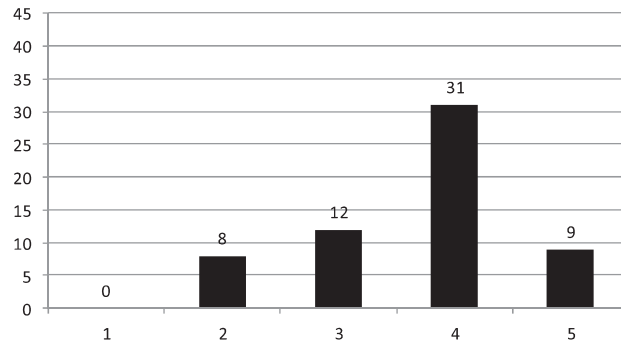
⑤セッション4「私の授業」 平均値 4.50



⑥セッション5「グループ討論」 平均値 4.38



⑦セッション6「ラップアップ」 平均値 3.68



(2) セミナーの開催時期について

セミナーの開催時期について「適切であった」「どちらともいえない」「適切ではなかった」のいずれかを選択してもらい、その理由を自由記述で尋ねた。その結果、「適切であった」が43名、「どちらともいえない」が18名、「適切ではなかった」が6名という結果であった。概ね肯定的な評価が得られたが、適切ではなかったとする理由として以下の記述がみられた。学会シーズンや研究調査の時期にあたるという理由が計4名と多いが、夏期休暇の初めは他の行事と重なっていること、夏期休暇の終わり頃は引き続き学会シーズンであること、新学期の準備の時期であることなどから、なかなかすべての参加者の要望に応えることは難しい。

■適切ではなかった理由

- 9月中旬～後半にして頂けたらと思います。フィールドワークの時期にあたりますので。
- 学会シーズンであるため。
- こういったセミナーには積極的に参加したいが、平日の日中になかなかまとまった時間がとれない。
- 学会シーズンで時間のやりくりが困難。
- 授業の無い学生の夏季休暇中は、自身の研究調査で長期出張したいので、せめて休暇の初めか終わりに設定してほしかった。
- 新任後、2、3年たって実際の教員として働いた経験があり受講する方がよい。

(3) セミナープログラムに追加するとよいと思われる内容

京大生や京大の教育についてもっと詳しく知りたいという要望がある。また、授業以外での学生の活動や教員との関わりについての情報を求める一方で、教育用のメディア・ツール、講義技術などもっと具体的な情報を得たいという要望もある。ラボ経営を含む大学院生の指導のあり方については昨年度の要望にもあったこと、参加者に理系の助教が多いことを考えると、セッション5のテーマに入れることを検討した方がよさそうである。

【京大生についての情報】

- 京大学生のバックグラウンドの情報などを知ることができれば、他大学からの転任者には特に有益な情報となると思いました。
- 京都大学の学問に対する理念を実際に学生がどう受け止めているのか知りたいところです。
- 京大生の学習の実態だけでなく、意識についても知ることができるプログラムがあればよいと思います。
- 学生対象に行っている授業評価アンケートの分析について報告してもらえればより良かった。

【学生の課外活動】

- 学習に特化していたので、例えば学生の生活・課外活動的な部分や、そういった場での教員と学生の関わりについても話が聞ければよかった。（同様の意見2名）

【京大の教育の特徴】

- 世界の大学と京大とで、教育のシステム面でどのような違いがあるのかわかるお話があるとよいと思いました。
- 良い講義とは？ 京大としてどのレベルの学生をターゲットにするのか？

【メディア・ツール】

- 教育に使うメディア（板書・パワーポイント・配布資料、SNS など）の種別の選択法。
- CMS/LMS の活用、教える側・学ぶ側双方のモチベーションを上げるための方策。
- 具体的な施設、ツールの紹介があってもよいと思います。

【講義技術】

- 模擬授業があれば、より勉強になると思っています。
- 先生の講義をビデオで上映して、良い点・悪い点の解説をする。

【その他】

- これまでの FD で問題はあったのかなど、わかりやすい説明が初めにあればよかったと思います。
- 学生のためにも重要ですが、教員がつまづいたとき、困難に直面した時など、教員をサポートするシステムの紹介やフローを示してもらえものがあればよいと思いました。
- 大学院生を対象としたセッション（多くの情報が学部生を対象としていたため）。
- セッション4のような、ベテランの教員の方のラボ経営についての話がもっとあればよいと思います。
- 困難を抱えた学生への対応の事例、サポートの紹介。キャリアサポートセンターの紹介。
- グループ討論の内容が、とりたてものがかぶっていたので2つとれるとよかった。前半の内容は資料の配布で済むのではないかな？
- 討論の場。セッションも受け手のレベル（認識）の差があるので、同じレベルの講義やセッションではあまり意味がないため。
- 充実しており、このままでよいと思います。（同様の意見2名）
- むしろもっと絞ってほしい。盛り込みすぎ。（同様の意見2名）

（4）「セッション5：グループ討論」に追加するとよいと思われるテーマ

（3）の質問と類似しているせいか、回答もいくぶん似通ったところがある。

追加を要望するテーマの中には、現在開いているテーマに近いものも含まれる。例えば、「国際化・国際的人材の育成」と「英語による授業をどう行うか？」（テーマ3）などである。また、セッション2でも「京都大学の国際教育」の報告が行われている。セミナーの前半を減らしてグループ討論の時間を増やす要望が多く出されていることも考えあわせると、テーマ3「英語による授業をどう行うか？」を「教育の国際化にどう対応するか？」に再編し、セッション2の内容もこちらにまとめるなどの対応が求められそう。

【国際化・国際的人材の育成】

- 国際化に対する学生の関心をどう引き出すか。

- 国際的に活躍できる人を育てるためには。

【授業や指導に関するもの】

- 大学院で学生の研究指導をどうするかというテーマがあればよいと思います。
- 大人数授業の工夫、教科書、教材作成。
- いかに学生に自主的に勉強させるか。

【研究に関するもの】

- 研究に関するテーマがあるとよいと思います。
- 競争的研究の弊害、科学技術の発展の弊害。

【特定（任期付き）教員にとって求められること】

- 「特定」の教員が多くなっています。学生の資質や授業も変化し、求められている内容が変わりますが、「特定」とされている教員の立場は不安定で、期限のない教員に比べると求められる内容とやれる内容が違います。この点についてグループで討論するのか、プログラム全体に入れるのか分かりませんが、必要な点であると思います。

【参加形態（複数のテーマへの参加）】

- 1つにしか参加できないことは残念でした。（同様の意見2名）

【その他】

- 京大での課外活動充実のために教員は何ができるか。
- 教員が学生だった時代と今を比べ、学生の何が異なるのかを討論する。
- 他のグループ討論に出ていないから何とも言い難い。
- 特になし。よいテーマがあがっていたと思います。（同様の意見2名）

(5) セミナーの改善点

最も多かったのは時間配分であり、その多くは、全体の時間をもっと短縮すること、あるいは前半（セッション1～3）やラップアップ（セッション6）を圧縮して、グループ討論を充実させることを要望している。また、グループ討論の複数参加を望む声もあった。

全体の時間が5時間しかないなかで、1時間半のグループ討論を複数入れることは困難だが、前半のセッションのどこかを削ることによって、グループ討論の時間を延長する（あるいはミニ・グループ討論を加える）ことを考えたい。

【時間配分・プログラム構成】

□全体の時間の短縮、前半の圧縮と後半の充実

- セッション1～3のような一般的なテーマは資料だけ渡してもらえたら時間のある時に読みます。セッション5のような具体的な問題に関する討論の時間をもっと増やして頂けたら良いです。
- セッション1と2はネット上の報告という形でよいのでは、と思いました。教育セミナーのはずなのに、「報告」「現状説明」が中心になっていることは残念でした。教育セミナーなら、より具体的な内容を取り入れて頂ければありがたいです（直接教育に使えるセッション5のような）。（同様の意見16名）

□前半の充実

- セッション1～3の時間が短かった。必要な項目ばかりなので、もう少し時間をかけて欲しい。

☐休憩をもっと多く

- 休憩をもう少しこまめにとって頂きたいです。(同様の意見 2 名)

【グループ討論】

☐複数参加を可能に

- グループ討論に複数参加できるとよいと思いました(時間的に厳しいかもしれませんが)。

☐もっと長く

- セッション 5 のグループ討論がもう少し長くてもよいと思う。分野特有の意見を聞くことが出来るので面白いから。(同様の意見 2 名)

☐ニーズ・関心によってさらに分割を

- グループ討論の参加者のニーズ、関心も様々あり、更なる分割(二分の一?)が出来ると問題への対処法が議論できて有意義だったと思う。今回は問題点のリストアップに重点が置かれがちであったと感じた。

(同様の意見 2 名)

☐資料の事前配布

- グループ討論については、当日までにどんな内容で進むかなどの情報を事前に参加者の間で共有できれば、当日の議論はもっと効果的になると思います。(同様の意見 2 名)

☐部屋の使い方

- グループ 2 でしたが、他にもグループが 2 つあって、そのノイズのために自分たちの討論の声が聞こえにくかったです。

☐なくてもよい

- グループ討論はなくてよいと思いました

☐その他

- グループ討論の 1 つになっている、困難を抱えている学生との向き合い方は必修にした方が良い気がする。

【ラップアップ】

- 最後のラップアップは、グループ間の情報共有という意味ではあまり work してないように感じました(他グループの話は、ちょっと聞いただけでは理解できませんでした)。むしろグループ討論に時間を使って欲しいと感じました。(同様の意見 3 名)

【学部と大学院の区別】

- 大学院に求められていること・課題と、学部で求められていること・課題は違います。トピックや議論は分けないと。(同様の意見 2 名)

【参加者・開催時期】

- 非常に役立つ情報が得られたので、新任教員だけに対象を限定しなくてもよいのではないのでしょうか。

(同様の意見 2 名)

- 3 月にもやった方がよいのでは? (1 月着任対応)。私の場合、ほぼ着任後 1 年たってからの新任セミナーとなった。

【その他】

- 時間的・内容的に適切だと思います。
- 本セミナー以外にも、グループ討論の内容を学べる場が欲しい。
- セッションで浮かび上がった問題点を文科省などの関連省庁に提言できればよいと思います。

- せっかくですから、学部ごとの現状の簡単な教育方針のスケジュールをお伺いしたかったです。大人数グループと少人数グループを対象とする教官では問題点が異なるし、それぞれの教官の視点が違うので、グループ討論は少し混乱したように感じた。
- セミナーの目的をもっとはっきりさせるべきだと思います。
- 2008～助教、2012～特定講師の私に何故通知が来たのか不明。本当に新任教員のみに通知されていますか？勉強になったので参加してよかったですが。
- 統計的なものはいらない。
- カメラが邪魔。

(6) セミナーのよかった点

圧倒的に多かったのが、とくにグループ討論において、他研究科・部局、他分野の教員との交流ができたこと、およびその交流を通じてさまざまな京大での取組を知ることができたこと、である。回答した半数以上の教員がこの点をあげている。また、京大でのすぐれた授業実践にふれる機会として、セッション4の「私の授業」も高評価を得ている。

その他、京大の学生についての理解の指導のあり方、大学の動向・ポリシーを知ることができたことも「よかった点」にあがっている。プログラム前半の圧縮を望む声が少なくないが、セッション1・2が決して不要というわけではないことがわかる。

センターで作成した「京都大学の教育サポートリソース」パンフをあげている参加者が複数名いたことは嬉しいことである。

【他部局・分野の教員との交流（とくにグループ討論）】

- 非常に有意義なセミナーでした。ありがとうございます。ネットワークづくり。またチャンスがあれば他のFDに参加したい。
- 後期の授業に役立てそうです。他研究室の方の話が聞ける貴重な場でした。ありがとうございました。
- 自分が感じたことが普通な問題であることを認識できたこと。それに対して他の方々の具体的な取り組みについて知ることが出来たこと。
- グループ討論が面白かった。他分野の先生の意見が聞ける貴重な機会だったと思う。
- 普段知ることのできない他学部・研究科での取り組みを知ることができた。(同様の意見 31 名)

【学生理解・学生指導】

- 京大卒ではないので学部生のイメージがわからなかったが、ぼんやりとでもイメージがもてた。
- 学生の現状とそれに対応する取り組みを初めて知ることができた。具体的方法論もあり、今後の指導に役立たい。(同様の意見 10 名)
- セッション5がとても勉強になりました(テーマ5「困難を抱えた学生に向き合うには」に参加)。

【大学の動向・京大のポリシー】

- 京都大学として目指している大学(教育)としての方向性がわかったこと。(同様の意見 7 名)
- 「京大の教育」とは何かが見えたような気がする。←淡路先生の top view、須田先生の bottom view。

【私の授業】

- 鎌田先生のお話はとても興味深く聞かせて頂きました。(同様の意見 5 名)

【京大の教育サポートリソース】

- サポートリソースの冊子を頂いた。これは着任時にすぐ欲しかった。(同様の意見 3 名)

【その他】

- セッション 1～5 が非常にためになった。1 で現状がわかったし、5 で自分の授業の作り方への参考になった。
- これまでの自身のキャリアを見つめなおし、今後を展望するきっかけを与えてもらった。刺激を与えられた。

(7) まとめ

すべての参加者から回答を得ることはできなかったものの、今回の新任教員教育セミナーに対しては概ね肯定的な回答を得ることができた。とりわけ、グループ討論などを通して他部局・分野の教員と交流できることを、このセミナーのよさと感じている教員が大半をしめている。また、「私の授業」やグループ討論での事例紹介など、具体的な教育実践・方法について情報を得ることができる点も、多くの参加者によって支持されている。

一方で、要望としては、全体の時間を短縮すること、あるいは、プログラムの前半を短縮し後半を充実させることがあがっている。京大の新しい構成員のための教育セミナーとしては前半のセッションも重要であり、また実際、前半のセッションを評価する声もあることから、前半を完全に削ぐことは適切ではないが、多少のプログラムの修正が必要なようである。例えば、①セッション 3「京大の教育的取組」のいくつかを削って時間を短縮すること、②セッション 2「京大生の学習の実態」を、学習だけでなく課外活動なども含めた学生生活全般に広げ、セッション 5 (グループ討論) のテーマ 5「困難を抱えた学生に向き合うには」の内容とつなげること、③教育の国際化については、グループ討論のテーマ 2「英語による授業をどう行うか？」を拡張し、「教育の国際化にどう対応するか？」にすることで、セッション 2 の「京都大学の国際教育」の内容も含めること、などである。

セッション 5 のグループ討論については、①テーマに「大学院教育と研究室運営」を入れる、②ミニ・グループ討論を入れて、複数のテーマへの参加が可能にする、③グループ討論の 1 テーマあたりの人数を減らして (あるいはテーマ内に下位グループを設けて)、単に問題点の列挙だけでなく十分議論の時間が取れるようにする、などの改善策が考えられる。

セッション 6 のラップアップについては、肯定的な意見が聞かれないので、改善が必要である。単に削除するのではなく、グループ討論の成果を共有できるような何らかの方策を講じたと思う。

本稿であげた課題や改善策をふまえながら、参加者が京都大学の教育について考え、語りあうことのできるよりよい機会としていきたい。



(松下 佳代、田口 真奈)

II-6. 第8回工学部教育シンポジウム

京都大学高等教育研究開発推進センターは、京都大学工学部との学内連携の一環として、平成24年11月30日に開催された「第8回工学部教育シンポジウム」に参加した。当日は、本センターより、「主体的学びをいかに実現するか——中教審答申と自学自習実態調査に基づいて」というタイトルで話題提供をおこなうと共に、ディスカッションに参加した。以下、同シンポジウムのプログラムとセンターによる話題提供の発表スライドを資料として添付することで活動報告に代える。

プログラム

日時 平成24年11月30日（金） 16:30～19:45

場所 京都大学桂キャンパス 桂ホール

司会 三ヶ田 均 教授（新工学教育プログラム実施専門委員会委員長）

時間	プログラム	発表者
16:30～16:35	開会挨拶	工学部長 北野 正雄
16:35～17:05	話題提供 「主体的学びをいかに実現するか——中教審答申と自学自習実態調査に基づいて」	高等教育研究開発推進センター 大塚 雄作
17:05～17:35	話題提供 「新しい教養・基礎教育の実現をめざして——国際高等教育院構想」	工学部長 北野 正雄
17:45～18:45	教育改善に向けて 「私の授業—アンケート結果を受けて—」	① 地球工学科 伊藤 禎彦 ② 物理工学科 長谷川将克 ③ 電気電子工学科 土居 伸二
18:45～19:05	「成績データベースの概要」 「委員長総括」	建築学科 加藤 直樹 新工学教育プログラム実施 専門委員会委員長 三ヶ田 均
～19:45	ディスカッション	

（大塚 雄作）

京都大学工学部教育シンポジウム
2012年11月30日

主体的学びをいかに実現するか

— 中教審答申 と
自学自習実態調査に基づいて —

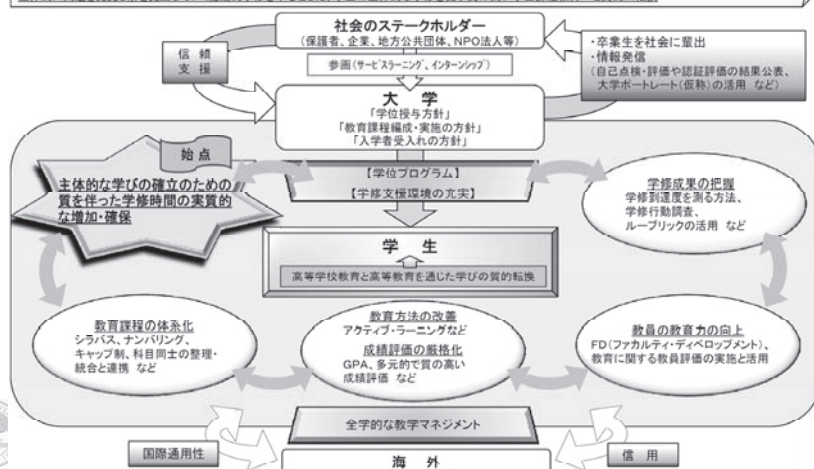
京都大学 高等教育研究開発推進センター
大塚雄作



◆中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』(2012.8.28)

学士課程教育の質的転換への好循環の確立

・次代を生きる若者や学生に、生涯学び続ける力、主体的に考える力、未知の時代を切り拓く力を育成する。未来を形づくり、社会をリードする大学へ
・そのために、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒に切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、知識の伝達・注入を中心とした授業から、主体的に問題を発見し解を見出していく能動的な学びを中心とした、学生の主体的な学びを促す質の高い学士課程教育へと質的に転換



◆大学に速やかに取り組むことが求められる事項

(ア)学長を中心として、副学長・学長補佐、学部長及び専門的な支援スタッフ等がチームを構成

→ 当該大学の学位授与の方針の下で、学生に求められる能力をプログラムとしての学士課程教育を通じていかに育成するかを明示

→ プログラムの中で個々の授業科目が能力育成のどの部分を担うかの認識を担当教員間の議論を通じて共有

→ 他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的な教育を展開すること

→ プログラム共通の考え方や尺度(アセスメント・ポリシー)に則った成果の評価

→ その結果を踏まえたプログラムの改善・進化という一連の改革サイクルが機能する全学的な教学マネジメントの確立



➤ 学長を中心とするチーム：学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針、学修の成果に係る評価等の基準について、改革サイクルの確立という観点から相互に関連付けた情報発信に努める。

➤ 成果の評価：学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメント・テスト(学修到達度調査)、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にする。

➤ 教育プログラムの策定：CAP制やナンバリング等を実際に機能させながら、教員が個々の授業科目の充実にエネルギーを投入することを可能とするように授業科目の整理・統合と連携を図る。

➤ 教員評価：学位授与の方針に基づく組織的な教育への参画、貢献についての教員評価を行い、教員の教育力の向上・改善や処遇の決定、顕彰等に活用する。



4

(イ) 全学的な改革サイクルの確立のため、ワークショップを中心に「プログラムとしての学士課程教育」という基本的な認識の共有や教育方法に関する技術の向上に資する充実したFDを実施する。そのために、専門家(ファカルティ・ディベロッパー)の養成や確保、活用を図る。

(ウ) 学部等の縦割りの構造を超えて学士課程教育をプログラムとして機能させるためには、教員だけではなく、職員等の専門スタッフの育成と教育課程の形成・編成への組織的参画が必要であり、例えば、他大学との事務の共同実施等でリソースを再配置するといった工夫もしつつ、その確保と養成を図る。



5

◆何故「学修」なのか？

・「学修」or「学習」or「学び」

学修： 正課の授業に特化？

ex. 大学設置基準：第二十一条 2 ……単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもつて構成することを標準



・今の時代に必要な「学び」は正課を「学修」することだけでよいのか？

ex. 答申の流れ： 新たな未来を築くため → 答えのない問題に解を見出す批判的・合理的思考力、チームワーク・リーダーシップ、創造力・構想力、想定外の困難に際しての的確な判断力 → 主体的「学び」 ……正課外の「学び」の役割は？



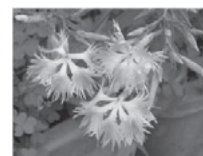
◆「学修」時間増加に向けての諸方策？

- ・「教育課程の体系化(ex.ナンバリング)」、「組織的な教育の実施」、「シラバスの充実」、「全学的教学マネジメントの確立」

・・・「答えのない」、「創造力・構想力」、etc.という点との矛盾はないか？専門的知識・技能を効率的・効果的に身に付けるためには必要も、主体的学びの増進にどのくらい有効か？

- ・ 主体的学び ← 学習意欲

学習行動 ①始発因：自己決定性
②行動因：自己効力感
③結果因：行動・結果の随伴性認知



■『自学自習等 学生の学習生活実態調査』

- 実施主体：京都大学FD研究検討委員会
- 方法：科目履修の確認時期に、京都大学教務情報システム(KULASIS)を用いて依頼
- 調査時期：2011年10月末～11月はじめ



8

回答者・回答率(1/3)

全体

	回答者数	男性	女性
1回生	1221	905	316
2回生	945	714	231
3回生	562	417	145
4回生	607*	465	142
全体	3335	2501	834

**“5回生以上(留年)”
89名含む

	回答者数	対象者数	回答率
1-3回生	2728	8965	30.4%
4回生	607*	4085	14.9%
全体	3335	13050	25.6%

**“5回生以上(留年)”
89名含む



(by溝上慎一)

9

回答者・回答率(2/3)

1-3回生

	回答者数	対象者数	回答率(%)
総合人間学部	137	384	35.7
文学部	240	673	35.7
教育学部	54	192	28.1
法学部	294	1031	28.5
経済学部	217	778	27.9
理学部	318	943	33.7
医学部	228	792	28.8
薬学部	96	247	38.9
工学部	848	2977	28.5
農学部	296	948	31.2
全体	2728	8965	30.4



(by溝上慎一)

回答者・回答率(3/3)

4回生

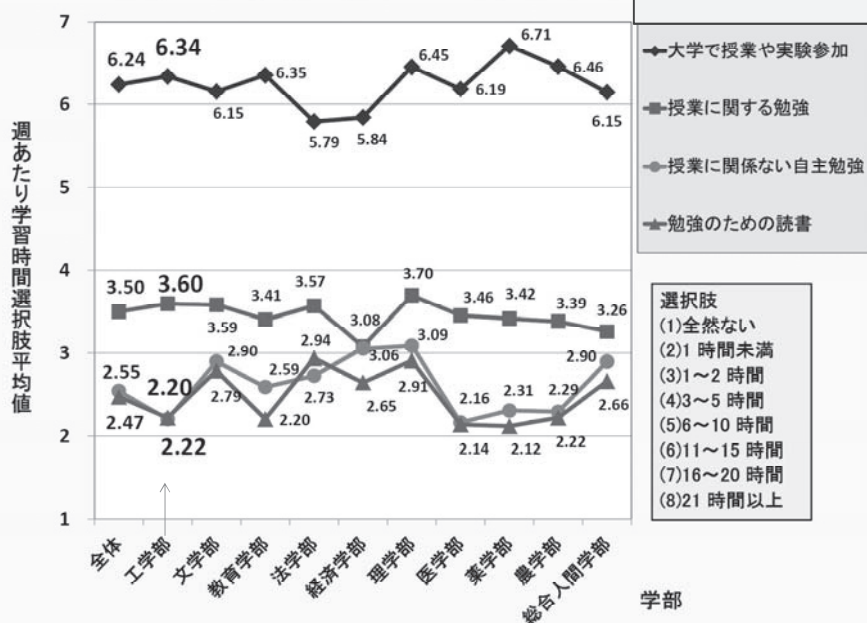
	回答者数	対象者数	回答率(%)
総合人間学部	32	178	18.0
文学部	67	345	19.4
教育学部	18	94	19.1
法学部	73	518	14.1
経済学部	60	393	15.3
理学部	53	441	12.0
医学部	30	284	10.6
薬学部	18	93	19.4
工学部	193	1349	14.3
農学部	63	390	16.2
全体	607	4085	14.9

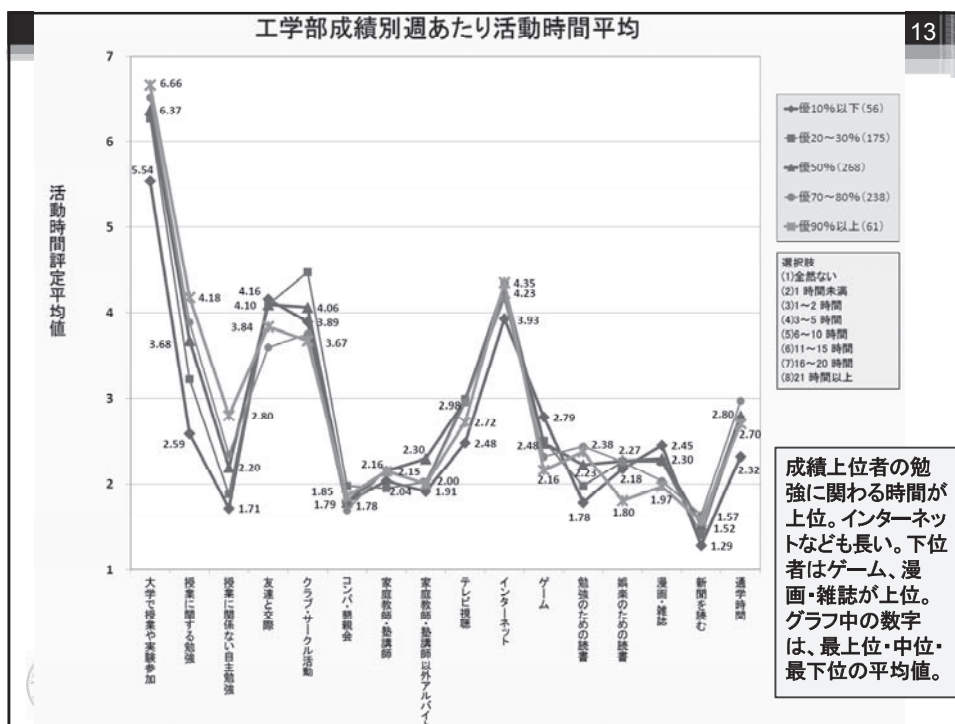
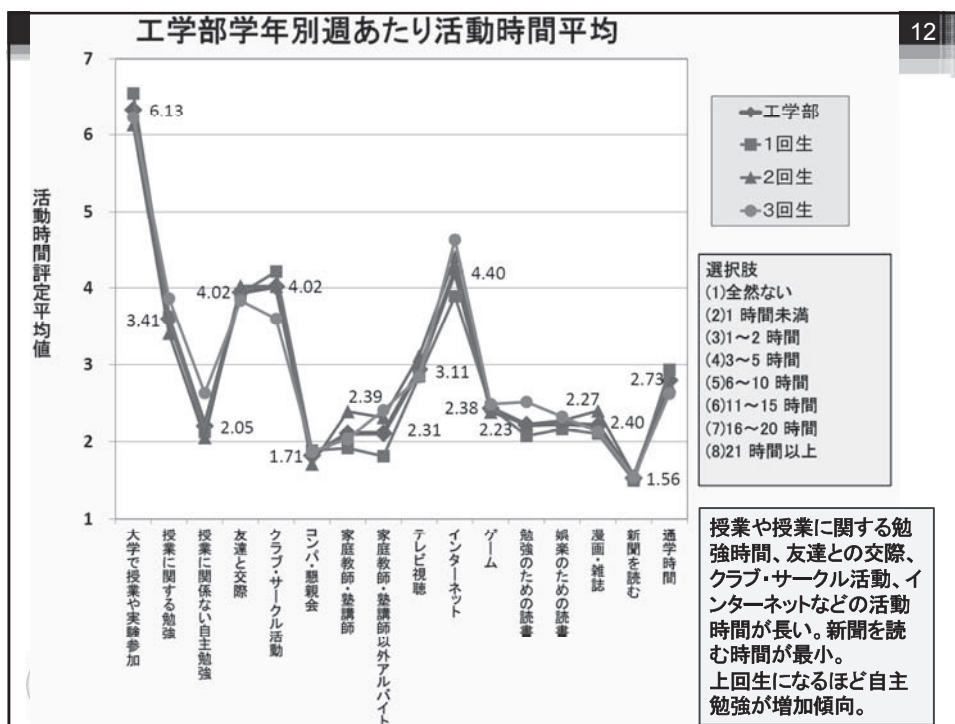


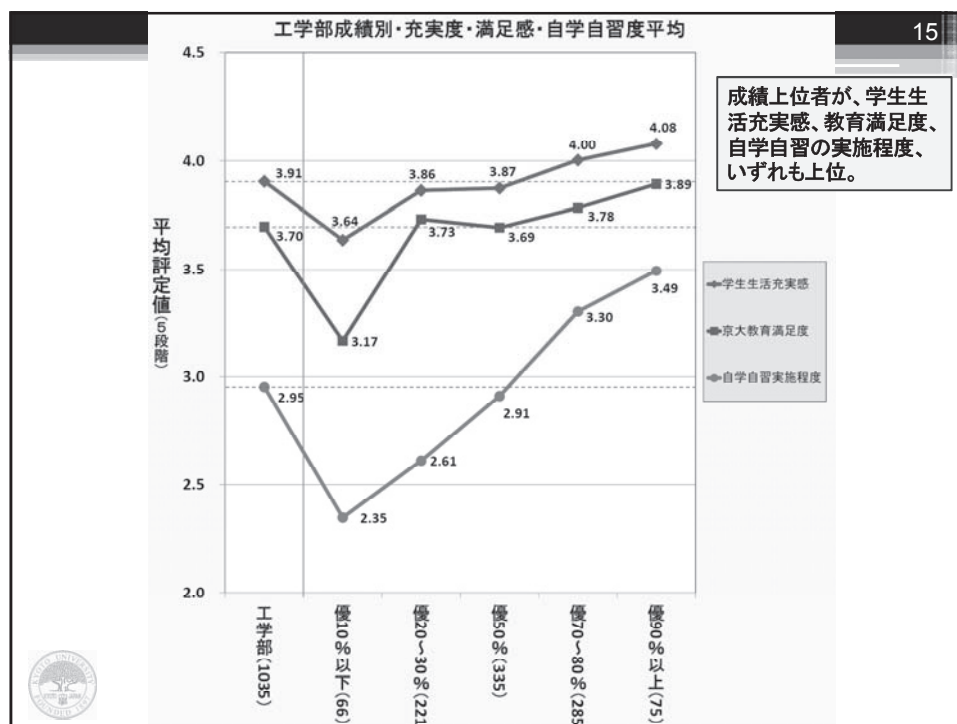
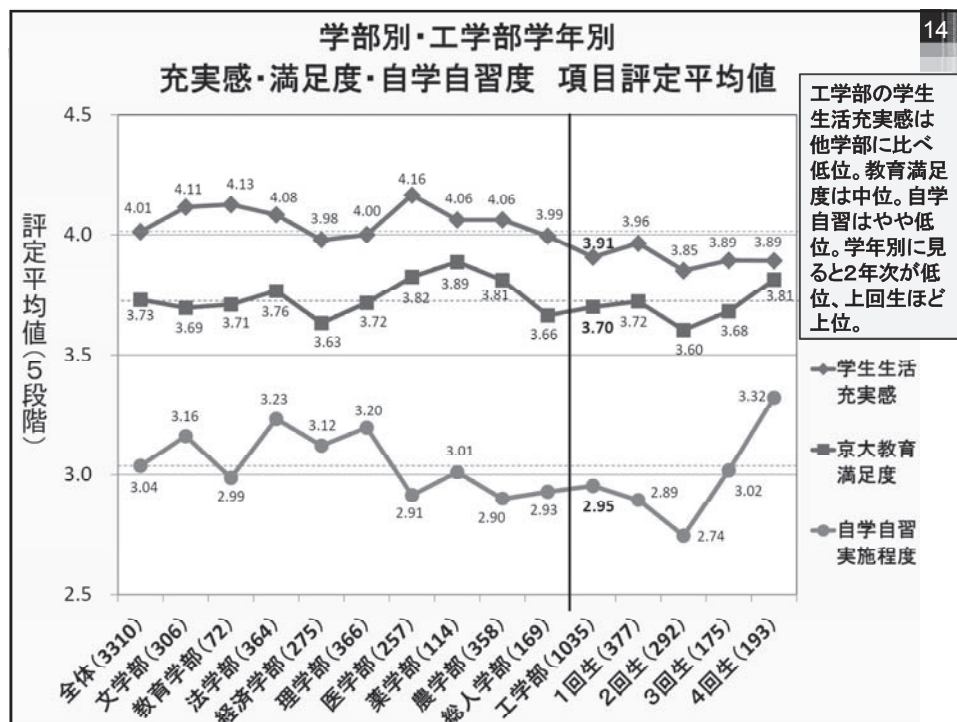
工学部 計 $848 + 193 = 1041$

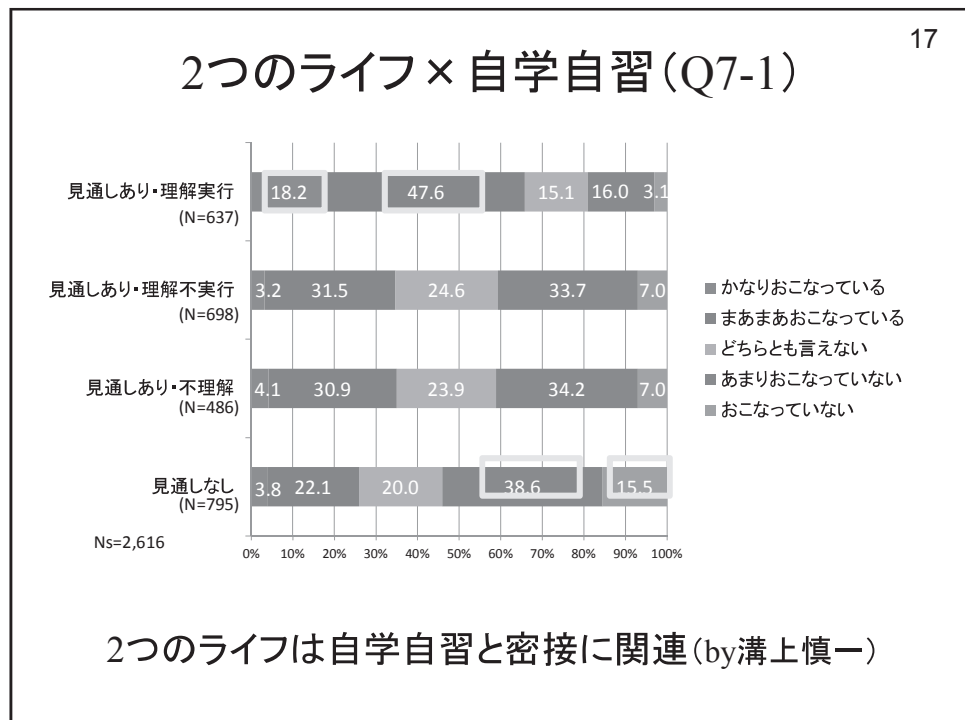
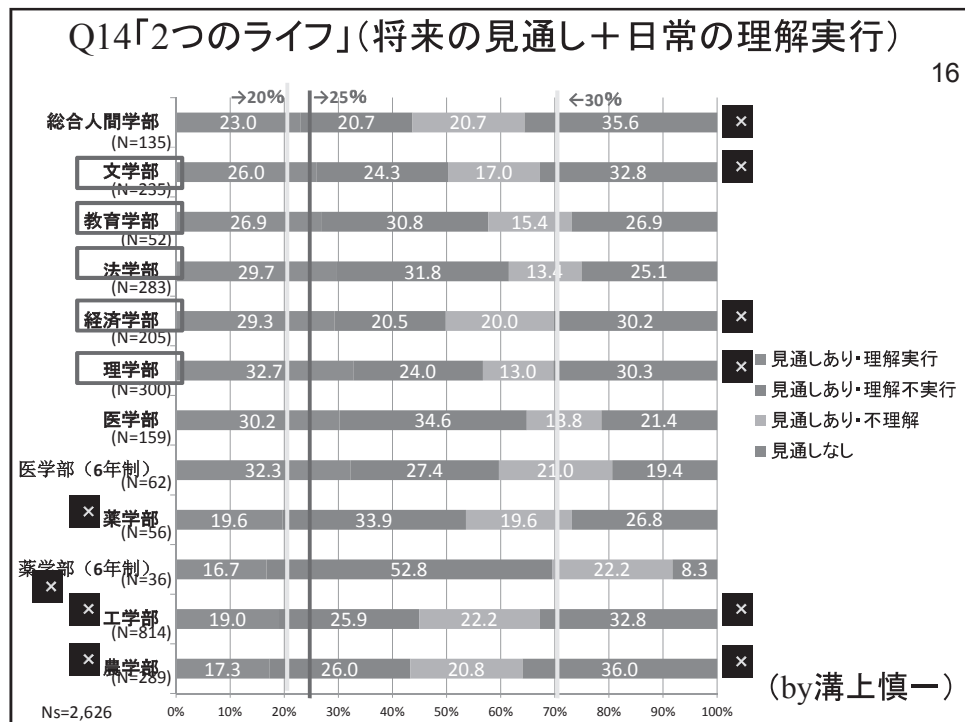
(by溝上慎一)

週あたり学習時間の学部別平均

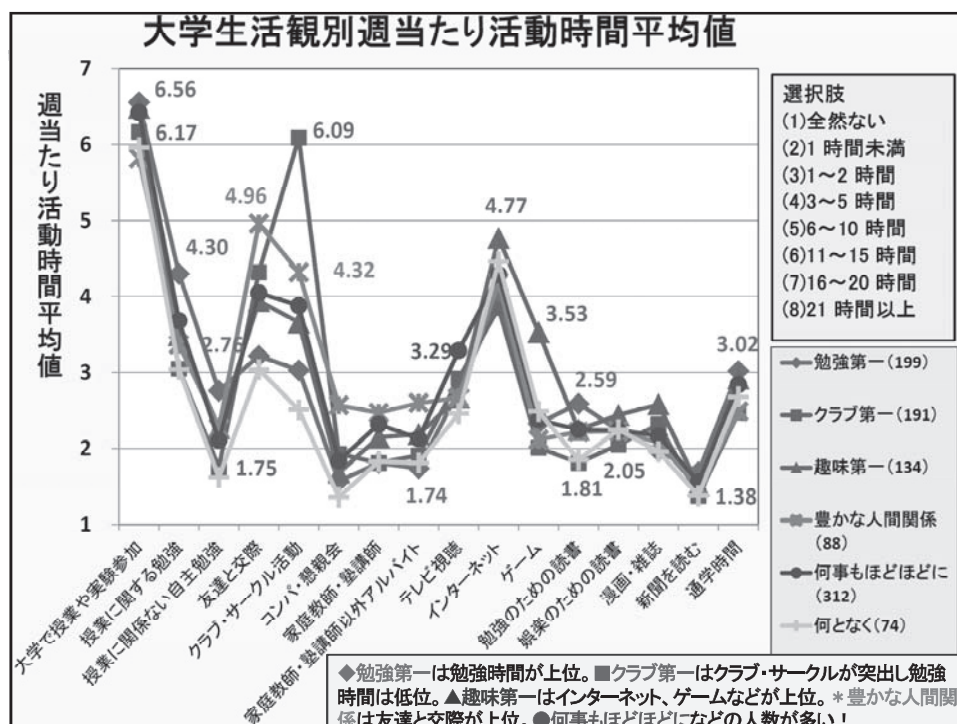
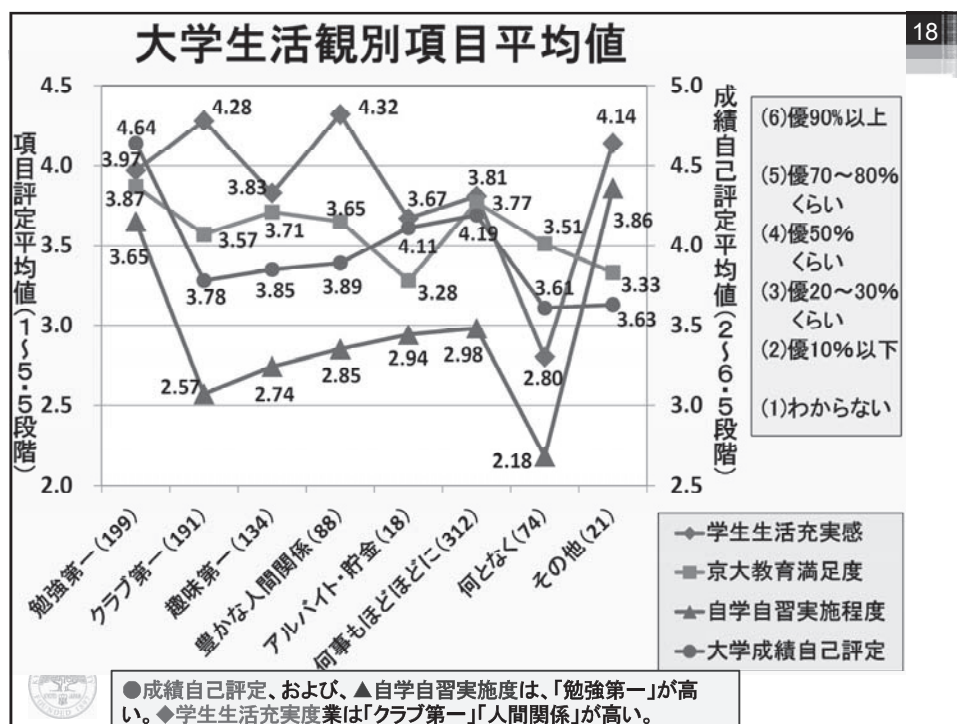


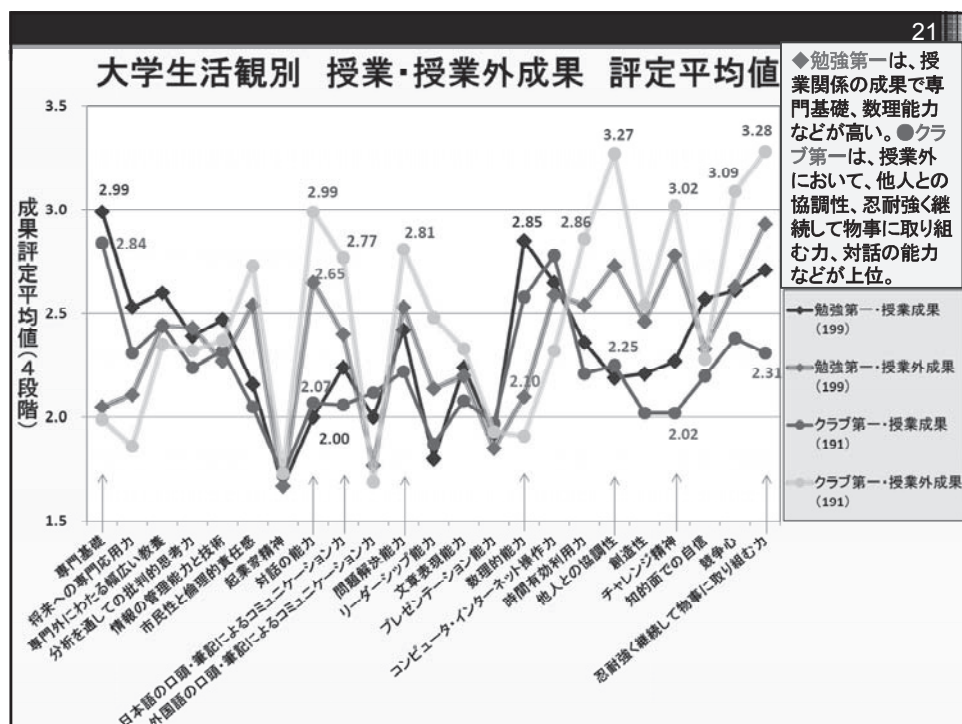
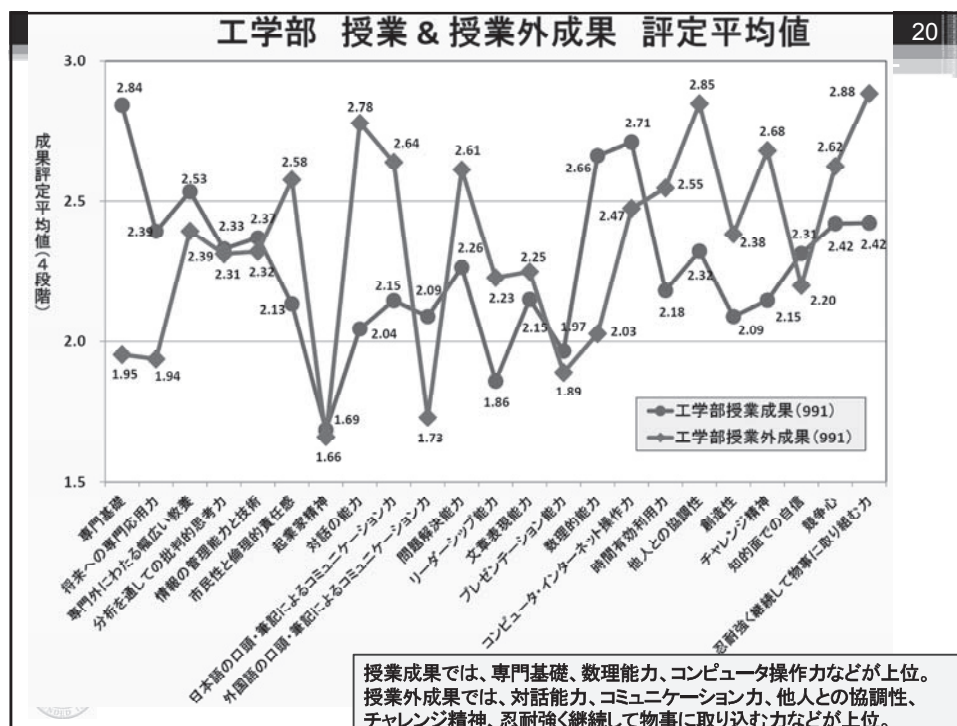






2つのライフは自学自習と密接に関連 (by 溝上慎一)





◆実質的学び・実質的FDを目指して

➤学生の学びの実質化が求められる

学生の学び実質化 = 正課・正課外学習による学生の成長
授業外学習時間の増加
アクティブ・ラーニングの深化

➤単独の方策ではなく総合的教育的取組が必要

FD (Faculty Development) の実質化も求められる
= 教員が担当する一つの授業だけでなく
講座・学科などにおける協同的アプローチ



総合的アプローチ そう容易なことではないが・・・

ご清聴
ありがとう
ございます



了

II-7. PHD Movie 上映会・パネルディスカッション

1. 上映会・パネルディスカッションの概要

当センターでは、アメリカの大学院生の普段の生活をコミカルかつシニカルに描き、人気を博している PHD Comics (<http://www.phdcomics.com/>) の実写版である “PHD Movie” (<http://www.phdcomics.com/movie/index.php>) を、2012 年 5 月 23 日 (水) に附属図書館 3 階ライブラリ・ホールにて、無料の上映会を実施した。“PHD Movie” のプレビューは、以下のサイトからも視聴することが可能である (<http://www.youtube.com/watch?v=CvfeRN1dRP0>)。今回の上映会の開催の概要は以下の通りであり、上映日当日は、本学の大学院生・教員を中心に 57 名の参加があった。

- ・日時： 2012 年 5 月 23 日 (水) 14:30～17:30 (14:00 受付開始)
- ・場所： 京都大学 附属図書館 ライブラリ・ホール (3 階)
- ・参加者： どなたでも参加可能
- ・会場の定員： 120 名
- ・事前申込： 必要 (当センター内サイトの申込みフォームから事前受付を行った)
- ・費用： 無料
- ・当日のスケジュール
 - 14:00 開場・受付開始 (座席は自由席)
 - 14:30 - 15:45
映画の上映 (英語音声のみ・字幕付き)
 - 15:45 - 16:00
飯吉透教授 (京都大学高等教育研究開発推進センター) より解説
 - 16:00 - 16:30
大学院生・留学生による指定討論
 - 16:30 - 17:30
全体ディスカッション
- ・司会進行： 高橋雄介特定助教 (京都大学高等教育研究開発推進センター)

2. 上映会・パネルディスカッションの目的・ねらい

本企画の主たる目的は、アメリカの大学院生の生活実態とはどのようなものか、この映画を通じてその一端に触れ、日本の学生とどのような点で共通しているか、もしくは異なっているのかを探るきっかけにすることであった。

この映画は、基本的には英語音声のみで公開されている。幸いなことに、上映日の少し前に日本語を含むいくつかの言語の字幕がサイト上で公開された。上映会の告知の段階では、英語音声のみで字幕や吹き替えはないと案内していたが、これはうれしい誤算であり、上映日当日は急きょ字幕付きで上映を行った。しかしながら、それでも英語のネイティブ・スピーカーのしゃべるナチュラル・スピードの映像内容をすべて理解しきることは難しい場合もある。そこ

で、本上映会では、より深い理解を促すため、本センター・飯吉透教授が本人の実体験も交えながら、劇中で印象に残ったシーンや文化的な差異で日本人の大学院生には少し分かりにくかったかもしれないシーンをいくつか取り上げて解説を行った。

さらに、この映画は、本学における上映日より前に、日本国内において既にいくつかの大学において上映されていた。しかし、そのほとんどは映画を上映するのみで留まっていた。劇中で登場する“教員から突然仕事が降ってくる”“実験や分析はいつも単純で退屈で刺激や変化が欲しいと感じている”などのシーンは、確かに視聴者の共感と呼ぶものの、「あるある」という共感を起こすだけでは理解は深まらない。そこで、本学では、映画の上映のみに留まらず、大学院生・留学生・教員を交えたディスカッションを行い、大学院生の生活やキャリア形成のあり方についてさらに理解を深めることを第二の目的として設定した。したがって、映画の上映のみの参加は原則として受け付けないこととした。

3. パネル・ディスカッションのまとめ

この映画のタイトルは、「PHD Movie」であって「PhD Movie」ではない。すべて大文字になっていることには意味があり、これは無論直接的には「博士号」のことを意味するが、それだけではなく、“Piled Higher and Deeper”の略でもある。英語圏において、博士号のことを“Piled Higher and Deeper”の略であるとするジョークのひとつで、博士号を取得するということは、高く積み上げるほどのたくさんの書類（論文・実験データ・手続き書類など）に埋もれただけだという皮肉から来ている。日本でも、大学院に進学することを「入院」、無事卒業することを「退院」などと表現したりすることに近いかもしれない。

この映画を、大学院生が日々苦悩しながら過ごす生活ドラマとして捉えると、主人公がアメリカ人であっても日本人であっても、そして日本に留学している海外からの大学院生であっても、共感できる部分は多い。大学院生が抱える自分自身の研究・興味に対する不安や行き詰まり、研究室における人間関係の悩みは実際問題として誰しもが経験するところである。

当センター・井藤美由紀氏（研究員）からは、この種の悩みは、実のところ大学院生特有というわけではなく、一般的な社会人であっても経験するはずであるとの指摘があった。「五里霧中 暗中模索 支離滅裂 七転八倒 大器晩成」という四字熟語だけからできた学生短歌も紹介され、大学院生であろうと学部生であろうと、そして社会に出た若者であったとしても、皆それぞれがそれぞれに日々もがいているということが窺える。教育学研究科の大学院生からは、このような悩みに対しては、同じく研究活動を行っている仲間の支えが必要不可欠であり、それと同時に生活が研究活動一辺倒にならないようリフレッシュを行うことも日常的に必要であるという意見が出された。

また、当センター・松下佳代教授から、劇中に頻繁に出てきたティーチング・アシスタント（TA）の制度を日本でも取り入れることについてどのように思うか、という問題提起が成された。これに対しては、アメリカは教員が大学院生を雇用するというマーケット・システムが確立しているのに対して、日本の場合は学生は大学からのサービスの受け手であるという文化的な差異があるので、このままでの適用は難しいのではないかという意見が出された。一方で、TAとして雇用されると教育者としては十分な養成を受けられると思われるが、研究者としてのやり立ちが遅れるのではないかという指摘もあり、現在アメリカで採用されているTA制度をそのまま日本国内に輸入すると、教員の教育負担の学生への押し付けにしかならないのではないかという懸念が呈された。さらにそれに対して、学生は教員の“research monkey”であっても

よいのではないか（大学院在籍時は教員の指示に従って研究と教育に勤しむだけの存在であってもよいのではないか）という意見も出た。これらの意見を受けて、当センターの飯吉透教授は、TA や RA（Research Assistant）を統括する立場にあった自身の経験から、TA や RA の経験そしてそれを統括するという経験は役に立つはずだが、それを日本国内に限定して考えてみると、キャリア・パスの選択肢が少ないために、その経験の有用性についての実感が得られにくいかもしれないというまとめがあった。

最後に、当センター・大塚雄作教授から興味深い「なぞかけ」を含む意見が出された。博士号とかけて足の裏のご飯粒と解く。その心は、取らないと気持ちが悪いが、取っても食えない。もし現状がこのなぞかけのような状況にあるとすると、教育学研究科の大学院生から、大学院に入ってから最速の5年間で学位を取得すべきなのかどうか、もしそうなのであればその意義はどこにあるのかという問題提起が成された。この問いに端的に答えることは非常に難しいが、大学院に進学するということは、ある意味において「ふつう」の人生ではなくなるということは認識しながらも、それでいて閉じたキャリア・パスでは考えないようにすべきであるし（大学のアカデミック・ポストだけが進むべき道ではない）、これから先、産学連携など学理に基づく社会的な要請は必ずや大きいはずであるので、“PHD”もとい“Ph.D.”の社会的認知度をよりいっそう高めていくような自助努力が必要そうである。

<当日の様子>

- ・上映直後、本センター・飯吉透教授より、実体験を交えた解説が行われた。



- ・ディスカッサントとして、日本で学ぶ留学生の意見・問題提起があり、そしてフロアから日本人大学院生との意見交換が活発に行われた。



（高橋 雄介）

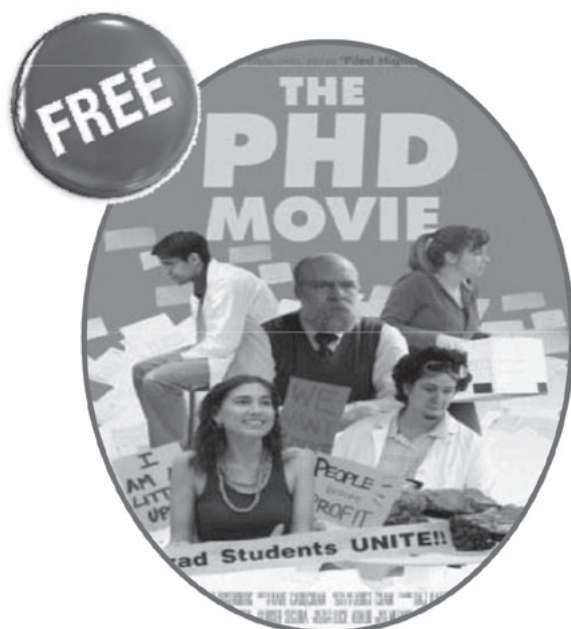
The PhD Movie

上映会・パネルディスカッション

アメリカの大学院生の生活をコミカルに描き、人気を博しているPhD Comicsを実写化した“PhD Movie”を無料で上映します。アメリカの大学院生の生活実態とはどのようなものか、映画を通じてその一端に触れ、日本の学生とどのような点で共通しているか、もしくは異なっているのかを探るきっかけにいただければと思います。

日本国内でも既にいくつかの大学において上映されていますが、京都大学では、映画の上映のみに留まらず、本学の大学院生・留学生・教員を交えてディスカッションを行い、自分たちの大学院生活やキャリア形成のあり方についてさらに理解を深めたいと考えています。映画の上映のみの参加はできません。

- 日時： 2012年 5月 23日(水) 14:30～17:30
- 場所： 京都大学 附属図書館 ライブラリーホール（3階）
- 参加者： 学内者限定（※ 附属図書館への入館に学生証・職員証が必要です）
- 定員： 120名
- 事前申込： 必要（URL: <http://goo.gl/BvjVd>）



当日のスケジュール

14:30 - 15:45

映画の上映（英語音声のみ・字幕無し）

15:15 - 16:00

飯吉透 教授（京都大学高等教育研究開発推進センター）
より解説

16:00 - 16:30

大学院生・留学生による指定討論

16:30 - 17:30

全体ディスカッション

オーガナイザー:

高橋雄介（京都大学高等教育研究開発推進センター特定助教）

主催： 京都大学高等教育研究開発推進センター